絵馬（猿駒曳）のレプリカ（鹿田遺跡第24次調査）

保存処理後の烏帽子（鹿田遺跡第25次調査）

詳細は27頁

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2014

2016年３月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

本学の鹿田キャンパス近辺は、古代から中世にかけて、奈良の東大寺による荘園となっており、なかなかの賑わいをみせていたようです。荘園領主たちは、大きな財力と新しい技術や知識によって「インフラ」の整備に努め、地域の開発を進めていきました。戦乱に目が向けられることの多い時代ですが、地域では着実に新しい社会への歩みが進められていたのです。

本センターでは、30年以上にわたってこの鹿田キャンパス内の発掘調査を続けており、そうした荘園の歩みを詳細に明らかにできる条件がようやく整ってきました。そこで、2015年１月に「鹿田荘の人と時代」という展示会を開催し、講演会では荘園研究の現状や、鹿田荘をめぐる文献資料と考古資料の両面からアプローチを試みました。地割や屋敷地のありかたが時代を追って大きく変わっていく様相は、まさに「大地に刻まれた歴史」を実感させられるものです。本書にそうした講演会の内容が収録されていますのでご活用ください。ちなみに、鹿田の語源はよくわかりませんが、古くは「かた」と呼ばれていたようです。

昨年度に鹿田遺跡から出土した２点の絵馬は、レプリカの形で新しくよみがえりました。レプリカ作成の専門家による観察で、色彩や表現にかんする理解がさらに進んでいます。また、同じ鹿田遺跡から、2014年度には鹿田荘に相当する時期の墓が２基みつかり、白磁碗や青磁碗などの豊かな副葬品が出土しました。鎌倉時代後半の墓では頭部に烏帽子をかぶった状態の人骨が発見されており、烏帽子には漆が何重にも塗り重ねられていました。そのまま土ごと切り取って保存処理に出したところ、漆黒という言葉そのものの美しさと艶のある資料が姿を現しました。青磁碗もいくらか欠損がありましたが、高い技術で修復が行われています。

以上のような成果の詳細な報告にはいま少し時間が必要ですが、概要を本書で紹介させていただきました。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
センター長（理事・事務局長）　門　岡　裕　一
副センター長（大学院社会文化科学研究科 教授）　新　納　　泉

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2014

目　　次

第１章　津島岡大遺跡の調査研究

第１節　立会調査の概要

１．調査の実施状況……（山口雄治）1

２．Ｊテラス新営……1

第２節　津島岡大遺跡の研究

１．津島岡大遺跡出土打製石斧の基礎的検討……（山口）5

第２章　鹿田遺跡の調査研究

第１節　発掘調査の概要

１．鹿田遺跡第25次調査……（岩﨑志保）10

２．鹿田遺跡第26次調査……（山口）16

第２節　立会調査の概要

１．調査の概要……（山口）21

２．動物実験施設改修工事……21

３．グラウンド復旧工事……22

４．医歯薬融合棟新営……24

第３章　調査資料の整理・研究および公開・活用

第１節　調査資料の整理・研究

１．調査資料の整理……（山口）27

２．調査資料の保存処理……27

第２節　調査成果の公開・活用

１．公開・開示……（岩﨑）28

２．資料・施設等の利活用……30

第３節　調査研究員の個別研究活動

１．外部資金の獲得状況……33

２．論文・資料報告ほか……33

３．研究発表・講演ほか……34

第４章　2014年度の調査・研究のまとめ……（山口）35

第16回キャンパス発掘成果展『鹿田荘の人と時代』講演会記録

１．荘園遺跡研究の現状と鹿田遺跡……（宇野隆夫）36

２．文献からみた鹿田庄……（久野修義）45

３．平安・鎌倉時代の鹿田遺跡……（山本悦世）54

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程・組織等
１．岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの規程 60
２．2014年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織 62
３．岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項 63
４．岡山大学埋蔵文化財調査研究センター教員選考に関する申し合わせの一部改正新旧対照表 64

2013年度以前の調査・研究一覧 67

挿　図　目　次

図１　調査地点の位置 1
図２　本調査地点検出遺構平面図 1
図３　2014年度の調査地点【１】
－津島地区－ 3～4
図４　打製石斧の形態とサイズ 6
図５　打製石斧の石材とサイズ 7
図６　調査地点の位置 11
図７　土層断面図 12
図８　検出遺構全体図－弥生～古墳時代初頭－ 14
図９　検出遺構全体図
－平安時代後半～江戸時代－ 14
図10　墓１（東から） 15
図11　墓２（西から） 15
図12　調査地点の位置 17
図13　土層断面柱状図 18
図14　検出遺構全体図 19
図15　畦畔と溝完掘状況（北から） 20
図16　畠状遺構検出状況（東から） 20
図17　本調査地点の位置 21
図18　雨水排水桝地点北面断面図 21
図19　機械設備桝地点　平・断面図 22
図20　調査地点の位置と断面柱状図 23
図21　出土貝類 23
図22　本調査地点の位置 24
図23　排水桝①・カーブミラー基礎地点断面図 24
図24　2014年度の調査地点【２】
－鹿田地区－ 26
図25　絵馬（牛）のレプリカ 27
図26　鎌倉時代木棺墓の復元展示 28
図27　授業の様子 29
図28　講演会の様子 29
図29　鹿田遺跡のキャラクター 29
図30　展示会参加者の年齢構成 30
図31　在地有力層主導型モデル 38
図32　古代荘園有力寺社主導モデル 39
図33　古代荘園・民衆の経営拠点モデル 39
図34　古代後期荘園 40
図35　富山県福光町諏訪社旧社地 41
図36　中世荘園景観の復元モデル 43
図37　中世の交易空間
（広島県草戸千軒町遺跡） 43
図38「備前国図（慶長年間）」
（岡山大学附属図書館所蔵） 47
図39「備前国図（慶長年間）」部分拡大 47
図40「備前国九郡絵図（寛永古図）」
（岡山大学附属図書館所蔵） 48
図41「備前国九郡絵図」部分拡大（一部加筆） 48
図42　備前国鹿田庄梶取解
（長徳４(998)年２月21日）京都国立博物館
「稿本北山抄巻十　紙背文書」 51
図43　松田氏略系図 53
図44　旭川西岸平野部の遺跡分布と鹿田遺跡
の位置 54
図45　旭川流域の古地形復元と遺跡分布 55
図46　鹿田遺跡周辺の発掘調査 55
図47　鹿田遺跡１次調査地点－奈良時代後半～
平安時代前期遺構配置－ 56
図48　平安時代の主要遺構配置 57

図49　鎌倉時代の主要遺構配置・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
図50　居館に変貌する屋敷地・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
図51　岡山大学の位置と周辺の遺跡分布・・・・・・・・ 81
図52　津島地区全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
図53　2013年度以前の調査地点【１】
　　－津島地区－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83～84
図54　2013年度以前の調査地点【２】
　　－鹿田地区－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
図55　2013年度以前の調査地点【３】
　　－三朝地区－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
図56　2013年度以前の調査地点【４】
　　－東山地区－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
図57　2013年度以前の調査地点【５】
　　－倉敷地区－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86

表　目　次

表１　2014年度の調査地点【１】津島地区・・・・・・・ 2
表２　平面形態と刃部形態・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
表３　平面・刃部形態と摩滅・擦痕・・・・・・・・・・・・・ 6
表４　石材の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
表５　2014年度の調査地点【２】鹿田地区・・・・・・ 25
表６　木器保存処理工程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
表７　2014年度の非常勤講師の委託依頼・・・・・・・・ 31
表８　『備陽記』巻十にみえる御野郡の村々名・・・ 49
表９　1982年度以前の構内主要調査
　　（1980～1982年度）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
表10　2013年度以前の構内主要調査
　　（1983～2013年度）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
表11　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要
　　（2015年３月現在）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
表12　埋蔵文化財調査室刊行物・・・・・・・・・・・・・・・・ 78
表13　埋蔵文化財調査研究センター刊行物
　　（2015年３月まで）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78

例　　言

1．本紀要は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学構内において2014年４月１日から2015年３月31日までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果およびセンターの活動についてまとめたものである。
2．本紀要において報告している津島岡大遺跡は岡山市北区津島中一丁目～三丁目１－１、鹿田遺跡は岡山市北区鹿田町二丁目５－１に所在する。
3．執筆者は、目次に記載すると共に、原則として、本センター教員の場合は文末に、本センター以外の場合は文頭に記した。
4．編集は新納泉副センター長・山本悦世センター室長の指導のもと、山口雄治が担当した。

凡　　例

1．岡山大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、2002（平成14）年４月１日から施行された「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」に基づき、世界測地系を採用し、構内座標を次のように定めている。
　1）津島地区では、国土座標第Ⅴ座標系の座標北を基軸とし、（X，Y）＝（－144,156.4617m，－37,246.7496m）を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は一辺50mの方格で分割した区画を用いている。
　2）鹿田地区では、国土座標第Ⅴ座標系の座標北より東に15°振り出した座標軸を基軸とし、（X，Y）＝（－149,456.3718m，－37,646.7700m）を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は一辺５mの方格による地区割りを用いている。
　3）挿図中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は国土座標系の座標北を、その他は磁北を用いている。
2．岡山大学敷地内で調査地点を示す場合、周知の遺跡にあたる場合はその遺跡名を、それ以外の場合は、地区名を付して示す。
3．調査名称は、「発掘調査」に分類したものは、遺跡ごとに調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」、「立会調査」に分類したものは、原則、原因となった工事名を使用している。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して調査したものは、「試掘･確認調査」に分類する。
4．付表に記載した既往の調査一覧は、掘削深度が中世層以下に達するかあるいは遺構などが確認された調査のみを掲載している。未掲載分も含め、すべてのデータは、当センターにおいて保管している。
5．本文などで使用している調査番号は表１および表５と一致する。
6．本紀要に掲載の地形図（図52）は、岡山市域図を複写したものである。
7．土層注記のうち、包合物については特徴的なものについて（　）内に記し、特に顕著なものを◎で示した。

第１章　津島岡大遺跡の調査研究

第１節　立会調査の概要

１．調査の実施状況

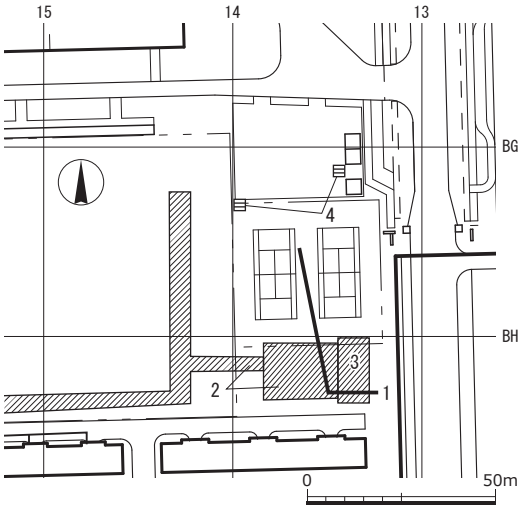
2014年度は津島地区で13事業27件の立会調査を実施した（表１）。事業内容の内訳は、Ｊテラス新営に伴うものが11件あり多くを占める。その他職員宿舎の整備やガス漏れ定期点検・修理に伴うもの等であった。これらの内、Ｊテラス新営（調査番号８）では旧陸軍施設に関連する構造物が確認された。津島宿泊所電柱新設（調査番号12）では中世層以下まで掘削が行われたが、直径40cm、深さ2.7mの規模でのオーガー掘削であったため、直接土層断面を観察することはできなかった。本節ではＪテラス新営（調査番号８）について報告する。

２．Ｊテラス新営

ａ．調査地点の位置

本調査地点は、津島地区西キャンパスの南東にあたる（BG・BH13区、図１・図３）。本調査は、新たな福利厚生施設であるＪテラスの新営に伴う排水管工事と共に実施された。

本調査地点の周辺では、第２次調査[1]、第８次調査[2]、Ｊテラス新営に伴う試掘・確認調査[3]が行われており、弥生時代前～中期の溝・畝状遺構（第２次）、古代の土坑・畦畔（第８次）、縄文時代のピット・弥生時代前期以降の土坑（試掘・確認）などが検出されている。



1. 本調査地点　3. 第８次発掘調査B地点
2. 第２次発掘調査地点　4. 2013年度試掘・確認調査地点

図１　調査地点の位置（縮尺1/2,000）

ｂ．調査成果

掘削の規模は、長さ46.5m、幅0.7mである。掘削深度は0.7mであり、造成土内に収まるものであったが、排水管管路東端部の地表下約0.45m（造成土内）において、旧陸軍関連の水路を確認した（図２）。

水路は南北方向で、西側の石列のみ残存する。東側の石列は調査範囲外にあると考えられることから、水路の幅は50cm以上と判断される。底面の形状、深さについては、工事掘削の深度が底部に達していないため、その詳細は不明である。石列は、１段のみであった。石材の大きさは長さ30～40cm、幅45cm、厚さ30cmを測り、三角形状の石材を組み合わせている。その底面には、非常にかたく締まった黄色砂が認められた。石列の西側には、楕円形の礫が多く確認されており、石列を固定するために使われたものと考えられる。

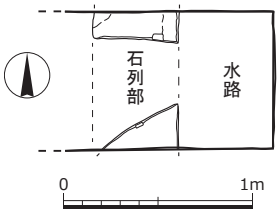


図２　本調査地点検出遺構平面図　（縮尺１/40）

ｃ．まとめ

本調査地点では終戦時に、中国軍管区歩兵第五補充隊が配置されており、今回確認された水路は旧陸軍に関連する建物に附属するものであったと考えられる。津島キャンパス内では、文・法・経フェンス改修工事に伴う調査[4]や大学会館周辺他環境整備工事[5]において、ほぼ同様の水路が確認されている。今後も旧陸軍関連施設の

建物配置に関する考古資料として記録を行っていきたい。　（山口雄治）

註

１）吉留秀敏・栄一郎編1986『岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ』岡山大学埋蔵文化財調査室

２）富樫孝志編1995『津島岡大遺跡』５　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

３）野崎貴博2015「Ｊテラス新営予定地」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2013』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

４）南健太郎2013「文・法・経フェンス改修工事に伴う調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

５）南健太郎2015「大学会館周辺他環境整備工事」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2013』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

表１　2014年度の調査地点【１】津島地区

種類	調査番号	工事名称		調査期間	構内座標	調査深度（GL-m）	造成土厚（m）	内　容
立会	1	Ｊテラス新営	給水管	6/5・9・11	BF13～15	0.8～0.9	－	造成土内
	2		メーター設置	6/11	BF13	0.70	－	造成土内
	3		排水、集水桝	7/14・17	BF・BG13	0.70	－	造成土内
	4		電気管路	7/22	BF・BG14	0.73	－	造成土内
	5		フェンス基礎	8/3-12	BF・BG14	0.50	－	造成土内
	6		水路蓋	8/3-12	BG13	0.50	－	造成土内
	7		排水、集水桝	8/7・8・12	BG・BH13	0.85	－	造成土内
	8		排水管	8/19-29	BG・BH13	0.70	－	造成土内にて 旧陸軍南北水路確認
	9		集水桝	8/19-29	BG・BH13	0.90	－	造成土内
	10		樹木植樹	9/12	BG・BH13・14	0.5～0.8	－	造成土内
	11		案内板基礎	9/17	BF13	0.90	－	造成土内
	12	津島宿泊所	電柱新設工事	7/10	BJ16	2.70	－	オーガー掘削 GL-1.6～1.8mで黒色土
	13	守衛所	生活配管敷設替え工事	7/24	BA13	0.65	－	造成土内
	14	大学構内法定漏洩検査及び漏洩修理	ガス管修理	8/7	BA11	1.50	－	造成土内
	15	清水記念体育館	水道管漏水	9/4	BE10	0.75	－	既設内
	16	職員宿舎	ガス管取替工事	12/8・22	BH・BI13・14・BI18	0.8～1.8	－	既設内
	17		駐車場整備・伐根	2/6	BH14・15	0.2～0.4	－	４本伐根、造成土内
	18		排水管改修	3/6・12	BI・BJ17・18	1.2～1.35	1.05	近代層まで掘削
	19	工学部13号館	耐震改修	1/6	AV05・6	1.80	－	既設内
	20	文法経２号館	接地極改修	2/20	AZ15	1.90	1.50	近世層まで掘削
	21	埋蔵文化財調査研究センター	洗い場屋根支柱基礎	3/2	AU11	0.60	－	既設内
	22	教育学部ほか	ガス管改修桝	3/2・3	AY～BA1～4	1.00	－	既設内
	23		ガス管切り替え部	3/13		0.88	0.60	近世層まで掘削
	24		ガス管位置確認	3/17	BA08	0.60	－	既設内
	25	構内道路整備	一般教養棟南舗装改修	3/9	BF9・10	0.2-0.6	－	樹木の根切り 造成土内
	26	さくら広場	掲揚ポール基礎	3/20	BC9	0.50	－	造成土内
	27	農学部	外灯	3/23・24	BE・BF16	1.00-1.05	－	既設内

第２節　津島岡大遺跡の研究

１．津島岡大遺跡出土打製石斧の基礎的検討

ａ．はじめに

打製石斧の出現と展開およびその評価は、縄文時代における経済様式の枠組みに大きな影響を与えてきた。西日本においては、所謂縄文時代後晩期農耕論にとって、打製石斧の評価が大きな鍵となってきたことは先学に詳しく、今更その詳細を述べるべくもあるまい。中国地方の縄文時代における打製石斧の出現については、後期、特に後期中葉以降に石器組成へ安定的に組み込まれることが、これまで多く指摘されてきた（平井1985、1993、杉山2003、敦賀2002、山口2010など）。そして打製石斧とともに打製刃器類も出現することから、この時期に画期が設定され、農耕との関連が指摘されてきた（例えば中越1993）。また、近年では後期中葉以前にも打製石斧が確認されるようになり、それを従来の東日本からの影響ではなく韓半島からの影響と考える説も登場するなど（幸泉2007、2008）再検討がなされてきている。

このように研究が進んでいるが、打製石斧と一言でくくられ、その内実についてはほとんど検討がなされていないのも事実である。出現の時期や石器組成に注意が向けられる一方で、器種そのものの分析についての研究（例えば板倉2007、稲田2006）は、必ずしも活発ではないといえよう。本来は、こうした基礎分析を経て数量や組成分析を行わなければ、農耕論との関連などは語れないはずである（阿部2006、稲田2005）。

小論では、こうした意識のもと、打製石斧の機能・用途を推定する前段階としての基礎的整理を行うことを目的とする。津島岡大遺跡では多くの打製石斧[1)]が出土しており、これらの形態、サイズ、石材、使用痕などについて確認し、合わせて周辺遺跡との比較を行うなかで、本遺跡出土打製石斧の特徴を整理したい。

ｂ．津島岡大遺跡出土打製石斧の概要

⑴　打製石斧の時期と対象資料

津島岡大遺跡では、全時期を通して79点の打製石斧（片）が出土している。時期ごとの内訳は、縄文時代後期57点、縄文時代晩期～弥生時代前期13点、その他弥生時代前期以降９点である。

縄文時代後期の資料は後期前～中葉、中葉および後期と報告された資料を指し、第５・６・７・９・11・15・17・22・28・31・32次調査出土資料が該当する。後期前～中葉土器と共に出土している打製石斧があるが、これらの資料の時期の下限は津雲Ａ式や彦崎ＫＩ式であり、縁帯文土器を遡る確実な資料はないといえる。本遺跡では、打製石斧の出現時期は後期前～中葉と考えられるが、その中で第５次調査27ｂ層出土資料（津島岡大Ⅳ群）は現時点でのひとつの定点といえる。また、本遺跡では後期後葉に属する遺物の出土がないことから、ここで後期とした57点の打製石斧の年代は、そのほとんどが後期前～中葉に属するものと考えられる。なお、第17次出土資料は後期前～中葉４点、突帯文期１点が確実な時期判別のできる資料であるが、その他に弥生時代以降の包含層から21点の出土を見ている。これらは、後期のものとして判断できるとの指摘があることから（高田2005）、後期資料として分析に含めることとした。

縄文時代晩期～弥生時代前期の資料は、突帯文期や晩期～弥生時代前期と報告された資料である。第３・６次を主として、第15・17・22次調査においても出土している。河道や包含層出土資料であり、これ以上時期を絞ることができないことから、晩期～弥生時代前期としておく。

それ以外にある９点は、弥生時代以降の包含層や遺構から出土した時期不明もしくは弥生時代前期以降の打製石斧である。なお、弥生時代前期以降と判断できる資料は３点のみであった[2)]。

小論では、縄文時代後期と晩期～弥生時代前期に属すると考えられる打製石斧70点について、以下基礎情報の整理を試みることとしたい。なお、出土地点と遺構に関する空間関係については、忽那氏による津島岡大遺跡内

における調査地点ごとの石器組成の分析があるため、ここでは扱わない（忽那2004）。

⑵　打製石斧の形態・サイズ・石材・摩滅痕

平面形態は、従来からの短冊形と撥形に分けることが可能である。短冊形は、両側縁がほぼ平行で基部と刃部の比率が１：1.5未満、撥形は両側縁が「ハ」の字状での比率が１：1.5以上とする（杉山2004）。刃部形態は直刃、円刃、長軸の中心線で線対称にならない偏刃などが認められるが、リダクションによる刃部形態の変形を考慮し、ここでは直刃であるかそうでないか程度の分類とし、前者をＡタイプ、後者をＢタイプと呼称する。

後期では、形態判別が可能な資料が43点あり、その内訳は短冊形が21点、撥形が22点である。また、刃部形態が判別可能な資料は35点あり、Ａタイプが18点、Ｂタイプが17点である。両者ともに、ほぼ50%であり、どちらかに偏るといったことは見受けられない。ただし、Ｂタイプとしたものが、その多種もタイプを包摂していることを考えれば、Ａタイプの方が若干多いといえるであろう。平面形態と刃部形態の両者がわかる資料は32点であったが、これについても特に大きな偏りを見せない（表２上）。

晩期～弥生時代前期では、形態判別可能な資料は９点で、短冊形５点、撥形４点とやはりほぼ50%である。刃部形態は９点が判別可能であり、Ａタイプ２点、Ｂタイプ７点と後者の比率が高くなる。平面形態と刃部形態の相関は、資料数が少ないこともあるが、先の刃部形態の比率が多いことを反映して短冊形、撥形ともにＢタイプが多い（表２下）。

次に時期ごとのサイズについて見てみたい（図４）。後期では明らかな欠損のない28資料を対象に、幅が平均4.5cm、長さが平均8.9cmである。同様に晩期～弥生時代前期では５資料を対象に、幅が平均4.6cm、長さが平均9.1cmである。両時期間のサイズにほとんど差のないことがわかる。ただし、晩期～弥生時代前期の打製石斧は資料数が少ないこともあり、長さにおいてバラツキが大きいことは注意を要する。５点中３点は９cmにも満たない長さである一方、本遺跡で最も大きな13cmを越える資料が存在する。なお、平面形態別に見ても、特に分布がまとまる様子はない。

刃部の残る資料について摩滅痕ないし擦痕のあるものは、後期では10点（31%）、晩期～弥生時代前期では３点（38%）で、３割程度の資料にみられるが、特定の形態に偏るといったことは認められない（表３）。どの資料も刃部に対して直行に痕跡が認められるが、これをもって打製石斧を用いた活動の対象を特定することはできない。

表２　平面形態と刃部形態

後　期	Aタイプ	Bタイプ	不明	計
短冊形	8	10	3	21
撥　形	8	6	8	22
計	16	16	11	43

晩　期	Aタイプ	Bタイプ	不明	計
短冊形	1	3	1	5
撥　形	1	3	0	4
計	2	6	1	9

※不明とは刃部欠損などで判別ができないもの

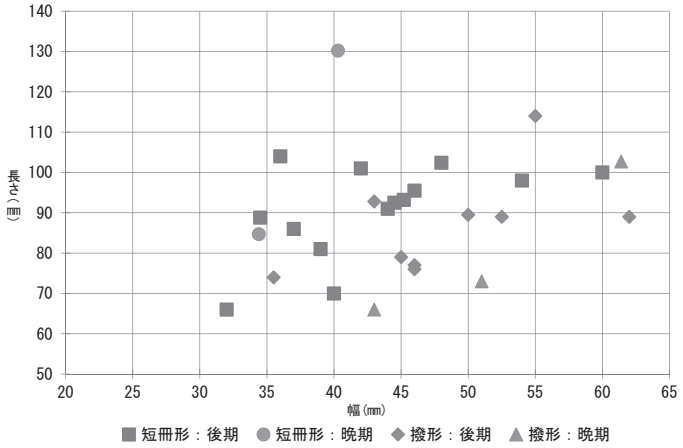


図４　打製石斧の形態とサイズ

表３　平面・刃部形態と摩滅・擦痕

後　期	摩滅・擦痕など		計
	あり	なし	
短冊形　A	5	3	8
短冊形　B	1	9	10
撥　形　A	2	6	8
撥　形　B	2	4	6
計	10	22	32

晩　期	摩滅・擦痕など		計
	あり	なし	
短冊形　A	0	1	1
短冊形　B	2	1	3
撥　形　A	0	1	1
撥　形　B	1	2	3
計	3	5	8

表４　石材の構成

石　材	後　期		晩　期	
安山岩	14（6）	22%	2	45%
サヌカイト	5（2）		5（2）	
ホルンフェルス	6	12%	1	9%
砂岩	2	4%		0%
細粒砂岩	13	27%	1	9%
泥岩	2	4%	1	9%
シルト岩	1	2%		0%
玄武岩質凝灰岩	3	6%		0%
泥質片岩	1	2%		0%
流紋岩	1	2%		0%
粘板岩	9	18%		0%
結晶片岩	0	0%	3	27%
	49	100%	11	100%

（　）の数値は除外して計算、（　）は剥片類の数

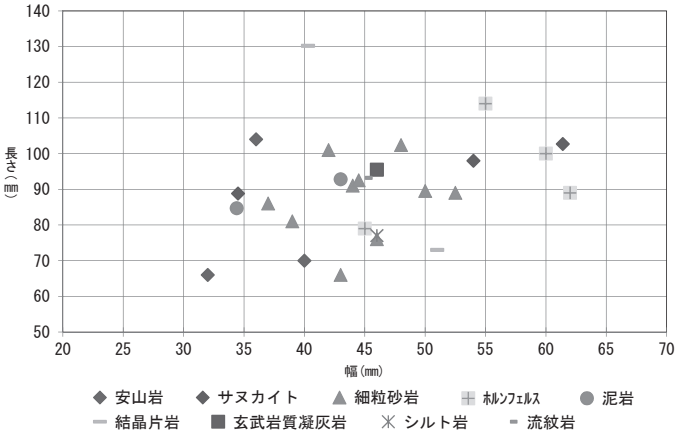


図５　打製石斧の石材とサイズ

石材構成については（表４）、後期で最も多く利用されている石材は、細粒砂岩、サヌカイト（安山岩含む）、粘板岩であり、これにホルンフェルスが次ぐ[3)]。晩期では、サヌカイトが多いが、結晶片岩を用いたものが登場してくる。細粒砂岩や粘板岩、ホルンフェルスは遺跡周辺で採取することが可能であることから、後期では素材のほとんどを在地の石材でまかなっていたと判断される。図５はサイズと利用石材の関係を示したものである。石材ごとに形態やサイズがまとまる傾向を読み取ることはできないが、サイズが最も分散するものがサヌカイトである点は、リダクションなどを考慮した場合、注意を要する。

⑶　サヌカイト製打製石斧のリダクション、転用

本遺跡では、上記検討した製品以外に、刃部再生に伴う剥片や楔形石器に転用されたと考えられる打製石斧片が出土している。これらは現状サヌカイトにのみ認められるもので、特に後者は打製石斧の石核としての（再）利用を考える上で重要な資料と認識されてきた（栄1986、富樫1994、阿部1996、2006）。後期では８点、晩期～弥生時代前期では３点出土している。刃部片としての出土が多く、楔形石器として再利用されたものは後期の３点を数えるのみである。いずれの資料も、摩耗痕や擦痕を残す剥片、楔形石器として認識されている。資料数が少ないため、こうした行為がどの程度行われていたのか、なかなか検討することはできない。しかし、先にみた、全体の３割程度しか痕跡が残らない摩滅痕、擦痕のあり方から考えれば、刃部再生に伴う剥片や他器種の素材に転用された可能性はもっと高く見積もらなければならないだろう。

ｃ．まとめ

以上、津島岡大遺跡出土の打製石斧の基礎情報について整理してきた。最後に、周辺遺跡との比較を試みながら、本遺跡出土打製石斧の特徴について述べていきたい。

周辺遺跡では、岡山南部に位置する南溝手遺跡、百間川沢田遺跡が挙げられる。南溝手遺跡では、後期に27点、晩期に11点の打製石斧が出土している（平井ほか1996）。形態は撥形が主体で、後期では長さが11cm程度のものが多いが、晩期になると16cmを越えるものが出現してくる。利用石材はサヌカイト、安山岩が多いが、粘板岩や流紋岩のものも利用されている。百間川沢田遺跡高縄手Ｂ調査区では晩期の打製石斧が少数出土している。サヌカイト製で刃部付近が張り出す有肩形を呈し、長さが20cm以上を測るものがある。

また山間部に位置する谷尻遺跡では、打製石斧32点が晩期中葉の土器や他の石器類と共に土坑内から一括で出土している。これらの打製石斧は緑色片岩製であり、短冊形、撥形両者が認められ、長さ平均11.1cm、幅平均5.3cmであるとされる（高畑ほか1976）。同じく山間部に位置する久田原遺跡では、打製石斧が後期後半～突帯文期にかけて229点出土している。各時期とも撥形が主体をなし、長さの平均は10～12cmに収まる。しかし、短冊

形では晩期中葉に長さ15cmを越えるものが、撥形では後期後半から長さが20cmを越えるものが出現し、小型、中型、大型の作り分けのあったことが指摘されている（杉山2004）。さらに晩期中葉には、有肩形が加わる。隣接する久田堀之内遺跡でも、ほぼ同様のことが指摘されている（小嶋2005）。両遺跡とも、打製石斧の利用石材はほとんど緑色片岩で占められる。

以上から周辺遺跡の状況をまとめるならば、平面形態は両時期とも撥形が主体をなすこと、長さが平均11cm付近にまとまること、後期後半ないし晩期には15cmを越えるような大形品が見られるようになること、利用石材には特に山間部において在地の石材利用が目立つこと、が挙げられる。

本遺跡出土打製石斧の平面形態は、短冊形、撥形の両者が同程度認められ、サイズは長さが平均９cmであった。そして、これらに時期的な変化は見いだせなかった。また、後期の利用石材はサヌカイトの利用が３割程度であり、砂岩や粘板岩といった在地の石材利用が見て取れた。上記周辺遺跡と比較すると、本遺跡出土打製石斧は、形態の比率に時期的に違いの見られないこと、小型のものが多いこと、晩期に有肩形や大形品が認められないことが差異として認識できる。

これらの特徴は、利用頻度とリダクションによって起こる形態とサイズの変化が影響している可能性が考えられる。本遺跡では、後期においては県南部で最も多くの打製石斧が出土しており、その利用頻度の高さをうかがうことができる。晩期になって有肩形や大形品が見られない点についても、出土点数が少ないものの、同様のことを想定することができるのではないだろうか。直線距離にして約４kmしか離れていない百間川沢田遺跡ではこの両者が確認できることから、本遺跡においても本来的にはそうした打製石斧を具備していたものと推定される。特にサヌカイト製打製石斧については両時期ともに刃部再生剥片も見つかっていることから、メンテナンスが行われ、形態やサイズに変形が生じていたことがうかがわれる。山陰地方においては、打製石斧の特徴が地理的にまとまることやリダクションによるサイズ変形資料が多く認められることが指摘されている（稲田2005）。また使用中の破損も当然考えられ、久田堀之内遺跡においては、打製石斧と同じ石材である緑色片岩などの片岩系の剥片類が大量に出土しており、その一部は打製石斧の目的的剥片でないものと想定されている（小嶋2005）。こうしたことから、上でみてきた本遺跡の打製石斧の特徴について、利用頻度の高さとの関係という想定が可能ではないだろうか。

以上、小論では津島岡大遺跡における打製石斧の基礎情報を整理し、周辺遺跡出土のそれと簡単な比較を試みて、形態やサイズ、その時期的変化についての特徴を抽出した。しかしながら、サイズの変化、サイズごと作り分けについては、本来未製品について検討することが望ましい。本遺跡では第17・22次調査地点から２点出土しているのみであり、分析することができなかった。今後、他の遺跡も含めて検討する必要があるだろう。また石器製作技法や石器製作技術構造、他器種との関連性、などについては言及することができなかった。使用痕観察（川口2000、高橋2008、山田・金2011）も含めて、今後の課題としたい。（山口）

註

１）報告では、石鏃と報告されているものを指す。小論では、打製石斧という言葉を使用する。

２）第３次調査の10層から１点、第21次調査の溝１から１点、第28次調査の溝１から１点の３点である。他の６点は、縄文時代後期～弥生時代前期までの時間幅をもつものであり、時期を特定できない。

３）サヌカイトは、他に刃部再生剥片などの剥片類の出土がある。これを加えるとサヌカイトの利用率が最も高くなるが、剥片類は１つの打製石斧から複数剝離していることが考えられるので、資料数の算出には用いていない。

【参考文献】

阿部芳郎1996「縄文後期のサヌカイト製石器群にみられる剝離面構成と技術」『津島岡大遺跡７』　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
阿部芳郎2006「組成論と転用論」『考古学集刊』２　明治大学文学部考古学研究室
池田晋2009「岡山地域の打製石器石材利用の様相」『環瀬戸内地域の打製石器利用石材』中四国縄文研究会・関西縄文研究会・九州縄文研究会
稲田陽介2005「山陰地方における打製石斧の基礎的研究」『縄文時代晩期の山陰地方』中四国縄文研究会
板倉有大2007「打製石斧と横刃型石器の器種認定」『考古学研究』53-４　考古学研究会
川口武彦2000「打製石斧の実験考古学的研究」『古代文化』52-１　古代学協会
絹川一徳1992「ｃ石器群」『津島岡大遺跡３』　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
忽那敬三2004「石器組成からみた縄文時代後期集落の空間利用」『津島岡大遺跡14』　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
幸泉満夫2008「西日本における打製石鏃の出現」『地域・文化の考古学』下條信行先生退任記念事業会
幸泉満夫2007「西日本初期扁平打製石鏃集成図譜」『研究報告』33　山口県立山口博物館
小嶋善邦2005「縄文時代の石器について」『久田堀ノ内遺跡』岡山県教育委員会
栄一郎1986「石器類の分析」『岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ』　岡山大学埋蔵文化財調査室
杉山一雄2003「岡山県の縄文時代石器の実相」『中四国地域における縄文時代石器の実相』中四国縄文研究会
杉山一雄2004「縄文時代の石器について」『久田原遺跡　久田原古墳群』岡山県教育委員会
高田貫太2005「津島岡大遺跡第17・22次調査地点出土石器の特徴」『津島岡大遺跡16』　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
高橋哲2008「打製石斧による土掘り実験報告」『アルカ研究論集』３　アルカ
高畑知功ほか1976「谷尻遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』６　岡山県教育委員会
敦賀啓一郎2002「石器組成分析による縄文時代生産活動の復元」『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』ⅩⅢ　広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室
富樫孝志1994「津島岡大遺跡第５次調査出土の縄文時代後期石器群の技術構造」『津島岡大遺跡４』　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
中越利夫1993「縄文時代後期の瀬戸内－打製石器を中心として－」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会
平井勝1985「瀬戸内地域における縄文時代研究の課題－晩期農耕について」『考古学研究』15-３　考古学研究会
平井勝1993「岡山県南部の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成１　近畿・中国・四国』国立歴史民俗博物館
平井泰男ほか1996『南溝手遺跡２』岡山県古代吉備文化財センター
山口雄治2010「中部瀬戸内における縄文時代後期の生業と集団関係に関する一試論」『日々の考古学２』六一書房
山田昌久・金姓旭2011「初期農耕開始期の打製石斧に関する日韓共同研究」『2010年度アジア歴史研究報告書』（http://www.jfe-21st-cf.or.jp/jpn/hokoku_pdf_2010/asia05.pdf　2016年１月29日最終確認）

第２章　鹿田遺跡の調査研究

第１節　発掘調査の概要

１．鹿田遺跡第25次調査（中央診療棟建設Ⅱ期、調査番号１、鹿田構内座標BY～CD・24～38区）

ａ．調査の成果

本調査地点では弥生時代後期～江戸時代の遺構・遺物を確認した。成果としては、まず弥生時代中期に遡る可能性のある水田畦畔が確認されたことが挙げられる。鹿田遺跡では中期後半から集落が営まれるが、当該時期の耕作域についてはこれまでわかっていなかったため、その意義は大きい。弥生時代後期では、微高地が確認できた。その端部に確認された井戸の性格については、今後注目していきたい。

平安時代末～鎌倉時代では溝、井戸、墓等の遺構を検出した。特筆されるのは平安時代末、鎌倉時代後半の２基の墓であり、いずれも特徴的な埋葬方法をとる。前者では、幼児の頭骨に碗を伏せるという状況が確認された。類例は希少であり、その行為の特異性が注目される。後者では烏帽子を着装したままの埋葬状況が確認され、被葬者像を検討するうえで貴重なデータが得られた。

調査地点　岡山市北区鹿田町二丁目五番一号　岡山大学鹿田地区内

調査期間　2014年１月６日～８月25日
　Ⅰ工区：１月６日～２月26日（造成土除去）、２月28日～４月17日（発掘調査）
　Ⅱ工区：３月15日～５月15日（造成土除去）、５月８日～８月25日（発掘調査）

調査面積　2,545㎡　（Ⅰ工区650㎡・Ⅱ工区1,895㎡）

調査担当　岩﨑志保（助教、調査主任）、山口雄治（助教）、南健太郎（助教）、野崎貴博（助教）、山本悦世（教授）

遺 物 量　総数64箱（27㍑容量の箱に換算して）
　内訳（土器・陶磁器52箱　石器３箱　木器４箱　骨・金属器４箱　烏帽子１箱）

遺 構 数　Ⅰ工区：弥生時代後期：水田畦畔、溝７条
　平安時代～鎌倉時代：井戸２基、溝１条、柱穴
　南北朝～戦国時代：溝１条
　江戸時代：溝３条、土坑７基、柱穴
　Ⅱ工区：弥生時代後期～古墳時代初頭：井戸２基、溝14条
　平安時代～鎌倉時代：墓２基、井戸１基、溝15条、柱穴
　南北朝～戦国時代：井戸１基、溝１条
　江戸時代：井戸１基、溝１条、土坑５基、柱穴

ｂ．調査の経緯と調査地点

本調査は中央診療棟の建設に伴う発掘調査である。調査地点は鹿田キャンパスの中央南寄りに位置する。本調査地点の周辺では南側で第９～11・14次調査、また東側で第18・20次調査（Ｂ・Ｃ・Ｄ地点）、南西側に隣接して第20次調査（Ａ地点）が実施されている（図６）。これらの調査によって、弥生時代の水田や微高地、また平安時代～江戸時代の屋敷地の調査が進んでいる。

発掘の対象となる面積は2,545㎡である。ただし、岡山大学病院旧病棟などの建物工事により、対象域の多く

の部分が包含層以下に及ぶ大規模な破壊を受けているため、最終的に調査可能な面積は801㎡であった。この破壊部分に残る基礎と構造物については、造成土とともに撤去する予定で作業に入った。

調査に際しては、調査区の北側で進行していた建物建設工事との関係で、調査対象域を南北２工区に分け、南から発掘調査を行う計画とした。上述の攪乱・基礎部分を除いた調査可能面積は南側（Ⅰ工区）181㎡、北側（Ⅱ工区）620㎡である。

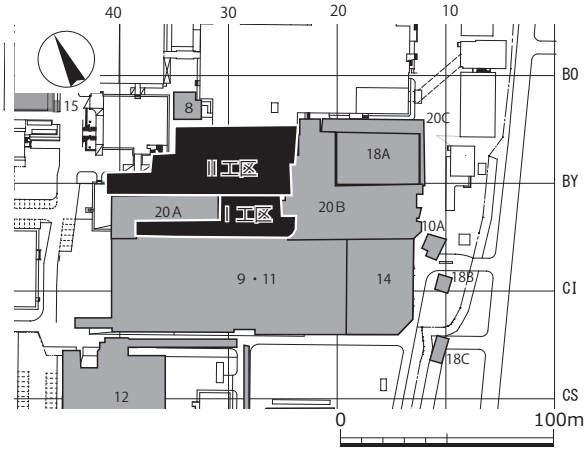


図６　調査地点の位置（数字は調査次を示す）

また調査開始前に、建設工事に伴う事前の土壌調査により、予定地内に部分的に汚染土壌があることが判明した。その対処については、本学の工事担当者により善後策が検討され、法令に基づいて、発掘作業上の安全への配慮も含めた対応策を講じることとなった。具体的には汚染土と非汚染土を、調査時から排出するまで完全に分離することである。汚染土は指定車両で排出するまでの移動過程においても飛散しない適切な排出方法をとる。汚染土の掘削には防護服・マスクを着用することで安全を確保する。さらに強い汚染箇所に関しては、その範囲は攪乱とみなし、通常の掘削調査は実施しない。ただし汚染土壌中の遺物については、現地で洗浄した後、回収することとし、洗浄する際の排水も回収して安全を確保する。以上の取り決めで作業にあたった。

調査員はⅠ工区では２～３名、Ⅱ工区では３名で開始し、調査の佳境にさしかかった７月・８月を４～５名で担当した。

ｃ．調査の経過

⑴　Ⅰ工区

造成土の除去を2015年１月６日より開始し、２月26日に終了した。上述したように汚染土壌対応と、基礎撤去を試みたことで、通常よりも倍以上の期間を要した。また、基礎撤去は予定していた工法では困難となったため、調査終了後に行うことに変更し、その下部については立会調査で対応することとした。

発掘調査は２月28日より開始した。Ⅰ工区はコンクリート基礎の間に島状に残った部分を調査する形となった。清掃後、おおむね中世面から精査を開始した。近世・中世の遺構検出を終えた３月後半から、弥生時代層の精査に入り、４月17日に終了した。

⑵　Ⅱ工区

Ⅰ工区の調査中に、北側の建物建設工事が終了したことから、並行して、Ⅱ工区の造成土掘削を３月15日に開始した。Ⅰ工区同様に基礎と構造物を残した。造成土掘削は５月15日までに機械掘削が終了した。機械が入れない狭小部分については、人力で掘削することとなった。ただし大半が汚染土壌の範囲にあたっていたことから、掘削に際しては防護服・マスクを着用して実施し、５月23日に完了した。

５月８日より、先に造成土掘削が終了した調査区北東部から発掘調査を開始し、６月からはⅡ工区全面の調査へと進めた。近世・中世の井戸、墓、溝、柱穴等の遺構の調査を７月初旬に終えた。続いて弥生時代層への掘り下げを進め、弥生時代後期の井戸、溝を検出し、８月22日にすべての作業を終了した。またⅠ工区、Ⅱ工区のいずれにおいても本調査終了後、基礎の撤去の際に、大型の溝がかかっている箇所については立会調査を実施し、遺物の取り上げを行った。

なお、２基の中世墓については、残存状況が良好であり、構造の観察や烏帽子などの慎重な調査が必要であっ

たため、７月末まで墓部分を残した。人骨の取り上げは土井ヶ浜人類学ミュージアムの髙椋浩文氏に依頼し、７月14・15日に現地で実施した。墓１から出土した烏帽子は漆膜のみが残存した状況で、形をとどめたまま取り上げることは困難であったため、現地で人骨や周辺遺物も一緒に土ごと切り取り、分析・保存処理を急遽外部に依頼することとした。７月30日に吉田生物研究所によって、現地での取り上げ作業を実施した。また、同墓の墓坑下に納められていた木製折敷についても、木質の保存状態を鑑み、周囲の土ごとの切り取り保存が適切だと判断し、併せて切り取り作業を実施した。

なおこの烏帽子の状況を紹介するために、７月12日に現地説明会を開催した。烏帽子を出土時のまま速報的に紹介したことで注目を集め、200名もの見学者を得た。また報道でも多数取り上げられた。

ｄ．調査の概要

⑴　層序（図７）

１層：造成土である。大正10～11年の医学校建設に伴う造成土、および現在に至るまで工事関連土である。標高は北側で2.3m、南側2.4mを測る。

２層（近世）：暗灰色砂質土である。調査区の大半では攪乱を受け、Ｉ工区南東端でのみ確認される。標高1.55mを測る。

３層（中世）：灰黄褐色～灰黄色砂質土である。上面まで攪乱が及んでいる箇所が多く、調査区北東部、南西部では確認されない。上面は1.4～1.48mを測る。

４層（中世）：淡灰色～淡灰褐色砂質土である。上面標高は1.25～1.33mで、全体に起伏の小さい地形が広がるといえる。

５層（古代～中世）：褐色砂質土である。層厚を増す地点（図７断面③④⑤）では色調により２層に分けられるが、質的には差はない。5a層は淡褐色砂質土、5b層は淡茶褐色砂質土である。5a層上面の標高は1.1～1.2mで、起伏の小さい地形と言える。

６層（古墳初頭）：黄灰色砂質土である。鉄分の沈着が顕著である。上面の標高は0.95～1.0mである。後述する８層が高い調査区北東角および北西の一部（同①④）では堆積が見られない。

７層（弥生後期）：暗褐色～黒褐色粘質土である7a層と、淡褐色粘質土の7b層とに分けられる。7a層・7b層とも調査区北東角・北西の一部（同①④）には堆積が見られず、堆積状況は６層と共通する。7a層は、上面0.8～0.9m、7b層は上面の標高0.75～0.82mを測る。7a層からわずかだが弥生時代後期土器片が出土した。Ｉ工区では畦畔を検出した。7b層を耕作土とするが、こうした状況は調査区南側で部分的にみられたもので、北側では7a・7b層とも湿地状を呈している。

８層（弥生後期）：8a層は淡灰色砂質土で砂質が強い。７層の堆積が見られ

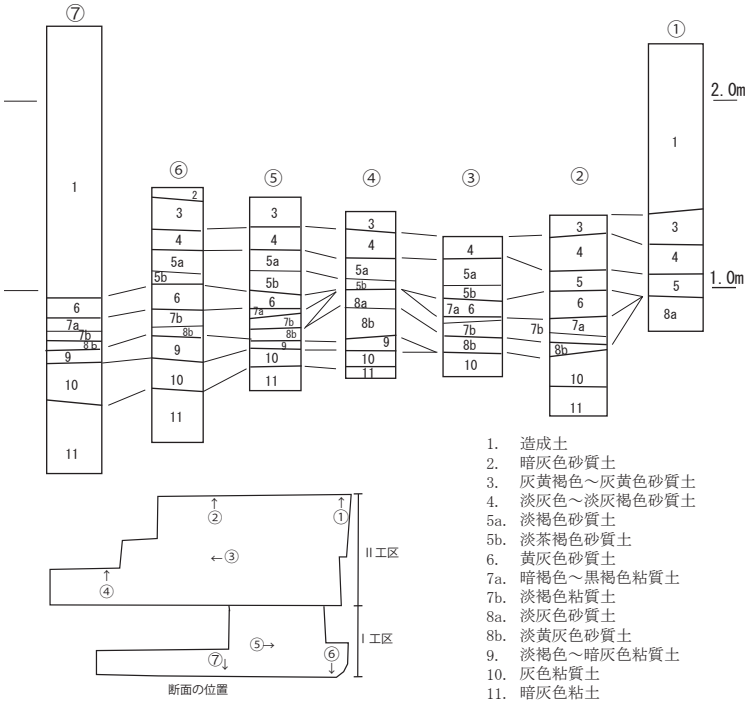


図７　土層断面図（縮尺1/40）

ない調査区北東部と北西部の一部で標高は0.95～1.0mを測る。8b層は淡黄灰色砂質土で、標高0.7～0.8mである。

９層（弥生中期以前か）：淡褐色～暗灰色粘質土である。上面の標高0.7～0.75mを測る。Ｉ工区の一部では畦畔を確認した。

10層：灰色粘質土で遺物は出土していない。標高は0.6～0.65mを測る。

11層：暗灰色粘土である。遺物は出土していない。標高は0.45～0.55mを測る。

⑵　**地形**

本調査地点では11～９層の形成時期には、若干起伏はあるものの安定的な堆積状況であるが、その後、弥生時代後期に８層の堆積が進む。調査区北東部（①）と北西部（④）に8a層の高まりが認められる。そして、低地部に７層が堆積しており、湿地状を呈している。同地域には畦畔が確認されていないことも、整合的である。但し、畦畔が確認されたＩ工区では、7b層は耕作土の様相を呈していることから、地点④では、耕作地形成に伴う改変の可能性を残す。その後砂質の強い６層が堆積し、５層の堆積によって、本地点はおおむね平坦化したとみられる。

⑶　**遺構・遺物**（図８・９）

検出した遺構は、弥生時代後期～古墳時代初頭の井戸２基・溝12条・水田畦畔、平安時代～鎌倉時代の井戸３基・墓２基・溝15条・柱穴、南北朝～戦国時代の井戸１基・溝１条、江戸時代の井戸１基・溝１条・土坑12基・柱穴である。以下に時期ごとに記述する。

【弥生時代～古墳時代初頭】　微高地端部に沿うように複数の溝（溝33・36・37、溝29・30・32）が走行する。また２基の井戸（SK28・SK29）は微高地の端部に位置する。

水田畦畔はＩ工区の南端部で8b層上面と９層上面に確認された。前者の畦畔は東西方向で幅0.3mを測り、幅0.25m、深さ５cm程度の溝が沿っている。遺物の出土はないが、土層関係から弥生時代後期と考えられる。また、後者の畦畔は９層を削り出して形成されている。出土遺物はないが、土層関係から中期に遡る可能性が考えられる。

【平安時代～鎌倉時代】　井戸は平安時代末１基（SK２）、鎌倉時代後半２基（SK６・SK21）の３基を検出した。SK２はＩ工区南端に位置し、南側の大部分は第11次調査地点で既に調査されている。SK６は第20次調査Ａ地点南側において大部分がすでに調査されていたもの（SK１）で、今回南縁辺の一部を検出したものである。SK21は調査区北に位置し、後述の墓１と同時期である。

墓は２基（墓１・２）を検出した（図10・11）。墓１の時期は鎌倉時代後半である。南北方向に軸をもつ墓で、南北1.8m、東西0.9mの墓坑内に長さ1.3m、幅0.75mの木棺の痕跡が残り、四隅では棺釘の出土も確認されたことから、木棺墓であると考えられる。棺内では、人骨と烏帽子・小刀、毛抜きが検出された。特に烏帽子は漆を厚く塗り重ねたもので、完全な形をとどめている。後頭部の骨をくるむように出土したことから、烏帽子を被ったままで埋葬されたことがわかる極めて珍しい例である。頭部の北側、棺外では青磁碗２点・白磁皿２点が重なって出土した。また墓坑下部には径0.3mの穴に折敷に載せられた土師質小皿７枚と５枚の銭が納められていた。埋葬前の祭祀行為が想定されるもので、こうした出土状況は希少である。烏帽子の着葬例は報告が少なく、今回保存状況も良好で、その形が折烏帽子であったことから、被葬者像に具体的に迫る重要な手がかりとなる。今後、棺の構造、副葬品の検討や、分析中の人骨の検討から被葬者や埋葬過程を解明する情報を得ることが期待できる。

墓２は調査区北端に位置する。東西1.23m、南北0.6mの範囲に、頭位を東にした一体の人骨を確認した。副葬品は、頭部の南側に土師質小皿２点が正位置に、そして頭部北側に接するように白磁碗１点が伏せられていた。碗の下には白磁皿が伏せた状態で見つかり、その下に幼児の頭骨が検出された。検出レベルや土層の検討により、これらは台に置かれた可能性がある。人骨については現在分析中である。時期としては平安時代末と考えて

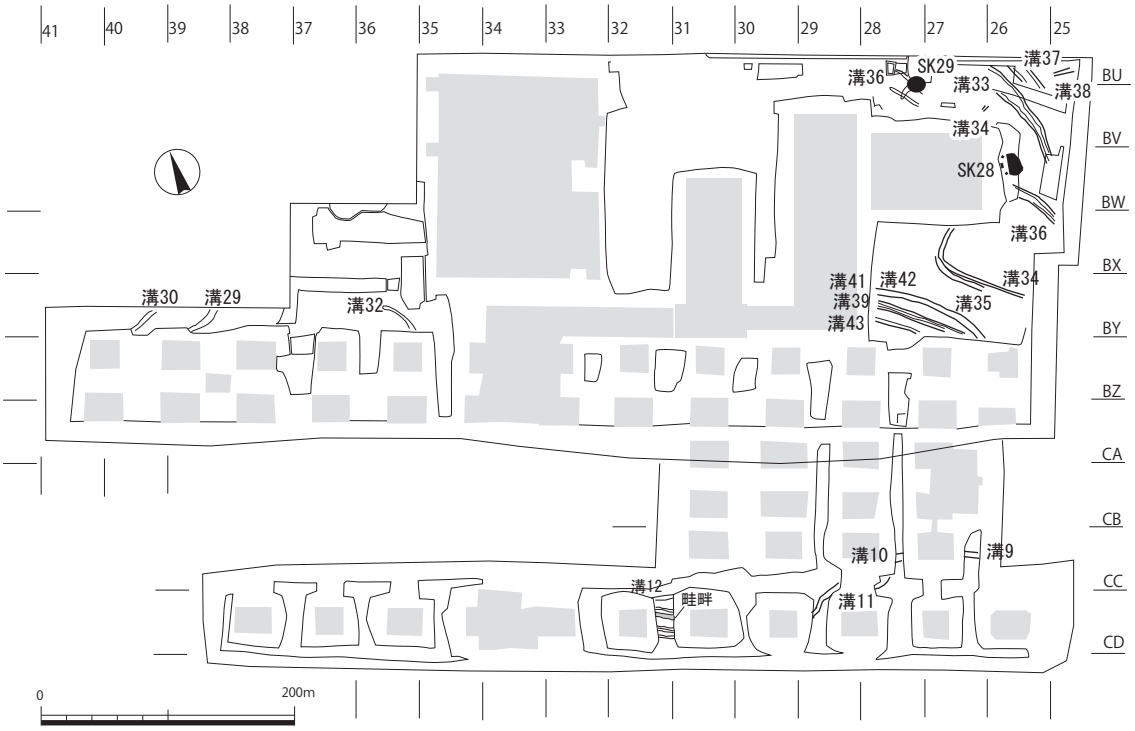


図８　検出遺構全体図－弥生時代～古墳時代初頭－（縮尺1/600）

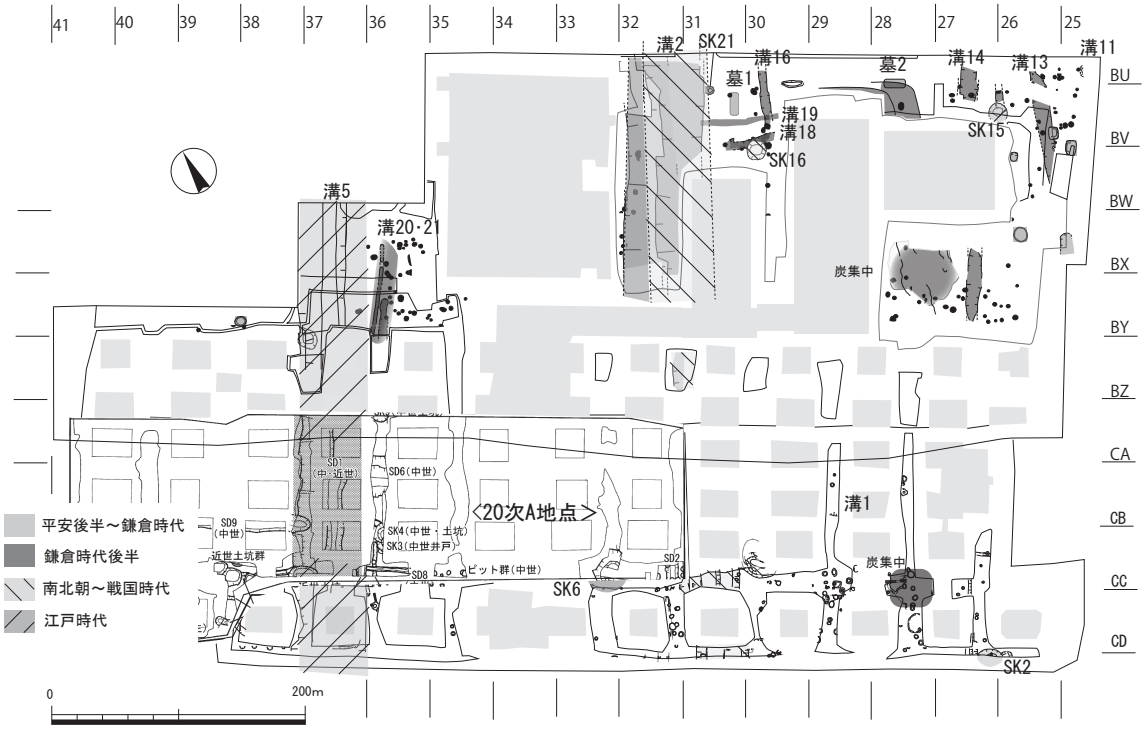


図９　検出遺構全体図－平安時代後半～江戸時代－（縮尺1/600）

いる。

溝は、鎌倉時代前半のものが多い。多くが攪乱で分断されているため、相互のつながりの把握が難しいが、溝の方向については以下の２方向にまとめることができる。１つは、北方位が東に傾く、いわゆる「鹿田条里」に沿ったもの、もう１つは、ほぼ真北方向のものである。後者の溝（溝11・13）は、調査区北東部で認められ、既往の調査地点（第20次Ｂ・Ｃ地点）で確認されている溝へとつながっていく。本調査では、これまでも指摘されている鎌倉時代前半に短期間認められる真北方向の溝の存在を改めて確認できた。

図10　墓１（東から）

鎌倉時代後半の溝（溝２）は現在の地割りに沿う南北方向のものである。前段階に比べると幅５ｍ、深さ1.5m近くと大形化が認められる。

【南北朝～戦国時代】　井戸（SK16）１基・溝１条（溝２新段階）が確認された。SK16からは備前焼などが出土している。溝２は地割りに沿う南北方向のもので、前段階の掘り換えが認められる。溝の規模は、幅約５ｍ、深さ1.4mに復元され、溝からは15～16世紀の遺物が出土している。

【江戸時代】　井戸（SK15）１基・溝１条・土坑12基が確認された。溝（溝５）は南北方向に走行し、規模・方向は前代を踏襲しているものの、位置は西へ40mほど移動してつくられている。溝と井戸からは、17世紀初めの国産陶磁器が出土しており、同じ時期に埋められたと考えられる。屋敷地の終焉を示すものと考えられる。土坑は18世紀前半の遺物を出土するものが多く、本調査区では北東部に多く検出されたが、その機能について検討が必要であるが、既往調査から18世紀には耕作地に変化していると考えられる。

（岩﨑志保）

図11　墓２（西から）

２．鹿田遺跡第26次調査

（医学部動物実験施設改修に伴う発掘調査、調査番号２、CD～CJ46～48、CJ・CK61・62区）

ａ．調査の成果

本調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭、中世において大きな成果を得ることができた。弥生時代後期～古墳時代初頭では畦畔及び畠状遺構を確認した。これらの資料によって鹿田キャンパス南西部における当該時期の耕作地の状況を明らかにできた。特に古墳時代初頭の畠状遺構は、鹿田遺跡では初めての事例となった。中世では屋敷地の区画溝を検出した。中でも、本調査地点北側においてこれまで想定されてきた居館とも推定される屋敷地のコーナー部分を確認することができた点は、大型の溝が屋敷地を巡る状況や具体的な屋敷地の規模、形状を復元する大きな手がかりとなった。

調査期間　2014（平成26）年８月18日～11月17日

本 体 地 点：2014年８月18日～８月27日（既存建物撤去・表土掘削）
2014年８月28日～11月17日（発掘調査）

排水槽地点：2014年10月23日～10月24日（表土掘削）
2014年10月27日～11月10日（発掘調査）

調査面積　295.5㎡（内訳　本体：273㎡　排水槽：22.5㎡）

調査担当　山口雄治（助教、調査主任）、南健太郎（助教）、山本悦世（教授）、野崎貴博（助教）

【遺物量】　総数47箱（27㍑容量の箱に換算して）　内訳（本体地点：46箱、排水槽地点：１箱）

【遺構数】

本 体 地 点：井戸３基（古墳２基、中世１基）、土坑16基（古墳６基、古代１基、中世８基、近世１基）、溝25条（弥生２条、古墳９条、中世14条）、ピット26基（古代１基、中世25基）、畠状遺構１ヶ所（古墳）、焼土集中１ヶ所（古墳）

排水槽地点：溝３条（弥生１条、古墳１条、中世１条）、畦畔１ヶ所（弥生）、ピット４基（古墳２基、中世２基）

ｂ．調査の経緯と調査地点

岡山大学鹿田キャンパスでは、2014年に動物実験施設の増築が行われることとなり、自然生命科学研究支援センター動物資源部門鹿田施設の東側に接した本体地点（以下Ａ地点）において、発掘調査の計画がなされた。

調査地点は、鹿田キャンパスの南西部に位置する（図12）。本地点西側に建つ動物実験施設（西半部）では、本センター設置以前の1981年度の新営に際して岡山市・県教育委員会によって立会調査が実施された[1)]。工事掘削後の調査区壁面調査であったため、壁面に確認された中世の溝や土坑など多くの遺構の詳細は不明確な部分が多かった。本調査地点においても同時期の遺構の存在が予想されると同時に、当時の遺構確認にも期待がもたれた。北側の調査（第７次）では、古墳時代初頭の遺構・遺物が報告されており[2)]、本地点にも各時期の遺構が広がっていることが予想された。調査予定地は、これまで一部焼却炉として利用されていた。

また発掘調査開始後、外溝工事計画が進行する中で、同施設南側において一部発掘調査対象となる地点が追加された（排水槽地点、以下Ｂ地点）。工事工程の都合からＡ地点と同時完了を求められたため、発掘調査体制の強化をはかり、Ｂ地点の調査を同時進行にして対応した。

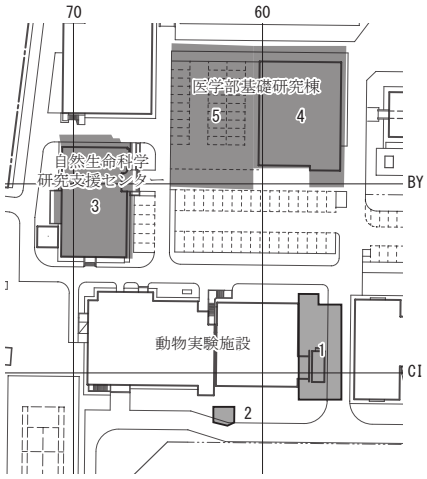
調査面積はＡ地点では273㎡で、調査員２名が担当し後半には４名で行った。Ｂ地点では22.5㎡で、調査員１名が担当した。

ｃ．調査の経過

⑴　Ａ地点

表土掘削及び基礎の撤去は、調査員１名で2014年８月18日～27日に行った。調査区東半では近代の耕作土を確認できたが、西半では弥生時代後期の基盤層（９層）まで、南側の一部では、それ以前の12層まで建物基礎に伴う撹乱が及んでいた。

発掘調査は８月28日から開始し、調査員２名が担当した。近代の耕作土（２層）を下げると、近世の土坑が１基検出された。その後、層位ごとに調査を進め、中世の遺構面（３～５層）では大型の溝や井戸、土坑、ピットなどを検出した。溝からは多数の遺物に加えて獣骨も出土した。有機質遺物は、今後の資料の同定に備え、土ごと切り取って持ち帰った。10月24日に中世層までの調査を終了させた。この時点で、Ｂ地点における調査が開始となり、調査員１名の体制となった。



1. 第26次発掘調査（本体）地点
2. 同（排水槽）地点　4. 第７次発掘調査地点
3. 第６次発掘調査地点　5. 第17次発掘調査地点

図12　調査地点の位置（縮尺1/2,000）

古代の遺構は、９層まで撹乱が及んでいた調査区西部において土坑、礎石入りのピットのみ検出した。続いて調査区東部を古墳時代初頭の層（６層）まで下げ、当該期の井戸、溝、畠状遺構などを検出した。この段階で、進行状況と工期を勘案して調査員２名を増員し、調査を行った。畠状遺構は、分析のために一部断面を切り取って持ち帰った。その後弥生時代後期の基盤層（９層）まで掘り下げを行い、溝を検出した。2014年11月17日にすべての作業を完了した。

なお、調査と同時並行で隣接する動物実験施設の改修工事も行われており、その影響で調査の中断を余儀なくされたこともあったが、大学施設企画部、建設業者と調整しつつ十分に安全面に配慮して調査を行った。現地説明会は11月１日に行い、約100名の参加を得た。

⑵　Ｂ地点

表土掘削は2014年10月23日～24日に行った。調査区北側では排水管によって包含層が破壊されていたため、その南側が調査対象域となった。

発掘調査は10月27日～11月10日に行った。調査にあたってはＡ地点にいた調査員２名のうち、１名が常駐することになった。近代層（２層）を下げると、中世の溝を１条検出した。古墳時代初頭の６層上面で溝１条、弥生時代後期の８層上面で畦畔を検出した。さらに弥生時代後期基盤層（９層）上面で溝１条を確認した。掘り下げを弥生時代後期以前の10層まで行い、2014年11月10日にすべての作業を完了した。

ｄ．調査の概要

⑴　層序と地形

【層序】

本調査で確認された土層は13層に大別される（図13・14）。以下、各層の概要を記載する。

１層（大正期以降）：大正10～11年の医学校建設に伴う造成土および現在に至る工事関連の造成土である。標高は、Ａ地点の北側で2.36m、南側で2.43mを測り、Ｂ地点では2.35mを測る。

２層（近代）：淡灰白色粘質土で明治～大正期の耕作土にあたる。医学校建設時に大きく削平を受けており、Ａ地点の北、東部の一部にのみ検出された。上面の標高は、1.55～1.46m前後を測る。

３層（中世）：緑灰褐色粘質土で鉄分を含む。Ａ地点では確認できたが、Ｂ地点では確認できなかった。上面の標高は1.35～1.26mを測る。

４層（中世）：明灰茶褐色粘質土で鉄分、淡灰色砂を含む。色調、砂の包含率によって一部では２層に分けるこ

とができ、下層ほど砂を多く含む。上面の標高は1.25mを測る。

５層（中世）：灰茶褐色粘質土で下方に向けて砂質が若干強まる。調査区全面で確認されており、上面の標高は1.20～1.10mを測る。調査区南、西に向かって標高が0.1m程あがる。

６層（古墳初頭）：茶褐色砂質土でマンガンを顕著に含む。色調、マンガンの含有率によって調査区南側では２層に分けることができる。下層ではマンガンが多く暗色を強める。上面の標高は1.10～1.00m前後を測るが、南に向かって標高が若干あがる。調査区全体で確認される。上面で古墳時代初頭の井戸、畠状遺構を確認した。

７層（弥生後期）：淡灰黄色砂質土で灰色粘土を含む。調査区南東角（⑤）でのみ確認されており、８層の落ち込む地点に、南東角から南に向けて堆積していることが予想される。上面の標高は0.83mである。

８層（弥生後期）：黒灰色粘質土で植物の影響による腐植土層であると考えられる。９層が低くなるCHラインよりも南側で確認できる。Ｂ地点では、上層に明黄灰色粘土ブロックを多く含むことから２層に分けた。上面の標高は約0.95m（④・⑦）～約0.75m（⑤）を測り、南東に向かって下がる。

９層（弥生後期以前）：明灰黄色粘質土で鉄分の沈着が顕著である。下層ほど砂を多く含み、３層に分けることができる。上面の標高は約0.9m（③・⑦）～0.62m（⑤）を測り、CHラインより南東へ向かって下がる。上面で弥生時代後期の溝を確認した。

10層（弥生後期以前）：灰黄褐色粘質土で鉄分を多く含み、砂を少量含む。上面の標高は約0.6mを測る。

11層（弥生後期以前）：黒灰色粘質土で植物の影響による腐植土層であると考えられる。本体調査区の南部（⑤・⑥）でのみ確認される。上面の標高は0.45～0.55mを測り、南に向かって下がる。旭川西岸の弥生時代早～前期に確認される「黒色土」に対応する可能性が考えられる。

12層（弥生後期以前）：青灰色粘質土で上面の標高は約0.5m（①～④・⑦）～0.4m（⑤）を測る。調査区全体で確認できるが、南に向かって下がっている。

【地形】

本地点における地形は、12～10層、９～７層、６層以後の３段階の変遷が認められる。弥生時代後期以前の12～10層段階は、調査区南側（図14－⑤・⑥、以下同）が15cm程低くなっており、この低位部に腐植土層（11

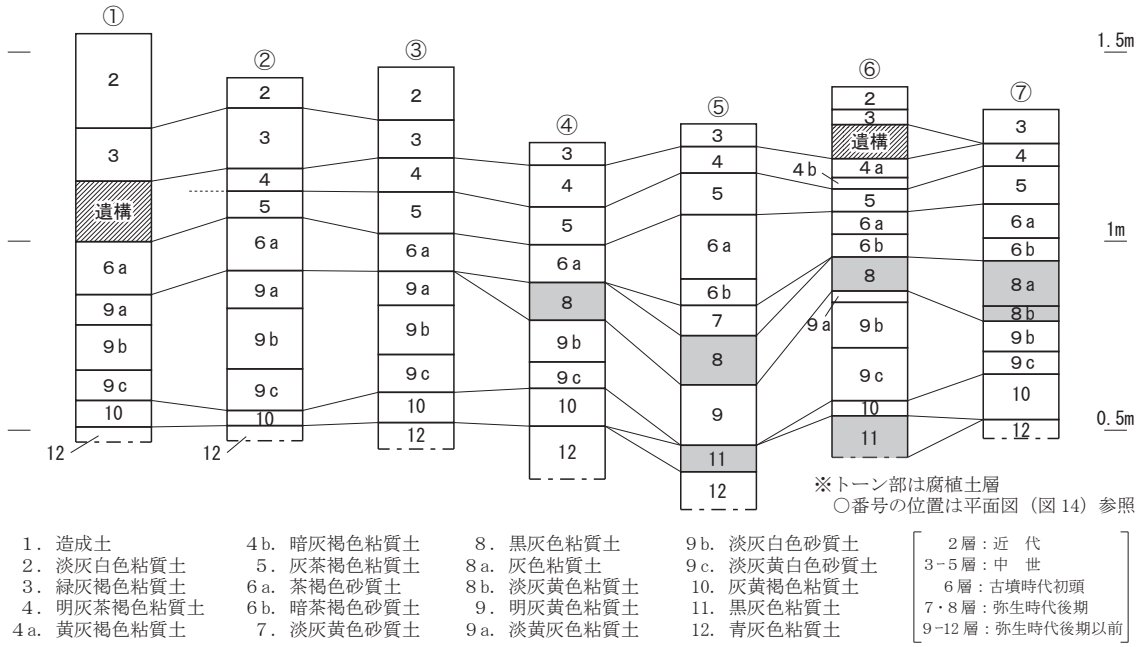


図13　土層断面柱状図（縮尺1/20）

層）が形成されている。その後弥生時代後期の基盤層である９層が堆積する。９層は調査区の北側で微高地を形成し、④・⑥地点を結ぶ北東－南西ラインから南東方向に地形の下がりが認められる（④～⑥）。微高地と低位部の比高差は30cmと前段階よりも高くなっている。しかし、①～③の９層は、⑥・⑦の８層よりも低いことから古墳時代初頭までの６層堆積段階で削平されたと考えられるため、本来はもっと高かったことが推定される。こうした地形形成によって弥生時代後期に利用可能な空間になったと考えられる。低位部には８・７層が堆積し、同様に湿地環境であったことがうかがわれる。

古墳時代初頭の６層は、おおよそ平坦面を形成している。しかし、南部で若干高く、以前の地形とはその高低が逆転していることから、土地改変によって地形環境が大きく変化している可能性がある。この地形はその後も維持されており、中世の５～３層も６層と同様の地形を復元することができる。ただし、古代の土層が確認できないことから、５層段階においても土地改変が想定される。近世の土層も確認されなかったが、近代における造成によって削平されたと考えられる。

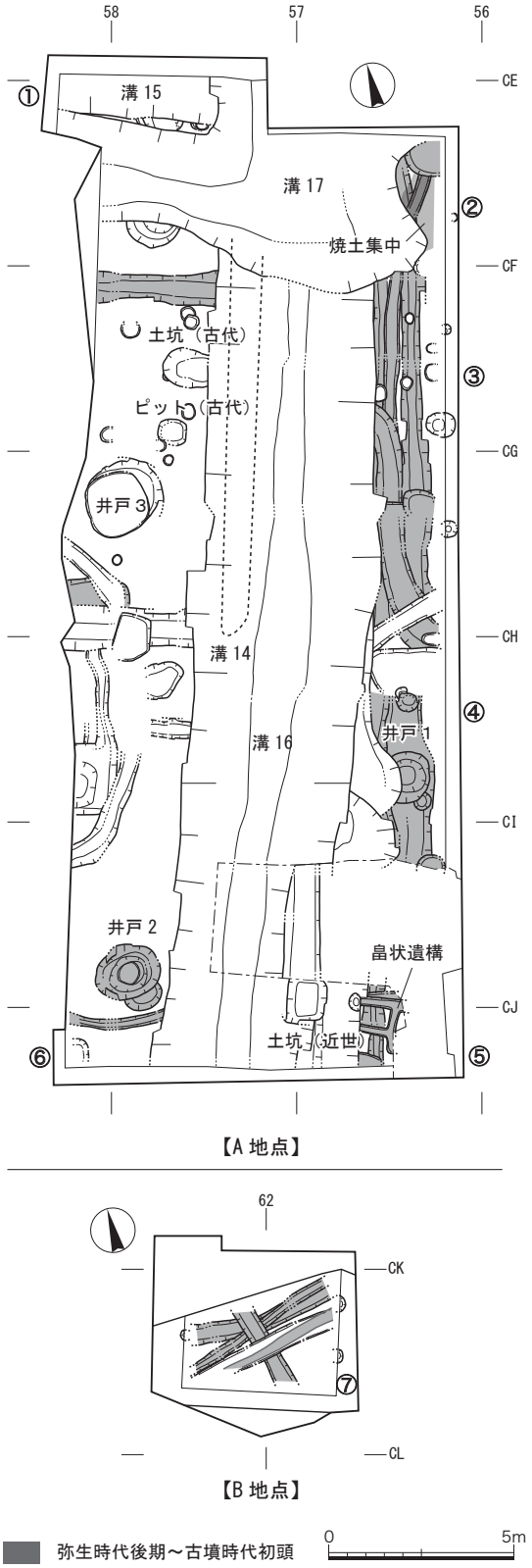
⑵　**遺構・遺物**（図14）

【弥生時代後期～古墳時代初頭】

弥生時代後期では、Ａ地点で溝16の東側において溝２条を検出した。北から南に向かって緩やかに下がる。Ｂ地点では、北東－南西方向の溝１条と畦畔を検出した（図15）。周囲に水田が広がっている可能性がある。

古墳時代初頭では、Ａ地点で井戸２基、土坑６基、溝９条、畠状遺構、焼土集中範囲、Ｂ地点で溝１条、ピット２基を検出した。

井戸は、Ａ地点南半に位置する。井戸１では、２点の土器が底部付近に置かれており、その上部には灰層が約10cmにわたって堆積していた。井戸廃絶にあたって燃焼行為を伴う祭祀を行っていたと推測される。溝は、前段階同様溝16の東側で多く検出され、北から南に向かって緩やかに下がる。畠状遺構は、Ａ地点南端部で検出された（図16）。確認できた面積は小さいが、細く浅い溝が等間隔に併行している状況、溝の間の土層の状況から、畝と畝間の溝の可能性が考えられる。焼土集中範囲は、Ａ地点北東部で認められた。周辺部に燃焼作業を伴う空間があった可能性がある。



※○数字は、図 13 の断面柱状図位置に対応

図14　検出遺構全体図（縮尺1/200）

【古代】

Ａ地点で、土坑１基、ピット１基を検出した。ピットからは平坦面を上にした人頭大の礫が出土した。礎石の可能性から建物の存在が予測されたが、周囲に同様のピットが確認できなかった点は疑問を残す。

【中世】

Ａ地点で井戸１基、土坑８基、溝14条、ピット25基、Ｂ地点で溝２条、ピット２基を検出した。

井戸３は、平面方形を呈する。底部の中心には曲物が設置されていた。その周囲には平坦面を上にした人頭大の礫が３点と複数の枠材片が倒れ込むような状態で出土したことから、礫を礎石とした方形縦板組の井戸枠の存在が考えられる。時期は鎌倉時代後半～末と想定される。

溝は、Ａ地点において、東西、南北方向にのびる平安時代後半～鎌倉時代初めの溝14・15、南北方向にのびる鎌倉時代後半の溝16、調査区北部で西へ折れ逆Ｌ字状を呈する鎌倉時代末頃の溝17を検出した。いずれも幅約５ｍ、深さ約1.5ｍ以上を測る大型の溝であり、屋敷地を区画する溝であると考える。調査区北端部では、重複しており順次造り替えられている。また溝17においては、北側西側面が緩やかな勾配になるテラス状の張り出しを確認した。

図15　畦畔と溝完掘状況（北から）

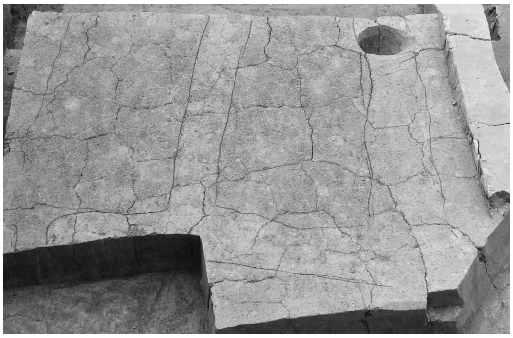


図16　畠状遺構検出状況（東から）

これらの溝は、本調査地点北側にある第７次調査地点の南北方向の溝と繋がる位置にあたる。また、逆Ｌ字状を呈する溝17は、同調査で想定されていた屋敷地の南東コーナー部分にあたっており、南北57ｍという屋敷地の規模を確定することができた。

【近世】

本体調査区南端において、野壺と考えられる土坑が１基検出された。耕作地であったと考えられる。

なお、以上の内容は暫定的なものであり、詳細な分析・検討を経て後日正式報告を行う。　（山口）

註

１）吉留秀敏・山本悦世・栄一郎1985『岡山大学構内遺跡調査研究年報１』岡山大学埋蔵文化財調査室

２）山本悦世編2007『鹿田遺跡５』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第２節　立会調査の概要

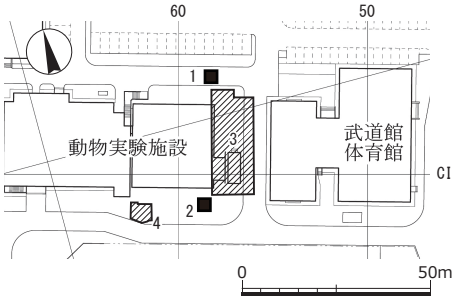
１．調査の概要

鹿田地区での立会調査は、７事業22件が実施された（表５）。その内訳は、動物実験施設改修工事８件と医歯薬融合型教育研究拠点施設新営に伴うもの９件、そして中央診療棟改修・新営やグラウンド復旧工事などが５件あった。これらの内、遺構を確認したものは３件で、近世以前の土層を確認したものは８件である。ここでは、遺構が確認された動物実験施設改修工事（調査番号６、11）、グラウンド復旧工事（調査番号24）、そして近世以前の土層が確認された医歯薬融合型教育研究拠点施設新営（調査番号15・19）について報告する。

２．動物実験施設改修工事

ａ．調査地点の位置と規模

本調査地点は、鹿田キャンパスの南西部に位置する（図17）。動物実験施設の改修に伴うガス・雨水排水整備のための工事に伴って実施されたものである。掘削規模は、雨水排水桝地点（調査番号６、鹿田CC58区）では１ｍ四方で深さ1.4m、機械設備桝地点（調査番号11、CJ58区）では1.5m四方で深さ1.8mである。



1. 雨水排水桝地点　3. 第26次調査地点（本体）
2. 機械設備桝地点　4. 第26次調査地点（排水桝）

図17　本調査地点の位置（縮尺1/2,000）

ｂ．雨水排水桝地点の調査成果

⑴　**層序**（図18）

１層は近・現代の造成土、２層は暗灰色粘質土で近代の耕作土、３層は暗緑褐色弱粘質土で近世の耕作土と考えられる。４層は明茶褐色砂質土で中世以前と考えられる。ただし、焼土や炭小片を含む点で遺構埋土の可能性も考えられるが、本調査範囲ではそれ以上確認することはできなかった。

⑵　**遺構**

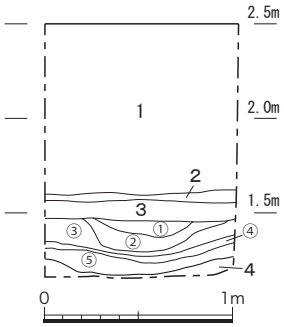
南北方向の溝を１条確認した。溝の規模は、幅１ｍ以上、深さは少なくとも0.3mを測り、４層の評価次第ではそれ以上の可能性もある。従って、断面形態は保留せざるを得ない。

埋土は５層に分層される。また土層の特徴から、明緑色粘土ブロックを含む①・②層、灰色砂を含む③・④層、灰色粘土を含む⑤層、の３層に大別できる。出土遺物は小片ではあるが中世土器が出土している。

ｃ．機械設備桝地点の調査成果

⑴　**層序**

１層は近・現代の造成土である。２層は灰色粘質土、３層は暗灰色粘質土で、これらは近代の耕作土と考えられる。４層以下は中世以前の堆積と考えられるが、各層から時期を示す遺物は出土しておらず、東隣する第26次発掘調査地点の土層を参考



1. 造成土
2. 暗灰色粘質土
3. 暗緑褐色弱粘質土
4. 明茶褐色砂質土（焼土・炭）

遺構
① 暗灰褐色粘土
② 暗緑灰色粘質土
③ 灰褐色砂質土（焼土・炭）
④ 灰色砂質土（炭）
⑤ 明灰茶褐色砂質土（炭）

図18　雨水排水桝地点北面断面図
（縮尺1/40）

に推定した。４層は灰褐色砂質土、５層は褐灰色砂質土、６層は暗褐灰色砂質土で炭を含む。いずれも中世と推定される。７層は暗茶褐色砂質土であり、第26次調査地点６層と同じ土層と判断できた。古墳時代初頭と考えられる。

⑵　遺構

調査区北東角に土坑を１基確認した（図19）。土坑は、現状では平面楕円形を呈し、その規模は南北0.5m以上、東西0.35m以上、深さ0.45m以上を測る。埋土は１層で、暗灰色砂質土中に灰色粘土ブロックを少量含む。遺物の出土はなかったが、掘り込み面から判断して中世の遺構と考えられる。

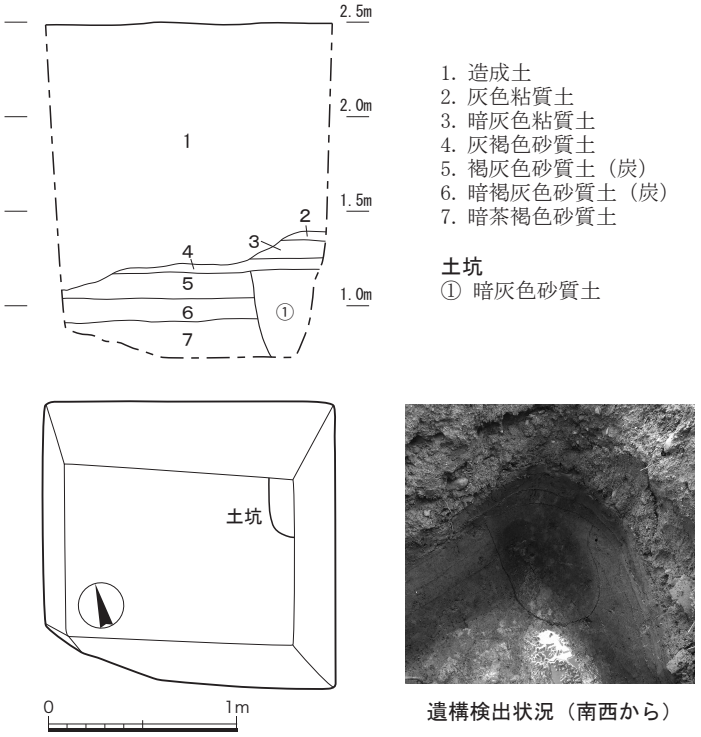


図19　機械設備桝地点　平・断面図（縮尺1/40）

ｄ．まとめ

両調査地点では、中世の溝および土坑を各々検出した。北側に位置する第７次調査地点では古代末～中世にかけて南北方向の溝が検出されている[1)]。雨水排水桝地点で確認された溝は、これらの溝のいずれかに連続する可能性がある。また、第１節で報告した第26次調査地点において中世の井戸や溝が検出されている。その位置関係から、機械設備桝地点は屋敷地想定区画内に位置しているものと考えられ、鹿田遺跡南西部における遺構の広がりを確認できた。

註

１）山本悦世編2007『鹿田遺跡５』　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

３．グラウンド復旧工事

ａ．調査地点の位置

本調査地点は、鹿田キャンパス南西部のグラウンド西端に位置する（鹿田CP～DF68区）。防球ネット移設工事に伴い、直径0.6m、深さ2.1mを測る掘削を、約6.6m間隔に13ヶ所実施した（調査番号24、図20）。オーガーによる掘削であったため、土層断面を直接観察することはかなわず、掘削土を観察することで対応した。本調査地点の周辺では、グラウンドの東端部および南端部において立会調査が実施されている[1)]。

ｂ．調査の成果

⑴　層序と地形（図20）

１層は近・現代の造成土である。２層は暗茶褐色砂質土～シルトで、時期は古代～中世と考えられる。本来は更なる分層が可能な層であるが、詳細な観察が不可能であったため一括して記載した。３層は暗灰色粘土であり、グラウンド北に位置する第26次調査成果との比較から弥生時代後期以前と考えられる。

弥生時代後期の旧地形は、標高0.4m付近に安定した土層の広がり（地点①・③・⑥～⑪）が認められるが、地形の変化が地点④・⑤と地点②・⑫・⑬において確認できる。地点④・⑤では落ち込みが認められ、その幅が

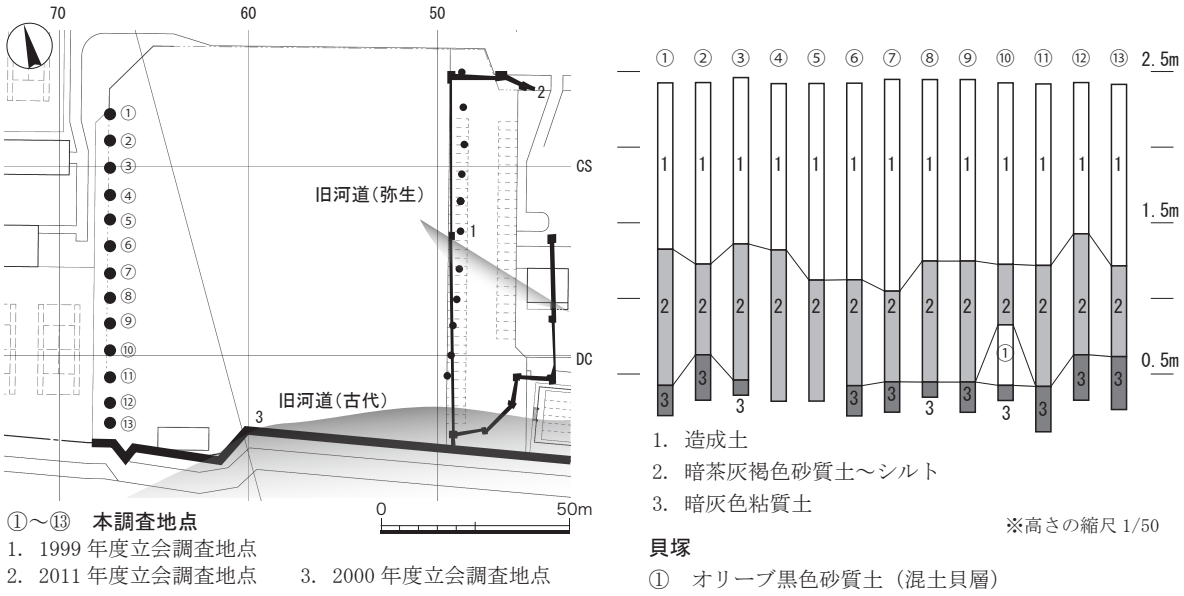


図20　調査地点の位置（縮尺1/2,000）と断面柱状図

10m以上にも及ぶことから河道の可能性が考えられる。また地点②・⑫・⑬付近では0.2m程の高まりが認められる。

⑵　貝塚

地点⑩において、貝層が確認された。貝層（①層）は、オリーブ黒色砂質土（混土貝層）で、標高0.4～0.8m程から確認された。厚さは30～40cm程と考えられる。平面規模は不明であるが、地点⑨及び⑪より貝類の出土がなかったことから、南北10m以上には及ばないと判断される。

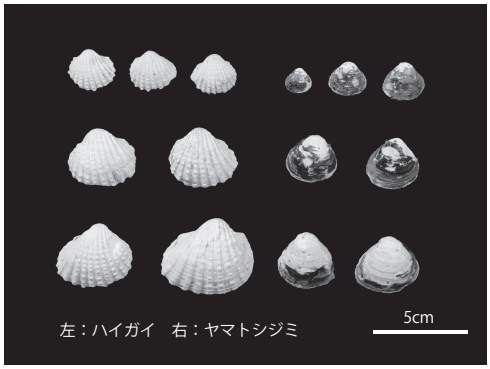


図21　出土貝類

貝層は、サンプルとして約0.8m³分持ち帰り、それらを最小0.5mmメッシュのフルイを用いて土壌洗浄を行った。その結果、貝層にはハイガイとヤマトシジミを中心に、少量の巻貝や炭化物、そして丹塗り土師器片等の古代の土器小片が検出された（図21）。ヤマトシジミは、殻皮がよく残存している。オーガーによる攪拌を受けていないと考えられる貝層ブロックの観察からは、特定の貝がまとまった様子はなくランダムに混じっているものと判断できた。この貝層は貝塚の一部と考えられ、その形成時期は、共伴した土器片から古代の可能性が高い。炭化材などの年代測定も実施し、７世紀後半～９世紀の値を得た。

ｃ．まとめ

本調査では、鹿田遺跡南西部の河道と古代の貝塚の存在が明らかとなった。地点④・⑤の河道の北側には、地点②の高まりが見られ、河道脇の微高地を形成していると考えられる。また、南端にあたる地点⑫・⑬においても微高地が形成されているものと考えられる。

貝塚は、年代測定から７世紀後半～９世紀の値を得た。しかし、本遺跡では８世紀後半～９世紀の集落が確認されていることから、貝塚の形成時期は、この集落と同時期の可能性が高い。本貝塚は、この集落から南西に300m程離れており、遺跡南端の河道付近に形成されている。本遺跡の南端部では、これまでもこの時期の遺構や遺物が点々と確認されており、当該地区における活動内容を考える資料を得ることができた。

貝塚出土貝類は当該期の海岸線との関係を考える貴重な資料といえる。年代測定結果の詳細および貝類の同定

結果、構成比などについては、後日その詳細を報告したい。

註

１）横田美香2000「第４節立会調査　（２）鹿田地区」『岡山大学構内遺跡調査研究年報17』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岩﨑志保2013「立体駐車場新営に伴う配管移設工事」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
横田美香2001「第４節立会調査　２鹿田地区」『岡山大学構内遺跡調査研究年報18』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

４．医歯薬融合棟新営

ａ．調査地点の位置

本調査は、医歯薬融合型教育研究拠点施設の新営に伴う排水桝・管路、カーブミラー設置などの工事に対応したものである（調査番号15～19）。調査地点は、鹿田キャンパスの西端部にあたり、基礎医学棟の西部に位置する（鹿田BB69、BK70区、図22）。遺構の検出はなかったが、中世の土層が確認されたため、以下層序について報告する。

ｂ．調査の成果

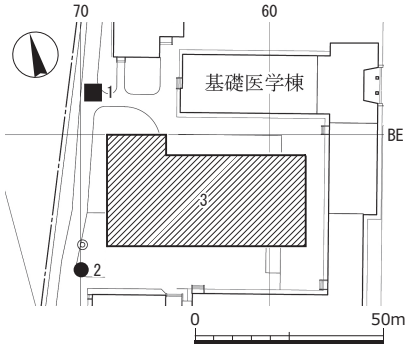
⑴　層序

いずれの地点も掘削深度は現地表面から1.3～1.63mを測り、土層の堆積状況は一致するため、ここでは北端の排水桝①（調査番号15）と南端のカーブミラー基礎地点（調査番号19）の柱状図を示す（図23）。なお、遺物がほとんど出土していないため、土層の時期は第24次調査地点の成果を参考にしている[1)]。

１層は近・現代の造成土、２層は灰色粘質土で近代の耕作土である。３層は淡灰褐色砂質土、４層は灰褐色砂質土であり近世と考えられる。４層は土の締まり具合によってａ、ｂの上下２層に分層でき、４ｂ層がより締まっている。５層は灰褐色砂質土、６層は灰褐色粘質土で、中世の土層と考えられる。遺構はいずれの掘削箇所においても確認されていない。（山口）

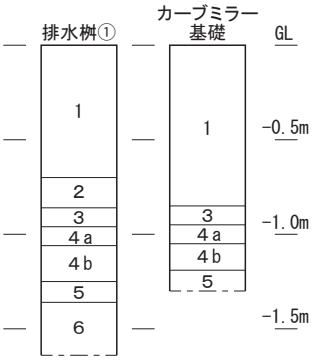
註

１）南健太郎2013「鹿田遺跡第24次調査地点」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2012』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



1. 排水桝①地点　　3. 第24次調査地点
2. カーブミラー基礎地点

図22　本調査地点の位置（縮尺1/2,000）



1.　造成土
2.　灰色粘質土（Fe◎、Mn）
3.　淡灰褐色砂質土（細砂◎）
4a．灰褐色砂質土（Fe）
4b．灰褐色砂質土（Fe）
5.　灰茶褐色砂質土
6.　灰茶褐色粘質土

図23　排水桝①・カーブミラー基礎地点断面図（縮尺1/40）

表５　2014年度の調査地点【２】鹿田地区

種類	調査番号	工事名称		調査期間	構内座標	調査深度（GL-m）	造成土厚（m）	内　　容
発掘	1	中央診療棟新営Ⅱ期		2014/1/6～8/19	BT～CD24～40	2.1	0.8	弥生時代溝・畦畔、弥生時代～古墳時代井戸・溝、中世～近世墓・井戸・土坑・溝・ピット
	2	動物実験施設改修		8/18～11/17	CD～CJ46～48, CJ・CK61・62	2.2	0.8～1.1	弥生時代溝・畦畔、古墳時代井戸・土坑・溝・畠状遺構、古代土坑・ピット、中世井戸・土坑・溝・ピット、近世土坑
立会	3	臨床講義棟	排水管修繕工事	5/16	BP35～BS35	0.5～0.7	－	既設内
	4	中央診療棟改修	機械設備工事	6/4	BR19・20	0.84	－	既設内
	5	動物実験施設改修	ガス管路	7/28～30	CC～CE54～63	0.7～1.08	－	既設内
	6		雨水排水桝	7/30	CC58	1.40	0.9	中世溝、近世近代層確認
	7		雨水排水管路	7/30	CC57～CD58	1.20	0.9	近世層確認
	8		矢板設置	8/5	CD～CJ46～48	0.60	－	造成土内
	9		排水槽地点支障配管確認	10/17	CJ・CK61・62	0.60	－	造成土内
	10		機械設備管路	10/23・29	CI～CJ58・59	0.7-0.85	－	造成土内
	11		機械設備桝	10/21	CJ58	1.80	1.10	弥生～古墳時代層まで掘削、中世土坑確認
	12		排水枡	11/13	CD・CE58～61	0.60	－	造成土内
	13	医歯薬融合型教育研究拠点施設新営	ガス管	8/25	BP63・64	0.80	－	既設内
	14		電気設備工事（管路）	10/3	BE69・70	1.30	1.20	青灰色粘質土層（中世？）を確認
	15		排水枡①	10/2	BB69	1.63	0.70	中世～近世近代層を確認
	16		排水枡②		BB69	1.30	0.70	
	17		管路（南北）		BA69～BI70	1.3-1.5	0.70	
	18		管路（東西）	10/3	BC66～BB69	1.2-1.3	0.85	
	19		カーブミラー基礎	10/8	BL70	1.30	0.80	
	20		車止め基礎	10/8	BJ・BL67	1.00	－	既設内
	21		排水管	10/6	BJ-BL66・67	0.70	－	既設内
	22	中央診療棟新営	電柱新設	9/22	CE41、CF44、CK47	1.7～1.8	1.2～1.3	オーガ掘削1.8m、造成土以下、灰色粘質土層確認
	23	医学資料棟	給排水管工事	12/15	AE～AK42	0.80	－	造成土内
	24	グラウンド復旧工事	防球ネット移設	2/5・6	CP～DF68	2.10	1.1～1.2	オーガー掘削（6.6m間隔、13ヶ所）。１ヶ所で貝層確認（GL約-1.6m）

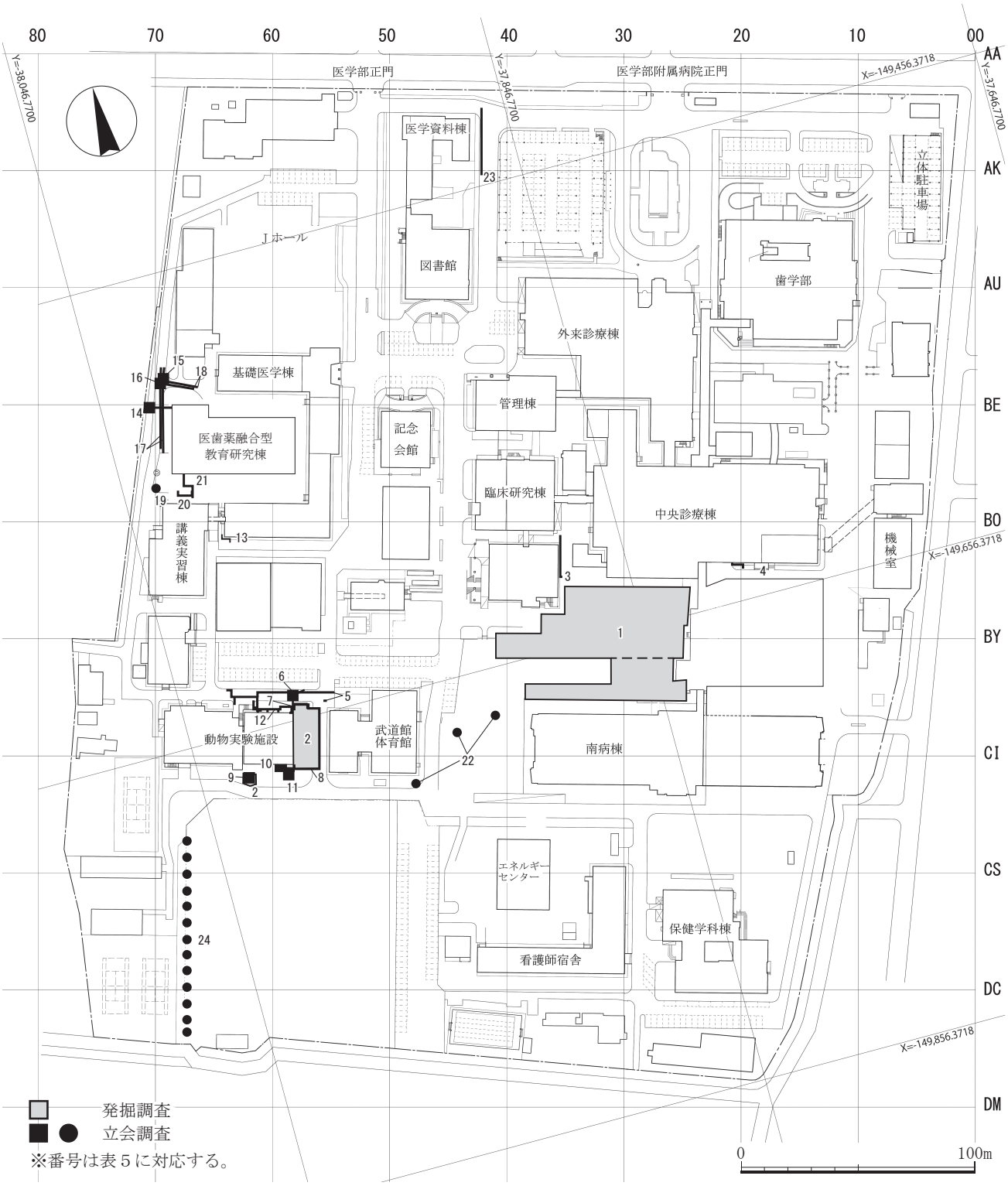


図24　2014年度の調査地点【２】－鹿田地区－（縮尺1/2,500）

第３章　調査資料の整理・研究および公開・活用

第１節　調査資料の整理・研究

１．調査資料の整理

2014年度は、津島岡大遺跡第33次調査の整理作業を実施し、『津島岡大遺跡21』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告30）として刊行した。縄文時代中期の遺構・遺物、古墳時代中～後期の陶質土器、古代の総柱建物跡などを報告した。このほかに鹿田遺跡第24次調査の遺物・土壌の洗浄、鹿田遺跡第12・23・24次調査の遺物接合および復元作業、鹿田遺跡第９・11次調査の実測作業を行った。また、注記用の機材を2014年８月～2015年２月にかけてレンタルし、鹿田遺跡第20・22・23・24次調査、津島岡大遺跡第33次調査出土遺物の注記作業を行った。

これらに併行して2012年度より開始した発掘調査出土資料データベースへの入力作業を継続して行った。年度末までに『鹿田遺跡７』までの既刊報告書の基礎データの入力が完了した。さらにデータの誤標記の修整や語句の統一など、データベースの本格的運用に向けた調整作業を行った。

２．調査資料の保存処理

ａ．木製品のPEG処理

2014年度は、昨年度より継続して実施してきた第12期の保存処理を３月で完了した。

第12期：鹿田遺跡第12次（井戸枠材・杭）、第18次Ｂ地点（板材・杭ほか）、津島岡大遺跡第９次（サンプル）、第12次（サンプル）

表６　木器保存処理工程

期	年月日	作業内容
第12期	2014年４月18日	濃度 70%
	2014年６月11日	濃度 80%
	2014年８月22日	濃度 90%
	2014年９月30日	濃度 95%
	2015年３月31日	濃度100%

なお、第13期の準備作業（計測・サンプル採取等）については、その一部を博物館実習、オン・ザ･ジョブトレーニング、学内ワークスタディの作業として調査員の指導のもと学生と共に行った。

ｂ．出土遺物の委託保存処理

①鹿田遺跡第24次調査出土の絵馬２点（奈良時代後半）

②鹿田遺跡第25次調査出土の人骨、烏帽子、小刀、棺釘など木棺墓の一部切り取り部（鎌倉時代後半）

③鹿田遺跡第25次調査出土の折敷（鎌倉時代後半）

①は、絵馬という資料の性格上、保存処理は困難であるとの助言を得て、レプリカの作成という対応をとることとした。（株）京都科学にレプリカ作成を依頼し、2014年11月に納品された（巻頭カラー上、図25）。なお、描かれた猿駒曳や牛の表現の復元については、本センターと同機関によって十分な検討を加えた。

②、③は、（株）吉田生物研究所に保存処理を依頼した。これらは発掘時に現地で切り取りを行った。②の烏帽子については漆の塗膜分析を依頼し、2014年12月に納品された（巻頭カラー下）。（山口）

図25　絵馬（牛）のレプリカ

第２節　調査成果の公開・活用

１．公開・開示

ａ．第16回岡山大学キャンパス発掘成果展

⑴　概要と成果

今年度の発掘成果展は、2014年度の調査で出土した鎌倉時代の烏帽子出土の墓を展示の目玉として、鹿田荘に生きた人物像に迫るというコンセプトで、「鹿田荘の人と時代」と題し開催した。展示に際しては、その人物の生活や社会背景を描き出すために、平安時代末～鎌倉時代初めを境に変化する屋敷地の中の諸要素を、視角的に見せることとした。具体的には、時期的な変化を示す「墓」・「屋敷地の区画溝」・「井戸の祭祀」・「器」に注目した。

会場展示は2015年１月７日～12日の６日間である。期間中、土曜日午後にコウコガク・カフェを１回、最終日に講演会を開催した。コウコガク・カフェはセンター調査員と少人数の参加者が、質疑を含めて対話を楽しみつつ、展示内容の理解を深めるというものである。少人数であるからこそ参加者からの発言も多く、満足度の高い催しとなった。講演会では、展示テーマに沿って学内外から３名の講師を招き、それぞれ、広く荘園研究の立場から、文献資料研究から、そして最新の発掘調査の成果を盛り込んだ講演となった。講演会には満場となる105人が訪れ、アンケートからも、展示内容の理解につながった等、講演会の好印象を記しているものが多く見られ、大変好評だった。また関連企画として、2013年度に決定した鹿田遺跡マスコットキャラクター４体の名前を一般公募し、最終日に結果を発表した。

また、授業の受け入れも２回行った。教養教育「考古学の最前線」、および文学部学芸員課程の講義に、本展示会見学が盛り込まれたものであり、計158人の学生に会場で展示解説を行いそれを授業に代えた。

６日間という短期間、また小規模なスペースにも関わらず、本展示会の総参加者数は657人に上った。テーマを絞り込んだ点や、最新成果を織り込み、何よりわかりやすい展示を目指した点等がこうした成果に結びついたと考えられる。また授業で、構内遺跡の実物資料に触れる機会を設けることで、構内遺跡への関心を高める効果が期待される。各企画の開催日程は下記の通りである。

・展示：2015年１月７日（水）～12日（月・祝）岡山大学創立五十周年記念館交流サロン　参加者545人
・コウコガク・カフェ：2015年１月10日（土）　同ホワイエ　参加者７人
・講演会：2015年１月12日（月・祝）同大会議室　参加者105人
　宇野隆夫（帝塚山大学文学部文化創造学科）「荘園遺跡研究の現状と鹿田遺跡」
　久野修義（岡山大学大学院社会文化科学研究科）「文献からみた鹿田庄」
　山本悦世（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）「平安・鎌倉時代の鹿田遺跡」
・キャラクター名前募集　公募期間：2014年12月８日～2015年１月10日、発表１月12日　応募者78人

各企画について、以下詳細を述べる。

⑵　展示会「鹿田荘の人と時代」

展示は、テーマに沿って、会場を「墓」コーナー・「屋敷地」コーナーに二分して行った。それぞれのコーナーにおいて、「平安時代後半」と「鎌倉時代」、この両時期の変化を示した。

図26　鎌倉時代木棺墓の復元展示

「墓コーナー」では、平安時代、鎌倉

時代それぞれ２基の実物大の復元展示を行った。実際の遺構の切り取りと模型を組み合わせ、墓の構造、埋葬方法、副葬品の解説を加えて、会場にいながらも、調査現場を体感できるような展示とした。特に烏帽子の墓は、烏帽子のほか、木棺の痕跡、棺釘、烏帽子に接した骨等も、出土状況をそのままに切り取り展示したもので、保存処理後初公開の場ともなった。光沢を取り戻した烏帽子に加え、豊かな副葬品の状況も間近にみることができ、好評を博した。

図27　授業の様子

「屋敷地コーナー」では、両時期の、井戸の祭祀、屋敷地を区画する溝、器の変化を具体的に見ることとした。井戸の祭祀については、各時期２基ずつの井戸の模型を展示し、井戸内の遺物の出土状況の違いを視覚的にわかりやすく示した。屋敷地を区画する溝の変化については、写真パネルを多用し、溝の規模や形状、区画ラインの推移を示した。加えて出土遺物の中でも、居館の存在等、屋敷地の性格を示すものをピックアップした。最後に鹿田荘の時代の人物像について、烏帽子の墓の被葬者像をイメージしたイラストで、屋敷地を歩く人物として表しまとめた。

図28　講演会の様子

そのほかに2013年に出土した絵馬のレプリカが完成したことから、そのお披露目として、平安時代前半の鹿田遺跡の解説を付けて紹介するコーナーと、体験コーナーも設定した。

「体験コーナー」では、展示品である烏帽子と絵馬を取り上げ、「烏帽子をつくろう、かぶってみよう」・「絵馬を書こう」を行った。出土品の大きさや、烏帽子の構造について、より実感したり、烏帽子をかぶって写真撮影ができるスペースも設け、親しみやすい効果を演出した。

図29　鹿田遺跡のキャラクター

⑶　キャラクター名前募集企画

2013年度に公募して決定した鹿田遺跡のキャラクター４体について、今年度名前を公募し、その結果を展示会最終日に発表した。応募期間は2014年12月８日～2015年１月10日である。ホームページ、センター報での挟み込み、来場者へのお知らせにより広報し、78名の応募が寄せられた。名前は、多数決で決定したが、バラつきが多く、複数の名前が拮抗したものはセンター職員の投票により決定した。名前は「しかたん」・「シカザル」・「もーしか」・「わらりん」である（図29）。

結果発表は、展示会最終日の講演会終了後に同会場で行った。これら４体のキャラクターは、今後、展示会・現地説明会等で活躍する予定である。

昨年度から２年連続したキャラクター企画には予想以上の反響があり、マスコミ等にも多く取り上げられた。学生にも好感触の反応がみられ、注目度は高かった。こうした企画を通じて、楽しみながら鹿田遺跡に関心を持ってもらえたのではないか。こうした企画や、さまざまな場でキャラクターが利用されるなど、今後の広がり

が期待される。

⑷　アンケート結果

107枚を回収した。回収率は20％である。設問は展示のわかり易さ、広報媒体、印象に残ったもの等について問うもので、わかり易さについては、全体の９割が非常にわかりやすい・わかりやすいと回答している。また印象に残ったもので一番多かったものは「烏帽子（28名）」、次いで「墓（16名）」、「うつわ・井戸（各７名）」と続き、展示する側の意図が伝わっている結果が得られた。

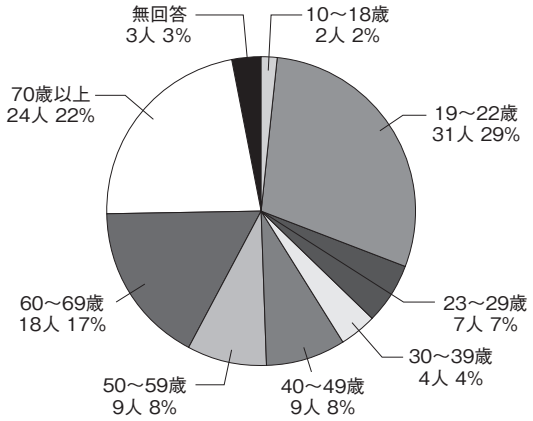


図30　展示会参加者の年齢構成

参加者の年代別内訳では、19～22歳が30％近くを占め、若年層が最も高いという、例年にない成果があった。次いで70歳以上（24％）、60～69歳（18％）と続く。年代層を「～22歳まで」の生徒・学生層、「23歳～59歳」のおおむね社会人層、「60歳以上」のおおむね退職者にあたる層の三つに分けてみると、順に33.5％、31.7％、42％という割合になる（図30）。今回、授業での受け入れが多かったことの現れでもあり、また展示会日程が短期間かつ平日中心であることから、参加しやすい年代層が限られていると考えられる。

そのほかにリピーターの割合が６割との結果が得られており、毎回、この展示会が評価されているものと捉えたい。今後も期待に応える魅力ある企画を続けていきたい。（岩﨑）

２．資料・施設等の利活用

ａ．調査・研究への支援

⑴　資料調査協力

・津島岡大遺跡第23次調査出土木器：下江健太（鳥取県埋蔵文化財センター）2014年５月30日
・鹿田遺跡第１次調査出土曲物：星野安治（奈良文化財研究所）2014年６月９日
・津島岡大遺跡第２・３・23次・立会調査出土縄文土器：信里芳紀（香川県埋蔵文化財センター）
2014年６月25日
・津島岡大遺跡第５次調査出土縄文土器：福永雅大（九州大学大学院）2014年７月17･18日
・津島岡大遺跡第17･22次調査出土縄文土器：中野良一（愛媛県埋蔵文化財センター）2014年８月20･21日
・津島岡大遺跡出土石器：野崎麻衣（岡山大学）2014年９月３日
・津島岡大遺跡第23次調査出土縄文土器：柴田将幹（同志社大学大学院）2014年９月24･25日
・津島岡大遺跡第５次調査出土石器：サルティニ・レアンドロ（岡山大学大学院）
2014年９月30～10月２日、10月31日
・鹿田遺跡出土手焙り形土器：島崎東（岡山県古代吉備文化財センター）2014年12月９日
・津島岡大遺跡出土アンペラ：鈴木三男（代表、東北大学植物園）・小林和貴・能城修一・佐々木由香他
2014年12月23日

⑵　図書の貸し出し

図書の外部貸し出し：18件（岡山大学教員・学生ほか）

⑶　資料の貸し出し

・土器スタンプ：ネイロ堂　古墳カフェin吉備　2014年４月２～20日

・展示用タブレット（５台）：学芸員課程授業　2014年５月19日
・津島岡大遺跡出土ドングリ・トチ（アルコール漬け）：学芸員課程授業　2014年７月16日
・鹿田遺跡第24次調査出土絵馬（猿駒曳）写真および復元イメージ図：山梨県立博物館
　平成26年度秋期企画展『甲斐の黒駒』展示パネルおよび展示図録（展示期間　2014年10月11日～12月１日）
・鹿田遺跡第24次調査出土絵馬（猿駒曳）写真および赤外線写真：徳島市立考古資料館
　平成26年度特別企画展『馬、かける』展示パネルおよび展示図録（展示期間　2014年９月15日～12月12日）
・津島岡大遺跡第５次調査出土石器：サルティニ・レアンドロ（岡山大学大学院）　非破壊分析（12点）
2014年11月25～12月25日

⑷　写真掲載
・『岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年』、『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』16･23･27号、『鹿田遺跡』５掲載の写真および図版６点：岡山郷土文化財団『岡山の自然と文化』34号

⑸　執筆依頼
・考古学研究会『考古学研究』244号　考古フォーカス
・雄山閣『季刊　考古学』129号考古学会ニュース（校正）

ｂ．教育支援

⑴　博物館実習　2014年８月７・８、11・12、18～21日、補講22日

2014年度は30名の実習生が受講した。１班８人程度で４班に分かれて、各班２日間にわたる実習を行った（８月７・８日、８月11・12日、８月18・19日、８月20・21日）。なお、１日受講できなかった学生がいたため、８月22日に補講日を設けた。発掘調査で出土した遺物の整理作業体験から、考古資料の取り扱いに関する基本的知識の習得を授業目的として、本センターにおいて室内整理の内容とした。実習は遺物の洗浄・注記・接合、そして木製品の保存処理工程、貝の保管作業を実施した。最終日に本実習の感想を発表し、意見交換を行って全体をまとめた。

表７　2014年度の非常勤講師の委託依頼

職　名	氏　名	担当科目	委嘱期間	備　考
教　授	山本　悦世	博物館実習	平成26年４月１日～平成27年３月31日	通年（水曜日３・４・５限）
助　教	岩崎　志保	博物館実習	平成26年４月１日～平成27年３月31日	通年（水曜日３・４・５限）
助　教	野崎　貴博	博物館実習	平成26年４月１日～平成27年３月31日	通年（水曜日３・４・５限）
助　教	南　健太郎	博物館実習	平成26年４月１日～平成27年３月31日	通年（水曜日３・４・５限）
助　教	山口　雄治	博物館実習	平成26年４月１日～平成27年３月31日	通年（水曜日３・４・５限）

⑵　大学における授業の受け入れ
・第16回岡山大学キャンパス発掘成果展の見学：社会文化科学研究科・新納泉講義において、2015年１月
・第16回岡山大学キャンパス発掘成果展の見学：学芸員課程・光本順講義において、2015年１月

⑶　講師の派遣
南健太郎
・国際センターキャンパスアジア：リージョナルカンファレンス　2014年６月27日

⑷　オン・ザ・ジョブトレーニング

本事業は、学生が実際の業務を行うことで経験・技術・技能を習得し、より一層のスキルアップを目指すものである。学生の募集においては、文化財に関する仕事を体験したいという一定の条件を付し、学務部を通して広く呼びかけた。2014年度は、合計５名の学生を雇用した。雇用形態は、事務的手続きの関係から、雇用初期はアルバイト雇用、それ以後は非常勤雇用となった。

それぞれの所属は、文学部１名、法学部２名、工学部１名、マッチングプログラムコース１名である。文系・

理系を問わず、幅広く学生を雇用することができた。業務は、構内遺跡出土の遺物整理作業、データベース構築作業を基本としつつ、一部では鹿田遺跡第26次調査での発掘調査補助作業、第16回岡山大学キャンパス発掘成果展の準備作業も加え、調査・整理・展示公開に関する内容とした。

⑸　学内ワークスタディ

本事業は、学生に対する一定の教育的配慮の下、学生が学内の業務に従事し報酬を得ることで、必要な学費を賄いつつ、大学で学修する取り組みである。本センターでは、2014年度からオン・ザ・ジョブトレーニングと同様に学生の募集を行い、１名の学生（文学部）を雇用した。雇用形態は、非常勤雇用（ワークスタディスタッフ）であり、オン・ザ・ジョブトレーニングと同様の業務内容を行った。

Ｃ．社会貢献

⑴　中学生職場体験

・岡山市立中央中学校　2014年11月12日～14日　３名
・岡山市立岡北中学校　2014年11月12日～14日　３名

⑵　職員の兼業

山本悦世

・岡山県環境影響評価技術審査委員会　委員　H26.4.1～H29.3.31
・平成26年度埋蔵文化財保護対策委員会（一般国道180号改築）委員　H26.5.1～H27.3.31
・平成26年度埋蔵文化財保護対策委員会（旭川放水路改修）委員　H26.5.20～H27.3.31
・島根県古代文化センター企画運営員会　委員　H26.4.1～H27.3.31
・徳島県文化財保護審議委員会　委員　H26.11.1.～H28.10.31

山口雄治

・同志社大学文化遺産情報科学研究センター　研究員　H26.4.1～H27.3.31

⑶　展示見学の受け入れ

・常設展示室　１名（４月）、１名（11月）、１名（12月）、１名（２月）、８名（３月）
・明治大学博物館友の会　26名　2014年５月30日：センター展示室・考古資料展示室・鹿田遺跡第25次発掘調査現場

⑷　マスメディア対応

・鹿田遺跡第25次調査：山陽新聞（2014/７/11, ７/12, ７/15）、読売新聞（2014/７/12, ７/13）、朝日新聞（2014/７/13）、日経新聞（2014/７/13）、産経新聞（2014/７/13）、毎日新聞（2014/７/13）、京都新聞（2014/７/13）、KSBテレビ、NHK
・第16回岡山大学キャンパス発掘成果展：朝日新聞（2015/１/６）、岡大広報フェイスブック（2015/１/７）
・マスコットキャラクター名前募集：山陽新聞（2014/４/９）
・マスコットキャラクター名前決定：岡大広報フェイスブック（2015/１/15）
・絵馬グッズ：山陽新聞（2014/11/25）

第３節　調査研究員の個別研究活動

１．外部資金の獲得状況

南健太郎

・平成26年度鞠智城跡「特別研究」「石積技術からみた古代山城築造集団の研究」研究期間：2014年４月～2015年３月、資金支給機関：熊本県教育委員会

山口雄治

・第９回瀬戸内海文化研究・活動助成「環瀬戸内海沿岸文化景観の基層の体験学習型交流－歴史と食を通じた環境多様性と文化多様性の理解－」、研究期間：2014年４月～2015年３月、資金支給機関：公益財団法人福武財団

２．論文・資料報告ほか

山本悦世2015「鹿田遺跡の土地区画と岡山平野の条里関連遺構」『条里制・古代都市研究』第30号　条里制・古代都市研究会：pp. 87-98

野崎貴博2014「天狗山古墳出土挂甲の復原」『天狗山古墳』岡山大学考古学研究室・天狗山古墳発掘調査団：pp. 100-104

南健太郎2014「青銅器の有する意味とは」『考古学研究60の論点』考古学研究会：pp. 35-36

南健太郎2014「小型鏡生産における鋳造技術の地域間比較－湯口と鈕孔方向の関係を中心に－」『アジア鋳造技術史学会研究発表資料集』８号　アジア鋳造技術史学会：pp. 80-83

南健太郎2014「山陽地域における青銅器模倣品の展開」『第63回埋蔵文化財研究集会　青銅器の模倣Ⅰ』埋蔵文化財研究会：pp. 42-54

南健太郎2015「東アジアにおける銅鏡鋳造技術の系譜関係－湯口の位置を中心に－」『FUSUS』VOL. 7　アジア鋳造技術史学会：pp. 97-108

南健太郎2015「鹿田遺跡出土の銅鏃について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2013』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター：pp. 32-37

南健太郎2015「石積遺構からみた古代山城築造技術に関する試論」『鞠智城と古代社会』第３号　熊本県教育委員会：pp. 87-101

山口雄治2014「考古学におけるGISの有効性」『考古学研究60の論点』考古学研究会：pp. 135-136

山口雄治2014「中部瀬戸内北岸地域における縄文時代晩期後葉」『中四国地域における縄文時代晩期後葉の歴史像』中四国縄文研究会：pp. 37-52

山口雄治2015「中四国地方における縄文時代の農耕問題の現状と課題」『第25回　九州縄文研究会福岡大会　九州縄文晩期の農耕問題を考える　発表要旨・資料集』九州縄文研究会：pp. 201-204

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（文責：山口雄治）2015「岡山県岡山市　鹿田遺跡（岡山大学構地内）の発掘調査」『考古学研究』61-４　考古学研究会：pp. 110-112

端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治2015「庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場）の成果」『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室　紀要』１　徳島大学埋蔵文化財調査室：pp. 43-98

３．研究発表・講演ほか

山本悦世

・「平安・鎌倉時代の鹿田遺跡」第16回岡山大学キャンパス発掘成果展講演会　2015年１月12日、岡山大学創立五十周年記念会館

野崎貴博

・「埴輪からみた古墳時代中期の吉備」倉敷埋蔵文化財センター市民講座　2014年11月９日、倉敷埋蔵文化財センター

南健太郎

・「青銅器からみた吉備弥生社会の動態」考古学研究会2014年７月岡山例会　2014年７月12日、岡山大学

・「弥生時代の青銅器鋳造技術－銅鏡を中心に－」平成26年度荒神谷遺跡講演会　2014年９月27日、荒神谷博物館

・「小型鏡生産における鋳造技術の地域間比較－湯口と鈕孔方向の関係を中心に－」アジア鋳造技術史学会第８回京都大会　2014年９月20日、京都市国際交流会館

・「山陽地域における青銅器模倣品の展開」第63回埋蔵文化財研究集会　2014年10月25日、福岡市埋蔵文化財センター

・「石積遺構からみた古代山城築造技術に関する試論」鞠智城跡「特別研究」成果報告会　2015年３月14日、くまもと県民交流会館パレア

山口雄治

・「中部瀬戸内北岸地域における縄文時代晩期」第25回中四国縄文研究会徳島大会　2014年７月５日、徳島大学

・「聖書考古学と日本考古学」フェリーチェ文化講座【聖書の考古学】 2014年10月25日、ノートルダム清心女子大学

福原啓介、山口雄治、津村宏臣

・「環瀬戸内海地域における文化多様性と学校教育の現状と課題」第31回文化財科学会　2014年７月５，６日、奈良教育大学

HAYAKAWA, Yuichi S., OBANAWA, Hiroyuki., NARUHASHI, Ryutaro., YOSHIDA, Hidetsugu., ZAIKI, Masumi., KONTANI, Ryoichi., SUDO, Hiroshi., ODAKA, Takahiro., YAMAGUCHI, Yuji., KULAKOĞLU, Fikri.

・Spatial analysis of prehistoric archaeological sites and landforms in Kayseri, central Turkey using multiscale topographic data., Japan Geoscience Union Meeting 2014、2014年４月28日、パシフィコ横浜

第４章　2014年度の調査・研究のまとめ

2014年度は、鹿田遺跡で２件の発掘調査を実施した。鹿田遺跡第25次調査は2013年度より継続して行い、平安時代末の墓や鎌倉時代後半の木棺墓が脚光を浴びた。特に後者では着装状態での烏帽子が出土し、管見の限り全国でも初出土であったこともあって、多くのメディアで取り上げられた。その効果もあり、現地説明会も非常に盛況であった。また、弥生～古墳時代の畦畔も確認し、当該期において北側に想定される居住域と南側で確認された畦畔の境界地点のデータを得ることができた。これにより、居住域～耕作地にかけての切れ目ない景観復元が可能となるだろう。

第26次調査では、弥生時代後期の畦畔、古墳時代初頭の井戸、畠状遺構、中世の井戸および屋敷地を区画する溝が確認され、これまであまりデータのなかった鹿田キャンパス南西部の様相を明かにできた。特に畠状遺構は鹿田遺跡で初めて確認されたものであり、今後自然科学分析などを積極的に行い評価していかなければならないと考える。また中世の溝は、そのコーナー部分が明らかになったことで、本調査区北側の第６・７・17次調査において想定されていた屋敷地の規模を確定することができた。

立会調査では、鹿田キャンパスで行われたグラウンド復旧工事に伴って確認された貝層が注目される。オーガー掘削という制約があったものの、古代の貝塚の存在が推定された。当該時期における生業はもちろん、集落周辺の空間利用に関するデータを得ることができ、古代集落の景観復元に新たな要素が加わったといえる。

津島岡大遺跡では発掘調査はなかったが、立会調査において旧陸軍関連施設の一部を検出した。また、旧地形復元のためのボーリング調査も実施した。この成果については、別の機会に報告する予定である。

資料整理では、津島岡大遺跡第33次調査の成果をまとめ、『津島岡大遺跡21』として刊行した。本調査地点では、縄文時代中期前半の遺構・遺物が確認され、これまでほとんど不透明であった当該期の活動痕跡について明かにできた。また古代では総柱建物跡が認められ、その位置に関して条里の里境との関連が報告された。その他に古墳時代中～後期における陶質土器の出土も注目され、今後十分な評価をしていきたい。

展示会は、『鹿田荘の人と時代』と題し2015年１月７日～12日にかけて開催した。鹿田遺跡における平安時代後半～鎌倉時代の墓・屋敷地・井戸・器に注目し、その時代の人や社会の変化について取り上げた。墓の展示コーナーでは、両時期の実物大の復元展示を行い、その大きさや副葬品の配置等について体感できるようにした。鹿田遺跡第25次調査の鎌倉時代の木棺墓についても展示し、保存処理の完了した美しい烏帽子には、見学者の熱い視線が注がれた。展示会最終日には講演会を開催し、３名の講師に展示内容に関わる講演を依頼した。その内容については、本書に掲載している。

その他に、2013年度に開催した『鹿田発掘30年　弥生時代を語る』の展示解説用タブレット端末や体験コーナーにおいて使用していた土器スタンプの借用依頼があった。展示会終了後においても調査・研究成果の周知・公開に大きな役割を果たした。また、2013年度に決定した鹿田遺跡マスコットキャラクター４体の名前が募集され、決定した。今後、展示会や現地説明会などで活躍することになるだろう。

本年度は、オン・ザ・ジョブトレーニングの他に新たに学内ワークスタディにも取り組んだ。６名の学生には発掘調査や遺物の整理・保管、展示会の準備といったセンターの主要業務を行ってもらった。文化財に関する実際の業務に取り組む中で、折に触れて文化財への興味・関心をもったという学生の感想を聞けたことは、経験・技術・技能を習得してもらう以上に大きな意味があったと考える。

以上、2014年度も調査・研究とその成果の公開および教育活動を行った。近年の鹿田キャンパスにおける発掘調査では絵馬や烏帽子といった新資料の検出があった。今後はこれらの成果を報告書として発信できるよう、取り組んでいきたい。

（山口）

第16回キャンパス発掘成果展『鹿田荘の人と時代』講演会記録

1．荘園遺跡研究の現状と鹿田遺跡

帝塚山大学文学部文化創造学科　宇　野　隆　夫

1．考古学の研究法と荘園研究

荘園遺跡の研究は、通常の考古学の研究スタイルと少し違うところがあるように思います。私自身が京都大学で学生や助手をしていた頃と、富山大学に移って以後とで、関心というものがかなり大きく変わりまして、どのように変わって、それが荘園研究に結びついたのか、まずお話したいと思います。初期には土器や青銅器等の遺物や、建物や濠や井戸等の遺構について、型式学や分布の変化に基づいてその背景を考えていくというのが、私の研究スタイルでした。これは遺物の研究は進むのですが、それが存在した社会へのアプローチ力は弱いということに気づいて、考古学の方法からいかに接近できるのかということを考えて、社会研究に関心を持ちました。そういったことで、初期には、日本古代の律令国家[1)]、それに続いての日本の荘園遺跡というものをテーマとして取り組んだということです。

それまでの遺物や遺構の研究ではなかなか歯が立たない分野で、少なくとも考古学の情報を総動員しなくてはいけない。考古学の情報だけでも足りず、日本史や歴史地理学や自然科学も含めた、学際的な課題であるということで、それをせめて考古学の情報だけでも総合化しないといけないということです。考古学の情報は、①食器様式、②役所官衙、都、集落の様式、③埋葬、④生産・流通様式、これら４つの要素でまとめることのできる４大分野であろうと考えています。当面考古学の範囲ですが、考古学のひとつの社会様式として、一つの考え方ができるのではないかということで取り組んでおります。

2001年に出版しました『荘園の考古学』のころの、私の個人的な問題意識は、日本考古学の全体的な情報として、古代の律令社会を境として研究が分断されているように感じていました。研究の全体としては、日本の古代国家の形成過程ということで、古い縄文・弥生時代から古代の律令国家まで、これを一つのまとまりとして研究される方が多い。そういう場合、日本の古代国家を過大評価する人がほとんどであろうと考えております。いつから国家と呼ぶかは別として、古代の律令国家を成熟した国家と呼ぶ、どうしたら飛鳥・奈良時代の国家を成熟しているといえるのか、私には少し理解を超えているというようなことが、割と普通に言われています。逆に平安時代から以降を中心に研究なさる方は、これももちろん偏見かもしれないのですが、比較的日本の古代国家というものを過小に評価され、なんとなく平安時代から歴史が始まっているようなイメージを持たれる方が多いと思います。古代の律令国家の形成や、近世の統一政権の形成というのは一つの理解の柱があるのでわかりやすいと思うのですが、やはり古代から中世社会の形成というものをどのように理解するべきかということを考古学の立場から主張するうえで、この荘園というのは大変面白いテーマであると感じていたというのが発端です。荘園遺跡を、今ある情報でモデルとして呈示したい。間違っていてもいいんです。間違っていたら新しい人がでてくればどんどん訂正してくれるのでいいんですが、少なくとも今の時点でこう解釈できるというモデルを紹介したいというのが、私の目標であったわけです。

2．荘園遺跡研究の初期の課題

８世紀の中頃以降９世紀は、ある程度荘園遺跡の研究例が存在しました。荘園の荘所というのは荘園政所という意味で私は使っています。政所とは財政、経営活動をするところで、いろんなところに政所はありますが、荘

園に置かれた経営の中心の場ということで、荘所がどんな建物であるのかということが研究の中心でした。いわゆる初期荘園といわれているものが、日本の歴史上でどれだけの意味合いがあるのか、どれだけの意味を果たしたのかということもあり、そのころの研究の大勢は、初期荘園と中世荘園との間には大きな断絶があってつながらないといわれていましたが、私はそんなはずはないと思っていました。ただそれを何をもって説明するかというところで、実際に突き当たってみたら10・11世紀の集落はなかなかつかみにくいのです。飛鳥・奈良時代になると、集落が大きくなって長期間存在することが多くなりますので、割と考古学的につかみやすいのですが、10・11世紀というのは集落が小さな単位で、短期で移動していくという傾向が出てきますので、なかなかモデルとしてつかみにくいのです。ですから９世紀と12世紀とを結ぶロジックがつくれなかったのです。11世紀末、本格的には12世紀中頃以降に荘園関係の遺跡が増加していくのですが、このころになりますと、遺跡という概念は邪魔になります。遺跡という単位にこだわっていてはなかなか全体が見えない、そういう時代にどうやって取り組んでいくのかが課題でした。ただ一つ気づいた点があります。条里地割という、一辺が100m少し程の、正方形の土地の区画なんですが、条里の地割というものが荘園の発展と関わっていたらしい、これが、私が悩んでいたことを、理屈づける一つのロジックになりました。この条里地割というのは、律令国家が土地を支配するために作り上げたものというのは間違いありません。古代の荘園の地図は、非常に少なく、平安時代、９世紀以降に目立ってくるといわれています。普遍化するのは12世紀以降でしょう。これは考古学のデータを集成していけばある程度見えてきます。どうも国家的土地所有ではなくて土地の経営ということと、この条里地割とが結びついていたらしい、というのがこの時の私の一つの解答です。

３．荘園遺跡モデル化の方針

荘園遺跡のモデル化に際しては二つの問題点があります。一つは中心を認定してモデル化しないといけない、もう一点は遺跡を超えた地域景観のモデルをつくらないといけない、この二つです。これを行わないと全体が理解できないということです。古代の前期、いわゆる初期荘園といわれる８世紀後半から９世紀では、有力寺社等が設置した荘所をその時点でモデル化したい。また10・11世紀には、特定の特徴をもつ荘所がないシステムであろうと考えました。特別な荘所でなくて、新興層、いわゆる郡領級豪族よりも下の層の人たちの屋敷、あるいはもう少し上の在地有力層の人たちの居館が、荘所の役割をもっている段階でしょう。だから特に荘園ということではなしに、その地域にある遺跡を全て可視化する、そういったことで理解できるのではないかと考えます。

私自身はなぜ、条里地割を施行するのかということについては、荘園であるということには、寄進も含めて、免税が非常に大きな問題で、このころから、免税した空間というものを現地で見えるようにしなくてはいけない、そのため、律令国家としては６年に１回土地の測量を、江戸時代、豊臣秀吉以降だと「検地」と呼びますが、それぞれの土地でどのような耕作活動がなされているかについての、地図と台帳を作り替えるはずなんです。８世紀以降は、国府にある地図がずっと作り替えられるわけで、国衙の地図に合わせた条里地割を、目に見える形で現地に作り、またそれが特別な免除を受けた空間であることを表現することも、すべてとは言いませんが、重要な要因であったと考えています。

中世前期には権門寺社、とりわけ顕密といわれるような、特に密教系山岳宗教の、つまり高野山、比叡山を頂点とするような宗教ネットワークと関係が深い独特の荘所が中世の前期、12世紀から14世紀にかけてはあるということです。そういうものができるころには、条里施行が最盛期を迎える、いわゆる荘園公領体制と呼ばれるような荘園網、国の直轄領といってよいようなものも同等に扱われるような時代のありかたが、中世前期だろうと考えています。

中世後期は、そういうものがなくなっていき、代わりに現れる武家居館に、荘所機能が収斂されていく時代でしょう。遺跡を超えた地域景観復元、そのモデル化を目的に、GIS（地理情報システム）で、いろいろな情報を

一括して地図上で管理する仕組みを作ろうと努力しています。それが荘園について十分できているわけではないのですが、荘園という課題にはGISは最適の道具であると考えます。

2001年の時点でいくつかのモデルをつくりました。それが適切かどうかを検証していくことが課題ですが、いまのところ、それを大きく変えるような情報は得られていません。初期荘園の中の一つの型として、中央に記録されない荘園があります。石川県金沢市上荒屋遺跡は、綾庄という荘園がありますが、これは中央に記録されていない荘園です。こういうものが実際には結構みつかっています。それから荘園開発を考える時に国が指導したような荘園の裾野に、こういった荘園と名乗っている、もちろん記録が残っていないだけという可能性もありますが、中央の直轄ではない、何等かの有力者が介在するようなあり方の荘園があります。この遺跡は全体が荘園の遺跡ですが、９世紀の初めまではほんとうに小規模なものです。こういったものを古代前期荘園の在地有力層主導型モデル（図31）、これは東大寺等ではなく在地が主導していると考えているものです。運河、建物、広場があるという構造はユーラシア的に面白いと思います。

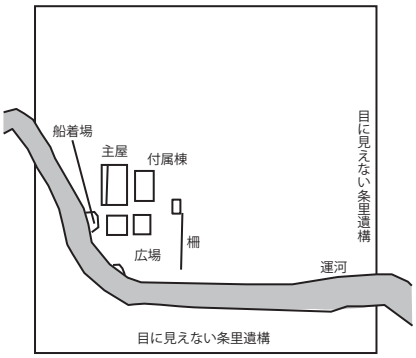


図31　在地有力層主導型モデル

ヨーロッパでも８世紀までは、ローマ帝国がつくった道路を基盤とする都市計画が続いているのですが、９世紀以降になるとヴァイキング都市を代表として、川の片側、あるいはそれが発展して川の両側に立地するような都市が増え、中世ヨーロッパの都市の原型になっていきます。中国でも唐の長安城という非常に安定したところにある首都を捨てて、例えば北宋の東京城などは、大変洪水の危険性の高い、危ない場所に首都を移すのです。その代り、運河による輸送には非常に便利なところにあります。日本でも平安京で、この頃次第に右京がすたれて、東側が発展していって、そのうち鴨川を越えて、鴨川の東も市街地になっていきます。やはり川筋が中心になっていきます。このようなユーラシアレベルの動向というものを、私はこの運河の横に建物・柵があるという空間に感じてしまいます。この広場というのは、ヨーロッパの都市でも、広場のそばには行政府・教会・市が立つというように、政治、宗教、経済の場として広場が機能するということがあります。おそらく日本の広場空間も、在地有力層の政治や宗教活動、経済活動の場となっています。そのほかに船着き場があります。荘府は大体50㎡から100㎡ほどで、片側にだけ庇を持つ大形建物、このクラスのものはこういったものである可能性が高いのではないかと考えています。それよりも格が上の有力寺社関連のものとして、複数のデータがあります。東大寺領横江庄遺跡という、越中の般若荘から作ったモデルですが、何よりも条里地割があります。寺院が主導した段階で部分的にですが、条里地割が始まっています。これはやはり国家的に許されたことだろうと思います。また船着き場も大型です。荘所も100㎡を超えてさらに大型の規模で庇を持ち、また竪穴の工房もあります。これは在地有力層だけではなく中央と深く関与するなかで出現する荘所構造です。

調査をしていくと、古代の記録にはないような規模の大きなものの存在がわかってきました。さきほどの有力寺社主導型モデルがあった坪ですが、その坪をはるかに超える範囲にあって、中心建物は倉庫群です。東端には管理棟があります。一番太い運河が流れていますが、上流から流れてきて速度を減じて屈曲するところ、このあたりが船着き場になります。文字資料として「東庄」とかかれたものが大量にあります。また西庄は、これは中央の記録に残るものですが、浅原内親王家の横江庄の荘園があったところが、のちに東大寺領横江庄の西庄になります。仏教施設もあったようです。また南側には南庄があります。東西南北に、ちょっととんでもない規模で、想像を超えるものです。

このように９世紀というのは、古代前期荘園の最盛期であると考えます。中央に記録されてない、裾野の広い荘園系と記録されていても、条里の何坪をも占有するような空間も出現してきます。それを中央がどのように認

知していたかはわかりません。荘園図にある荘所とはかけ離れたようなもので、９世紀こそが古代前期荘園の最盛期と考えます。これを思い切って復元したものが図32です。何本も運河が流れており、一番大きな運河は中心施設にまとわりついています。中心施設は倉庫群です。また仏教施設や、船着き場のあたりに管理施設、直接この荘園に関わる人たちの施設があります。その外縁に在地の郡領級の有力層が強く関与するような拠点、この場合は４つあります。東庄からは「道」の墨書が多く出土しています。この地方で有名な郡領級豪族である「道君氏」であることは間違いないでしょう。この運河をさかのぼっていくと、つきあたりは「道君氏」の氏寺とされる末松廃寺です。寺院のつきあたりからこうした扇状地の末端にある経営拠点、さらに港を経て都へとつながっているという構造が９世紀には復元できるのではないかと思います。

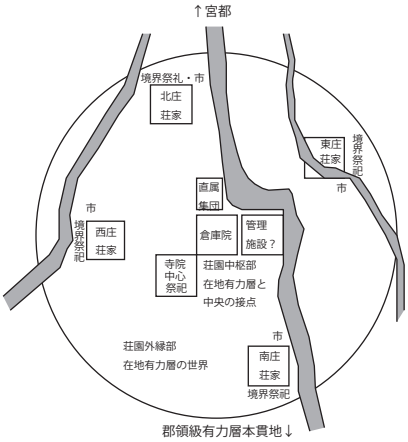


図32　古代荘園有力寺社主導モデル

鹿田遺跡についてまだ十分に理解していないのですが、有力寺社主導型の一つのタイプとしてあるような景観が推定できるのではないかと思います。摂関家や興福寺が関わっていると考えられる荘園ですので、大規模な荘園の一角、荘所として境界祭祀、さまざまな宗教行為、それから市が立っていた。市が立っているというのは、私が広場の機能を重視しており、そこからさまざまな地域産の焼き物やいろいろな物資が見つかるということから考えるものです。どちらの型かはわかりませんし、また別のタイプもあるのかもしれません。そのあたりをぜひ、鹿田荘で解明していただければと思います。

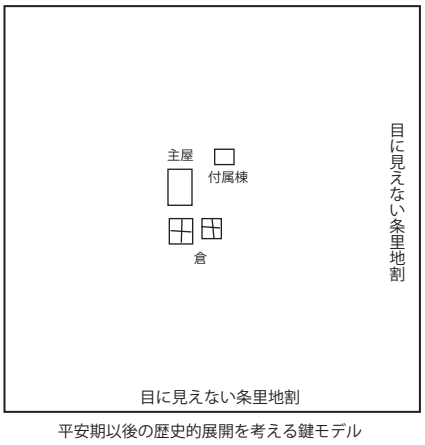


図33　古代荘園・民衆の経営拠点モデル

東日本に行くとかなり変わります。埼玉県の中堀遺跡では、９世紀の武蔵国の勅旨田の経営拠点がおかれています。一辺が110m前後の条里空間で、それに多くは合致していますが、中に経営する有力者の館、寺院、船着き場等や、工房など経営空間があります。こうしたものが東日本の型だろうと考えております。私が初期荘園を評価する際に一番重視しているのが、民衆の経営拠点モデルです（図33）。これはどの時代にでもあてはまるような一世帯、岡山大学の近藤義郎先生が提唱された単位集団といった概念で呼ばれる一世帯、つまり一世代か二世代でどんどん場所を移していくようなもので、よく見るとこの建物も50㎡前後と、一回り小さなものです。しかし一般の集落の中にあるものではやや大き目です。50㎡というのはそれくらいの程度です。そのほかには倉の有無や、附属棟の有無等があります。条里地割はありません。用水の掘削もしていません。このようなものはいつの時代にもあって、我々は見過ごしやすいのですが、８世紀の中頃以降確実に、こういう集落、あるいは土地境の痕跡が増えていくと感じています。この時代の土器が少量出土するとか、建物が少しひっかかるくらいの遺跡もきちんと集成すると、なかなか面白い８世紀後半の様相が見られます。こういう計画が活発化するというのが、日本の歴史上で一番重要な点であると思います。そういう基盤の上に、民衆の中での有力な在地有力層が経営するタイプ、あるいは中央の東大寺をはじめとする勢力と結びついて、非常に大規模な、なかには中央が意図した以上に大規模な活動をしているなど、そういうような構造をもつのが８世紀後半～９世紀の社会動向です。

９世紀を超えると、在地の郡領級の人々が関与するような荘所は、私の知る限りなくなっていきます。私はこういう階層の人たちの営みが充実することによって、少なくとも西日本では10・11世紀の新しい社会にいくのだ

ろうと考えています。10・11世紀の景観を復元するには、条里地割や、100㎡を超すような住居を有する集落単位を丹念に探すことが必要です。条里地割は増えてくるのですが、用水は独自に引いていなくても、経営拠点こそが中世社会の力をつくる基盤になるだろうと考えています。

平安時代、10世紀になりますと先ほど申しました東大寺の荘園も、一番重要な倉庫院がまったくなくなってしまいます。建物はあちこちにあるのですが、官衙的な匂いのない、普通の集落と変わらない、ただ少し大きくて、仏具、仏教関係のものがあるので、やはり寺院的な、宗教的な色彩の強い集団があり、運河があり、そのそばには、経済的な色彩の強い集団がいて、というような状況です。これが、10世紀の景観だと考えます。これを思い切ってモデル化します（図34）。末松廃寺という道君氏の氏寺は、９世紀をもって廃絶します。それと入れ替わるように出てきたのが、白山信仰関係の山岳寺院です。12世紀末になって白山が比叡山系の寺院となりますが、それより前、８世紀後半から山寺が増えてきます。これは北陸で確実にみることができる傾向です。10世紀になるとそれらがある程度北陸の地域ネットワークをなしていたのではないかと思われます。これが下流にいきますと、おそらく国衙があり、そこに港がある。そこにある集団もそれぞれに個性を持っていて、手工業生産の匂いが強く感じられます。海上の活動を目指すものもいますが、さまざまな人々が存在するというのが、北陸、近畿、西日本ではないかと考えています。西日本ではこれを確認できるところは少ないです。10・11世紀にきちんと集落の構造を理解できるような大型の集落が減ることは共通していますので、こういう単位を丹念に、ほんの小さい規模の、ほんのわずかでも遺物が出土するような遺跡をプロットしていくと、アプローチできるのではないかと思います。

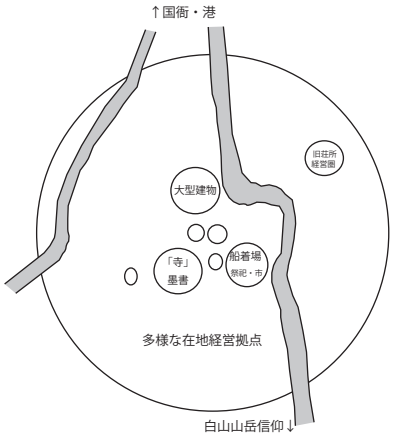


図34　古代後期荘園

東日本はそれとは異なり、中堀遺跡も９世紀を過ぎると、何よりも宗教的なものがなくなってしまい、居館風なものが中心施設として出現し、だんだんと充実しています。

以上のように常套的な理解で、日本史の理解に迎合するような形ですが、10・11世紀というのは各地でさまざまな独自の活動が活発化していて、考古学的にはそれを復元するのは難しくなってきています。このあたりは鹿田遺跡でもそうだろうと思いますが、やはりその中でわずかでもある情報を活かして、その空間の景観が復元できたらよいと思います。

４．中世の荘園遺跡

近畿地方で中世の荘園遺跡を見ていると、11世紀の終わりころにスタートし、まだその段階には小さくて、12～14世紀にかけて大型化していくという例が多いと思います。北陸地方ではほとんどが12世紀中頃～後半にスタートして、14世紀にかけて発展していく。早いものでは、南北朝期、14世紀中ごろに衰退するものもあれば、根強く残っているものは15世紀の初めころまで集落景観を保っているというのが、大体一般的な傾向と言えます。特に西日本で12世紀から14世紀、東日本では12世紀から13世紀前半まで、いわゆる「中世前期型」の荘所と認識できるようなものが存在するだろうというのが、私の仮説です。ですから鹿田荘のいろいろな経営空間にも多様なものが広がっていると思いますが、一つの中心的な場というのがどういうところで、どんな姿をしているのかということを是非知りたいと思います。

北陸では「中世前期型」と考える西川島遺跡のような構造が16世紀まで存続するような例もありますが、これは例外的なものだと考えています。北陸でも、15世紀には中世前期型荘園は確実に衰退傾向にあります。居館等

と入れ替わるように、中世前期型荘園は姿を変えていくことが多いのです。まだ発掘調査が十分ではなく、私自身が調査に関わったから少しひいき目にみているのかもしれませんが、富山県福光町諏訪社旧社地が、越中国石黒庄という荘園の中心部分であろうと推定しています。日本史では非常に有名な「関東下知状」という、荘園の中での訴訟記録があります。荘園領主方と地頭方、武家方が生々しく争う記録のある舞台になっています遺跡です。その中心部がどのようになっているのかを考えたモデルです(図35)。香城寺惣堂遺跡という寺院施設の周りに墳墓群があります。墓の出現も、中世の荘園と深くかかわっています。もちろん墓はずっと通時代的にあるのですが、明らかに平安期と中世とを比べると、11世紀の経塚等を端緒に、12世紀の中世墓は外部から非常に見えやすいところに作られるようになります。この山麓のところに方１町くらいの空間があります。ここに古道があって、小矢部川を下っていくと富山県高岡市、越中国府・国衙のあるところにつながっています。香城寺惣堂遺跡は山麓寺院ですが、この山全体が医王山という一つの宗教ネットワークを形成しています。なおかつ医王山は、白山の末にあたります。白山は比叡山、比叡社と深く連携を結んだ全国的なネットワークの末です。ここにある方一町くらいの空間ですが、香城寺土居というところがあります。これがおそらく地頭、武士方の拠点です。このように山麓寺院があって、荘所があって、武家の拠点があって、というのが、12・13世紀の石黒庄の景観であり、中世前期型の荘園はこうした姿をしているのではないかと考えています。

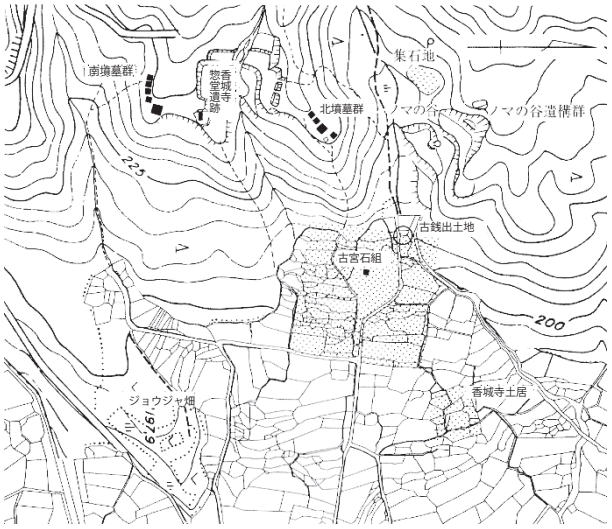


図35　富山県福光町諏訪社旧社地

石川県の加賀市三木だいもん遺跡（加賀国右庄）では、山岳側には白山の山岳寺院がちょうど裾野のところにあって、平野をみおろすような位置にあたります。そこにあります一番大きな建物は、四面庇の総柱建物です。これは170㎡ほどあって、一般のものと異なる、大きなものです。大事なことは四角い人工的な池があっておそらく庭園をもっていたと思われます。庭園を流れる水を含めて、ここから地域の用水が始まる、起点となるような場所であること、こういうのは荘園の一つの典型例です。

庭園についてはご承知のように、飛鳥時代に宮殿の庭園として神仙思想とともに日本に伝わってきたものです。また奈良時代の貴族の屋敷地にも庭園がつくられます。ただ奈良の寺院は、当たり前だと思うのですが、庭園はあまりつくらない。平安時代に出てくる京都のお寺は良い庭園を多くつくっているということで、神仙思想の元である道教と仏教の関係を非常に感じさせるものです。こうしたものが如何に地方のある程度の階層の人々にいきわたるかと考えると、このころが一つの契機になっていると考えられます。この段階以降、武家の屋敷にも庭園が作られます。中世前期だと本当に簡素なもので、池と流路といった水が流れるものしかありません。中世後期のように庭園は多くはなく、そのように庭園を持つ点、立地が密教系山岳寺院のおひざ元である点等が、三木だいもん遺跡にはみられます。

崇徳院御影堂領能登国穴水保では、白山神社というのがおそらく古代～現代まで動かずあって、この下にある建物がおそらく荘所で、配置などはわからないですが、相当大形の総柱建物の一角が何ヶ所かみつかっています。また流路を通じて、いくつかの活動集落があって、その中で武家的な色彩の強いもの、また宗教的な色彩の強いものなど、それぞれの集落に個性が認められ、全体として穴水の保の中心的な位置にあります。ただ16世紀になりますと、これらの集落全体が白山媛神社と別れて、河口の方に新しい村を作っていきます。これがこの地域の

近世の景観への転換であろうと考えています。よそではもっと早くはじめているところもあれば、近世でも中世的な景観を維持しているところもあります。東日本の相模国渋谷庄の例ですが、東日本らしい居館風の状況が見られます。それでも立地的には荘所が、地域の用水の起点を押さえるようなところにあって、その時期は13世紀中頃です。こういったものが中世前期荘園であろうという仮説です。平安期の山麓に位置する、密教系の山岳寺院のある山地･丘陵がある場合です。そうでない場合はどうなのか。鹿田荘はどうなんでしょうか。この鹿田キャンパスがその中心であるのか、ただ私が少し拝見した感じでは荘所とは呼べないような気がします。まったく証拠のない話で恐縮なのですが、備前国といいますと大変歴史的に重要な地域で、国府も国衙も中にありますし、この鹿田庄もあります。その中心はどこだろうということで､国府などは少し資料が見つかりつつあるようです。たとえば石山･天神山･岡山、この周辺あたりにないのかな、というのが私の素朴な印象です。逆にいいますと、石山に、南北朝のころに直氏の一族が城を築城していると思うのですが、そういうことが荘園景観の変化に大きく影響する可能性が、あるのかないのか。何かそこらあたりが、何の責任もとれないですけれど、興味深く、また全く違う、新しいモデルが考えられるのではないかと思います。

13世紀以降、西日本でも居館が増加していきます。それまで西日本では非常に少ないのですが、12世紀以降では、条里区画に対向するような、堀を持つ居館ができ、次第に充実する傾向にあります。私の知っている限りでは、荘所のほうが地形的にも高い所にあり、それよりも低いところに居館、これはなかなか難しいのですが、堀があって四角くても武家居館とは限りません。寺院である場合ですらあり、なかなか難しい。平安時代よりも力をつけた人々の開発拠点が平地にめだってくる、というのが中世前期の基本的な動きであろうと思います。

中世前期の集落が近世の環濠集落にそのまま発展する例は少ないのですが、中世前期の集落が再編されて出来上がった集落は、少なくとも近畿では近世にまで引き継がれていく傾向があります。この散居的な集落は平安時代からの伝統のあるもので、12世紀を契機として荘園の中で集村化していったり、町場ができていきます。荘園遺跡は８世紀から９世紀に水運を通じての交易活動の場であり、もちろんそれだけではなく政治的な場であり、宗教的な場でありますが、それと深くかかわる形で交易の場でもあったと考えています。またそれが中世前期には量的・質的に飛躍していくと考えています。

５．中世後期の山麓型居館・山城の増加

14世紀中ごろから山城が出現し、ちょうど荘所があったような山麓のところに居館が出てくる例が多いです。これは広瀬和夫さんがB型居館と呼ばれた平地居館ではなく、小高い所に立地している、西日本では中世後期に増えてくるものです。私は東日本の影響で13世紀以降に西日本で増えてくるものと評価しています。岐阜県神岡町（現在飛騨市）の江馬氏下館は、まさに荘所がある背後に丘陵があり、そこに密教系の寺院施設があるというものです。そこから神岡の盆地全体が睥睨できるようなところです。江馬氏は確実ではありませんが、13世紀中ごろに伊豆国江馬庄から入部しただろうと考えられていますが、その活躍の痕跡はほとんど見ることができません。この居館を構えるのが14世紀の終わりから15世紀初め、1400年を前後するころですが、江馬氏がこういう館を構えると同時に、中央でその活躍が記録されるようになります。特定の荘園の地頭というわけではないのですが、山科家領の江名子、松橋、岡本、石浦保・郷等いろいろな名前があり、いずれにしろ飛騨国荘園だろうと思います。そういうものを江馬氏が横領したり、支配を回復したりなど、どちらにしても影響力を発揮していたことが、中央の記録に残っています。このように、荘所があるようなところに立派な屋敷を構えて、本格的な庭園もあります。この庭園については私も今復元のための整備委員会で協力して16世紀の庭園の復元をしているところですが、15世紀の段階に石組はないけれど、おそらく庭園は出来上がっていると考えられます。山麓に、庭園を備えた居館を構えるということは､荘園の領有においてきわめて大きな意味があったのではないかと考えます。

6．中世の交易空間

少しGISの話をしましょう。古代と違って中世というのはローテクで、私がローテクで行った最後の仕事と位置づけていますが、中世のモデルは平面図ではつくれません。断面図なら実態に近いだろうと考えました。今ならGISを使って三次元モデルでつくります。このころはそれが出来なかったので恥ずかしいのですが、中世前期型の場合、海から山まで、全ての荘園がこれだけの領地を持っているわけではないですが、基本的なモデルとしては、遺跡を超えた範囲のものが考えられます。中世前期の荘園経営を支える、非常に大きなものには中世前期においては密教系の山岳宗教のネットワークがあるだろうと考えられます（図36）。中世のいろいろな商業活動にしても、景観を提供しているのは、密教系山岳宗教のネットワークを軸とする、権門体制のネットワークだろうと考えます。本格的な、市場のような商業空間で、活発な商業活動ができる、その背景にはこういったものが考えられます。

その下にはおそらく荘園領主方がいるような荘所があり、またその下には様々な商業や漁業などの、商業活動や農業を行っている様々な集落があって、その中に武家居館が次第に目立ってくるということです。そのネットワークは海を経て、ユーラシアにつながっていくというものです。

中世後期では、非常に大きく異なっていると考えられるのは、いまのところ中世前期の荘所のような形をしている遺跡は13世紀中頃から14世紀にかけて展開することが多く、こういうところに武家居館ができて、荘所などの荘園経営の実質的な役割が移るというところです。それから、港のほうへも居館が進出していきます。港は中世前期には基本的に宗教施設だろうと思いますが、14世紀ころから、交易の場に居館が出てくるといったことも増えてくるのだろうと考えます。

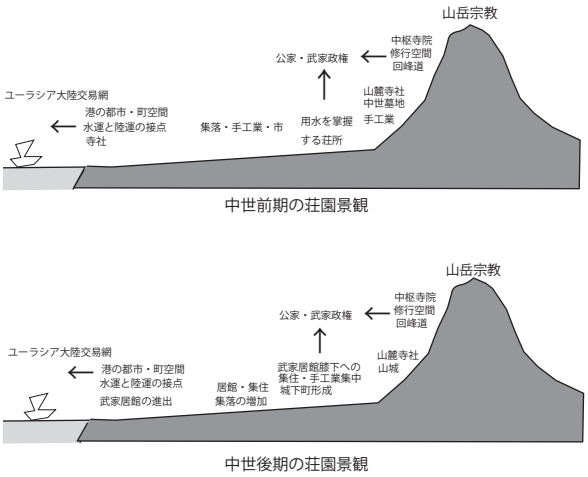


図36　中世荘園景観の復元モデル

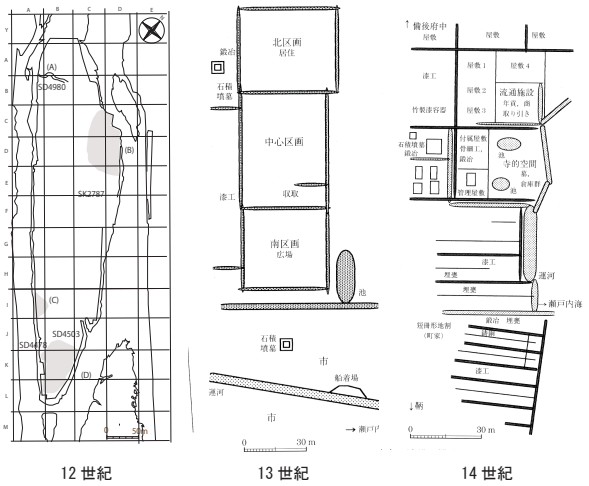


図37　中世の交易空間（広島県草戸千軒町遺跡）

図37は有名な草戸千軒町遺跡を、独断と偏見でモデル化したものです。12世紀というのは、遺構が少しありますが本格的なものはなく、遺物が結構あります。13世紀には寺院施設ができるのですが、このときには大量の骨が出土しているので、おそらくここは墓地と考えられます。墓地兼商業空間というと、網野善彦さんの世界のようになりますが、こうした空間に13世紀に墓地、船着き場、そして広場、小石積みの墳墓がランドマークとしてあって、こういうところが市になるのでしょう。これが中世前期の交易空間であろうと、もちろん京都や博多など伝統的なところはもっと様々なものがありますが、中世前期に新しい商業空間が成長してくる、または新興してくるときに、こういった場所ではこのようなモデルが考えられます。14世紀の草戸千軒町遺跡では、間口が狭くて奥行きが広い空間や、寺院空間があります。14世紀だと陣空間で、これが15世紀になると武家居館に移り変わっていくと考えられます。そういうように常設の町場的なものが入れ替わりのように発展してきます。

鹿田荘では、８世紀後半～９世紀、そして16世紀まで途切れることなく、その時々の形がありながら、その社会の基層をなす人々の開発活動の充実、それから交易活動の発展というものが、中世後期へ充実しながらつながっていき、それが近世社会の繁栄をもたらしていると考えられます。これからはぜひGISを活用して頂きたいと思います。

７．終わりに

中世の荘園遺跡と、古代も同様ですが、一遺跡にこだわっていくことが大事です。そこからボトムアップしていくということです。そういうボトムアップするべき対象の遺跡が一つの地域の中に無数にあります。なんでもないような遺跡でも、大遺跡よりも、もっと大きな歴史的な意味をもっている場合もいくらでもあるのだと考えています。そういうものを、頭の中だけやデータでなしに、GISの上でデータを蓄積していくと、タイムスライスで型式ごとの変遷もわかりやすいですし、たとえばGISを活用すると、紫雲出山の後方、妙見山の山頂から、岡山平野のほうはどのくらいまで見えるのか、そのようなことも簡単に可視化することができます。頭の中で分かっていることでも絵に描くことができる、そういうことです。いろんな試みが可能だろうと思います。そのようなさまざまなアプローチで、今後鹿田荘の研究がますます進んでいくことをお祈りして私の話を終わらせていただきます。

註

１）宇野隆夫1991『律令社会の考古学的研究－北陸を舞台として－』桂書房

２．文献からみた鹿田庄

岡山大学大学院社会文化科学研究科　久　野　修　義

１．はじめに

埋文センターとはいろいろとお付き合いがございまして、今日は「文献からみた鹿田庄」という話をするようにとの依頼をうけてやってまいりました。宇野先生は、非常に面白い幅広い視野からのお話をされまして、ずいぶん勉強になり、刺激をいただいた講演でございました。私の方は、宇野先生のような大局的なお話はできないのですが、鹿田庄について文献上からはどのようなことがわかるかということについて、基礎的なことを二、三お話したいと思っております。

まず基本的な鹿田庄の概略ということでは、ずいぶん以前に発表された研究ですが、岡大の日本史の最初の先生でいらっしゃいました藤井駿先生の「殿下渡領の備前国鹿田庄」（『吉備地方史の研究』）があります。基本的なことはこれを見ていただいたら、鹿田庄についての文献上からみた概略はわかるだろうと思います。細かい部分では、この後新しくいろいろな研究が出ましたが、鹿田庄がどういう荘園で、中世ではどんな経緯があったのか、などの基本的なことを知るには、今でもこの仕事を見るのが一番手っ取り早いだろうと、私は考えております。つぎに、関連する文献史料を集約したものとしては、岡山市教育委員会が出しました報告書『新道遺跡－備前国鹿田庄関連遺跡の発掘調査報告』に、主要なものが網羅されていて非常に便利です。この二つを基本的な素材として見ておけば、いろんなことがここから考えられるだろうと思います。ということで、今日の講演や埋文センター発掘成果展などで、鹿田庄に興味をもっていただいた方は、こういったものを参考になさるとご自分でもいろいろと調べることができるのではないかと思い、まずご紹介させていただきました。しかしながらこの二つの文献をマスターされますと、私などの出る幕はほとんどなくなってしまうかもしれませんので、そのあたりはぜひどうかよろしく。では、前置きはこれくらいと致します。

２．「鹿田庄」は「しかたのしょう」？

いささか奇妙で意味不明なタイトルかと思います。私自身もこれまでしばしば「しかたのしょう」と言ってまいりました。というのも、現在は「鹿田町」「鹿田キャンパス」とも「しかた」ですから、どうしてもそれにひかれて「しかたのしょう」と言ってしまうのです。ですがここでは、「鹿田庄」は「しかたのしょう」とはいわなかっただろうということをまず確認しておきたいということです。今日も口癖で「しかたのしょう」と言ったりすると思いますけれど、わたくしの胸の内としましては「鹿田庄」は「しかたのしょう」ではないと考えているのだということをご理解いただきたいということです。

といいますのも、なんといっても中世の史料で「かたの」と振りかなをふっている史料が確認できます。室町時代、15世紀中ごろの史料で、関白に鷹司房平が代替わりした時の史料です。

渡領所々<今度随聞及注之>
祝園（はうその）庄山城（略）
鹿田（かたの）庄備前（略）
（「宣胤卿記別記」渡方　二条関白宣下　享徳３年（1454）７月10日　　内閣文庫162-245）

摂関家の殿下「渡領所々」として記載されている「鹿田庄」には「カタノ」庄とかながふってあり、「シカタ」とはふっていないのです。また近世の史料で、江戸時代、18世紀の享保６年にできあがりました『備陽記』の中でも、こ

の字を指して「カツタノ」庄とかなをふっています。このような振りかながあることからすると、「しかたのしょう」ではなくて「かたのしょう」もしくは「かつたのしょう」とよぶのが正しいと思われます。しかしながらこの「かな」は一体誰がいつ付したかという問題もあり、疑問は残ります。ただ『東備郡村志』、これも近世の天保時代19世紀の地誌の史料ですが、その地名由来を記す一節につぎのようにあります。

> 今の三野鹿田の庄は、蚊島の遺名ならん。往古は今の簸の川、岡山城地の辺より藤戸の方へ西へ流れて、此鹿田庄は門田･網浜等の山につらなり西南へ出たる地なれば、蚊島の田と云ふ義にて、蚊を鹿に転じ鹿島田とせしを、後世略して鹿田と称せるなるべし

「三野鹿田庄」は「蚊島の遺名」であろうといっています。「今（天保年間）の簸の川（現代の旭川）」は、昔は岡山城のあたりから倉敷の藤戸のほうへずっと西へ流れていた。そして「この「鹿田庄」は門田・網浜等の山に連なり、西南へ出たる地なれば、蚊島の田と云う義にて、蚊を鹿に転じ、鹿島田とせしを、後世略して「鹿田」と称せるなるべし」というように書かれています。この地名由緒の説明は正確ではないと思うのですが、それはともかくとして「蚊島田」－これは日本書紀雄略紀に出てくる地名です－が「鹿島田」になり、略されて「鹿田」になったといっています。この説明からは、明らかに当時、「鹿田」は「かた」、あるいは「かつた」と呼んでいたと判断できます。ちなみに県北の真庭市鹿田は「かつた」で、こちらも平安時代の「和名抄」記載の真島郡鹿田（カツタ）郷以来の地名です。

さらに中世に「鹿田庄」に対して支配権を行使した国人領主の松田氏のことを「備前ノ勝田次郎佐衛門尉」とか「松田勝田」、というような言い方をしています（『応仁記』下、「親元日記」）。備前松田氏については、東京大学史料編纂所の榎原さんの非常に精緻なご研究がございまして[1]、その中で紹介されている系図史料でも、松田氏一族の中に、代々「鹿田庄」や「鹿田」「勝田」と注書されている系統があります。鹿田庄の代官、現地を支配管理する請負人である松田氏の系統でして、彼らは「かつた氏」とも呼ばれております。

以上のことから、明らかに中世・近世では「鹿田庄」は「かたのしょう」と呼ばれていたと考えられます。想像しますと、「かた」とはあるいは干潟の潟からきているのかもしれません。しかし、これは上記の真庭市の例からするとちょっと成り立ち難いので、もっと全国的視野で資料を集めてさらに考える必要があります。ともかく現在、岡大鹿田（しかた）キャンパスとか、鹿田（しかた）遺跡と呼ぶのが一般的ですので、どうしてもそれにひきづられて「しかたのしょう」と呼ぶことが多くなっているのですが、それは正確ではないでしょう。ただいちいち「いや、それは違う」というのはあまりにも面倒で野暮なので申していませんが、そこのところをぜひご理解いただきたいところであります。

３．鹿田庄の範囲

次に、鹿田庄の範囲がどの程度わかっているのかということについて、お話したいと思います。結論的にいえば、文献からは残念ながら明確なことがいえません。中世の文献史料は、基本的には中央の支配者に残された記録ばかりですから、文献からみるということは、言葉を変えていうと上から目線で下をみる、ということになります。よほど自覚的に意識していないと、支配する側、領主の側の目線でもって地域をみることになってしまいかねないのです。そういう意味でも、文献で研究するものにとりましては、現場から素材や情報をボトムアップしてくれる考古学調査、現地遺跡からの遺物や遺構というものは非常に貴重で大事なものです。これからお話しする「文献からみた鹿田庄」についてもなるべく上から目線にならないように、地域の目で見直しながら、何とか解釈をしてみたいと考えております。

範囲についてですが、先ほど申しましたように残念ながら中世史料で鹿田庄の範囲を示すような史料はござい

ません。荘園の東西南北の境界を記した史料や、荘園現地の様子がわかるような史料があればいいんですが、鹿田庄についてはありません。したがいまして荘域を考えるには、後世の『備陽記』などの近世史料を参考にせざるをえないのです。ところが、それらが示している記載が必ずしも一致しないのが悩みの種です。『備陽記』は享保年間、徳川八代将軍吉宗のころにできた地誌ですが、この中に、「鹿田庄」はどういう村々から構成されているかという記載が２ヶ所で出てきます。同書の「巻第十目録」というところでは、「一、御野郡村々之事／慶長十年備前国高物成帳　郷庄保」に「一、鹿田庄　浜田村　十日市村　新保村　青江村　円覚村」（浜田村というのは確認できず、浜野村かと思います）としています。

ところが、『備陽記』巻第十では、「一、鹿田庄（かつたの）　新保村　下中野村　東古松村　田住村　二日市村　円覚村　浜野村　西市村　今村　上中野村　奥内村　十日市村　七日市村　青江村　大供村　京殿村　岡村　内田村」となっています。こちらには「かつたのしょう」とかながふってありまして、前者の慶長10年（1605）高物成帳で５ヶ村しかなかったのが、18ヶ村もあってぐんと増えています。

江戸時代の地誌類はこれ以外にもいろいろありますが、この二種類の理解を踏襲しています。もっとも代表的なものとして『吉備温故秘録』（寛政年間　大沢惟貞）に示された二説をあげておきます。同書には⑴「当時民間に郷・庄・保の書付」⑵「慶長十年備前国高物成帳之内郷・庄・保」とあって、⑴は『備陽記』巻十、⑵は同書巻第十目録の記載村名と一致しています。江戸時代の村々名から、鹿田庄の範囲を考えようとしますと、その根拠となるのはこの二種類によることになります。ではこの二つの違いをどう考えたらいいのか。まず「慶長十年備前国高物成帳之内郷・庄・保」ですが、慶長10年は関ヶ原の合戦の５年後、西暦1605年です。慶長年間には全国的に国絵図の作成や村の調査を、出来上がったばかりの江戸幕府が命令しています。その時にそれぞれの国から調査をして出されたものが「国絵図」や「郷帳」です。それをもとにした記載が⑵であり、そこには鹿田庄の記載もあって、浜野村から円覚村という５ヶ村が範囲としてあったということでしょう。江戸時代の早い時期の理解ということで、『吉備温故秘録』がいう⑴の「当時」よりもずっと時代が遡った古いものだから、こちらの方が正しいのではないかと考えたくなります。

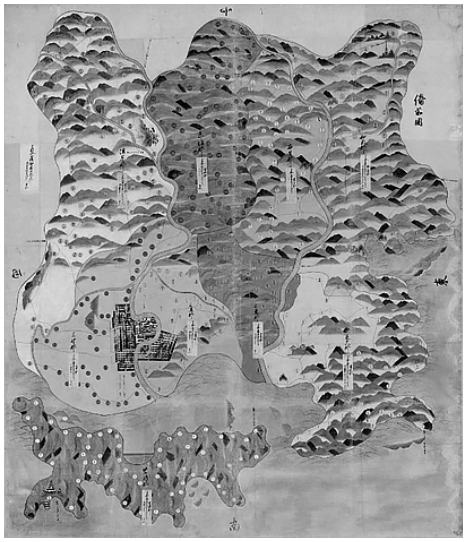


図38　「備前国図（慶長年間）」
（岡山大学附属図書館所蔵）

しかし、簡単に結論づける前に、岡山大学附属図書館の池田家文庫の中の国絵図をみながら、これらの村々の位置を確認してみたいと思います。まず池田家文庫の国絵図のなかでももっともよく知られているのは慶長年間につくられた「備前国図（慶長年間）」（図38）で、非常に見た目も楽しい、また備前国絵図の中

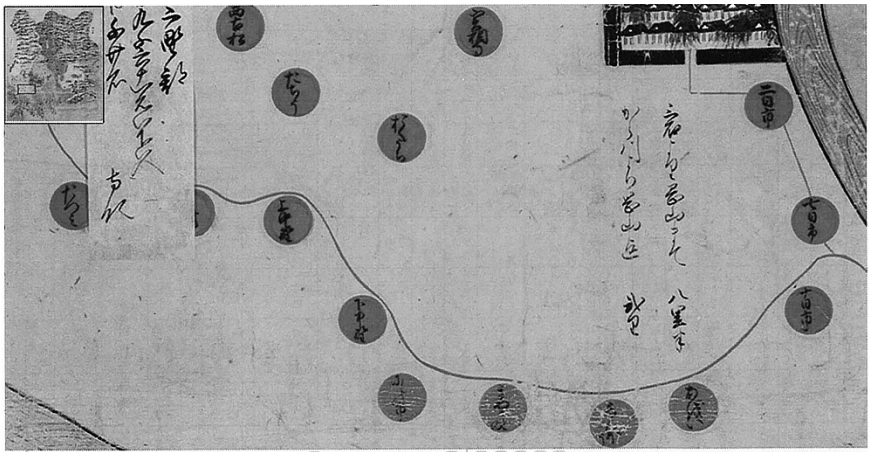


図39　「備前国図（慶長年間）」部分拡大

で一番古いものです。

中央やや左下あたりが岡山城、そこを蛇行するのが旭川です。郡ごとにきれいに色分けされています。左下が児島です。ここには下津井のお城がずいぶん立派に描かれていまして、岡山城近く旭川の東側にもきちんとした総構えの街並みが描かれています。こうしたことから、この図は実情をきちんと描いているとは考えがたいとされています。見た目にも絵画的には大変面白いものですが、附属図書館では複製を作成して自由に閲覧できるようにしています。秋の池田家文庫展の時には、広げてこの上を歩けるような工夫をしていました。来ていただいた方も多いのではないでしょうか。図39は同図のうち御野郡の岡山城南側、旭川の西岸あたりを拡大した図です。ここに「あをい」（今の青江）、それから「しんほう」（新保）があります。細い曲線は道筋のようでして、ぱっとみますと村の数もそう多くはありませんし、位置関係もちょっとずれているようです。正確さの点で、やはりいささか疑問を感じます。それに引き替え、もう少しはっきりと描いていますのが、池田家文庫にある「備前国九郡絵図」、通称「寛永古図」というものです（図40）。これは寛永年間、三代将軍家光のころです。慶長国絵図の次に古いのがこの「寛永古図」です。前者は絵画的で装飾的な感じが強いのですが、それに対してこちらの方はより正確だという印象をうけます。御野郡付近を拡大したのが図41です。岡山城があり、中央を横切る薄い線が庭瀬道、北の方に万成があり、こちらを通るのが山陽道です。この「寛永古図」で先ほどの鹿田庄に属する村々を確認してみますと、十日市、青江村、浜野村というように、大体このラインにあります。面白いことに、その下の方、同じような文字が見えるかとおもいますが、みな「新田」とかかれています。ですからこのラインが大体どの史料にも載っている鹿田庄の範囲で、その南側には新田が広がっていたということです。また西川の川筋が途中から切れて、なくなっていますが、おそらくここから先は新田の用水に使われていたんだろうと思います。

図40 「備前国九郡絵図（寛永古図）」
（岡山大学附属図書館所蔵）

図41 「備前国九郡絵図」部分拡大（一部加筆）

慶長の言い伝えではわずかな部分だけでしたが、もう一方の理解でいきますと、より広い範囲になっていることがご理解いただけるでしょう。二日市、七日市などは⑵慶長十年高物成帳には出てきません。どうも慶長国絵図や郷帳の記載というものはあまり精密ではないと考えた方がよいのではないでしょうか。ですから古いから良いというふうには言えないと、いまのところ考えています。鹿田庄の範囲は、この南のあたりに固まっているの

ではなくて、やはり北の大供の方まで含めた広いものと考えた方がよいのではということです。

もう少し考えるために、近世の史料で確認される御野郡域の村々がそれぞれ、どういう荘園、郷に所属していたかの記載を比較検討してまとめなおしてみました（表８）。慶長十年高物成帳では鹿田庄の範囲はこの５ヶ村だけです。それが『備陽記』巻十ではあちこちにでてくる。そういった違いが一覧でわかるようにしてみました。比較してみると、出石郷や弘西郷はあまり変化がない、それから宮野保が西野田荘になりますが、村はかわりがない。しかしものすごく変わっているのが三野関係です。三野々新庄が鹿田庄になったり、大供村･実相村が三野郷から鹿田庄になったりと、三野郷関連の記載が大きく変化していることがこの表から浮かび上がってきます。御野郡の中の三野郷の所在地理解が、慶長の頃とその後とで大きく変化しているのではないかということが見えてきます。やはり慶長期のものが時期的に古いからといって正しいわけではない、ということが当面いえそうです。表の右側では三野郷は、鮎帰、原、宿村など、現在の三野の浄水場あたりに限定されていますが、慶長期のほうでは、ずっと南の大供村も三野郷となっています。

詳細は省きますが、私は、これは三野郷、三野々新庄がある程度広い範囲に散らばっていたせいではないかと考えています。それが鹿田庄にまとめられていったのではないかと。このように考えてみますと、鹿田庄は慶長10年の５つの村だけではなくて、広い範囲を考えていいのではないかとなります。この考えを補強するような史料として『和気絹』という、江戸時代18世紀の地誌があります。この中に鹿田の説明がでてきます。「当府（岡山城下）往還の西の町外れより、萬成山までの道の南の方を、凡て鹿田の郷という」。岡山城下からでて万成に至る道の南をすべて鹿田郷というのはいささか言い過ぎかもしれません。山陽道から南が全部鹿田郷というわけですから。鹿田キャンパスを持っている岡山大学としては嬉しいのですが、ちょっと広すぎます。これは万成にいたる道ではなくて、より南側の庭瀬街道のことだと考えて、そこから南のかなりの範囲が鹿田であるとの理解だと解釈してみてはどうかと考えます。現在の鹿田遺跡の少し北に大供があります。大供遺跡もむろん鹿田関連遺跡だと考えてもいいと思います。

とりあえずの結論としては、近世文献の地名やその位置からみて鹿田庄の範囲は広めにとっておいた方がよく、また絵図から確認できた荘域は江戸時代以降の開発新田の北側、つまり海沿いの土地であったこと、これらのこ

表８　『備陽記』巻十にみえる御野郡の村々名

	慶長十年高物成帳（巻十目録）	備陽記巻十御野郡
市久村	三野々新庄	（見えず）
長瀬村（→北長瀬）		市久保
辻村		
上中野村	三野々新庄	鹿田庄
下中野村		
今村		
西市村		
京殿村		
大庵寺村	大安寺庄	大安寺庄
萬成村		津島郷
島田村	西野田庄	野田保
高柳村		
問田村		
内田村	見えず	鹿田庄
二日市村		
七日市村		
浜田村（浜野村）	鹿田庄	
十日市村		
新保村		
青江村		
円覚村		
出石本村（上一）	出石郷	出石郷
下村（下出石）		
川原村（西一）		
東川原村		
濱村		
南方村	弘西郷	弘西郷
竹田村		
北方村		
三野村	牧石郷	三野郷
宮本村（川本）		牧石郷
金山寺村	（見えず）	
畑村	牧石郷	
鮎帰村		
原村		三野郷
宿村		
城村（上伊福）	伊福郷	伊福郷
立川村（下伊福）		
大供村	三野郷	鹿田庄
実相村		（見えず）
岡村	見えず	鹿田庄
木村	東野田保	新堤保
西古松村		元興寺保
実内村		鹿田庄
田住村		
東古松村		
田中村	宮野保	正（西）野田庄
中山道村		
西長瀬村		
多ツミ村		
津島村	津島郷	津島郷
福永村		新堤保

とをあらためて注意しておきたいと思います。くわえて御野郡中の三野郷は地名の改変がかなり激しいといったこと、こうしたこともひとまずは確認しておきたいと思います。

４．殿下渡領の鹿田庄とそのにぎわい

続きまして鹿田庄の文献史料について、よく知られたことばかりですが、ご紹介したいと思います。「殿下渡領」鹿田庄については、平信範の日記『兵範記』の保元三年（1158年）８月11日条に登場する、氏長者が忠通から基実に移った際の記事が有名です。

摂関家の氏長者は交代時に、前任の氏長者から後任の氏長者に対して引き継ぎが行われます。引継ぎで渡されるのは、一つは藤原氏の長者印です。それから朱器大盤といって、朱塗りの大きな器や盤、そして殿下渡領４ヶ所です。この殿下渡領として、大和国にある佐保殿、越前国方上荘、河内国楠葉牧とともに、備前国の鹿田庄が出てきます。この引き渡し文書の実例が『兵範記』に引用されています。これらは、摂関家の氏長者が、藤原氏を代表してとりおこなう儀式や儀礼に必要な道具や設備、それらを用意するためのもので、代々氏長者だけが管理できるものです。この時の新長者藤原基実の奥さんは、平清盛の娘です。この婚姻によって、平家と藤原氏は連携するわけです。後に基実が亡くなり、基実の管理する膨大な摂関家領の扱いが問題となったときには、後家である奥さんを介して、平清盛は摂関家領に対する支配権を及ぼそうとの動きを示します。しかし、その時でもこの４ヶ所については、氏長者領ということで別枠にされ、平家の力は排除されました。このように「殿下渡領」は普通の藤原氏の荘園とは別のものだと強く認識されており、そしてその中の一つが鹿田庄だったのです。佐保殿には藤原北家始祖とされる房前の肖像が置かれた、北家にとって大事な施設です。平安京から南都へ行くときはたいていここに立ちよっており、南都へ行くときの拠点となっていたのが佐保殿です。今の奈良市街地西の郊外にあたります。楠葉牧は、摂関家のための牧場、馬を飼っているところです。ここの管理をするのが摂関家のもとで家司として仕える中・下級の貴族たちで、彼らは執事や年預として、実際上の管理を行っています。摂関家の偉いさんは実務仕事なんかしません、今も昔もそうですが金持ちは仕事をしないんです。だから文書も残らない。余談になりますが、備中国新見荘関係文書はたくさん残っています。新見荘にあるのではなく、全部京都の東寺に残っています。これは荘園領主としての東寺は摂関家に比べると二流で、セレブではないんです。だから一生懸命荘園を経営していまして、その結果、史料がたくさん残ったわけです。それに引き換え、摂関家や天皇家・王家は、セレブ中のセレブですから実務仕事はしません。だから文書なんて残らないんです。殿下渡領というのは特別な権威があって、というと聞こえは良いのですが、歴史を研究する側からいうと、非常に残念なのです。経営を一生懸命やらないで、人にまかせているばかりですから、史料が残らない。その結果、現地がどうなっているのかわからないという、文献屋の嘆きがでてくるわけです。そんなわけで鹿田庄研究には、考古学の発掘調査に大きく期待せざるをえないというのが偽らざるところです。

鹿田庄の文献上の初見は、昌泰３年（900年）、９世紀の最後の年の年紀をもつ「興福寺縁起」です。その内容を見ますと、藤原冬嗣が父内麻呂の忌日法要として冬嗣が建てた興福寺南円堂で「法華会」をはじめ、冬嗣の子良房が、父冬嗣と母光子の忌日法要のために行ったのが「長講会」だということです。長講会は父親が亡くなった７月27日から始まり、母親が亡くなった９月４日を結願日とする、非常に長期間にわたる法要でして、それで長講会と言うわけです。そしてこれら「法華会」「長講会」を行うための費用として鹿田庄の地子米が充てられたとあります。その鹿田庄は、冬嗣の父内麻呂の遺領だといわれています。藤原氏北家の内麻呂が持っていた所領、それが子冬嗣、孫良房の代には鹿田庄という荘園となって、藤原北家の人たちの法要を支えたわけです。その用途とされた地子米は法華会料72石余り、長講会料150石、でした。『江談抄』という院政時代の史料では「藤原氏の人々の始められたる事」として、藤原鎌足は興福寺や法華寺や施薬院を建て、その子の不比等＝淡海公は佐保殿を建つ、とここにさきほど言及しました佐保殿が出てきます。その次に冬嗣＝閑院大臣は勧学院を建てて、南

円堂を始め、その子の忠仁公良房は長講会を始める、とあります。そのあと基実は木幡の墓、忠平は法性寺、師輔は楞厳院、兼家は法興院、云々、というふうになります。だんだんスケールは小さくなっていく感じです。鎌足・不比等・冬嗣といった藤原氏北家全体を支える重要な法会や儀式を担うものとしてこの鹿田庄が整備されたというわけです。「興福寺縁起」では法華会と長講会だけなのですが、少しあとの史料では興福寺関係だけではなく、大原野神社のお祭りの費用もここから使う、というようなこともでてまいります。12世紀にできた摂関家の家政に関する史料『執政所抄』には、鹿田御庄のところに、山階寺（興福寺）に、長講料200石、大原野社の春と秋の二季のお祭り料に100石と、藤原氏の氏寺氏社に用途を出したことが記されています。この史料には、淀あたりの梶取がこれを受領する、ともあります。おそらくは京都の淀のあたりに摂関家の倉庫群があり、そこまで備前から地子米を運び管理していた。そして必要なときに梶取（船舶運航の責任者）に、その費用、地子を下行したと考えられるわけです。用立てられたのは、長講会、法華会、そして大原社の祭りに限りません。鎌倉時代終わりの『興福寺年中行事』をみると、「鹿田米」があちらこちらでたくさん出てきます。「４月８日伎楽会の時に会料米のうち６石を鹿田米とする」など、夏講や供講、五月会、光明皇后の忌日会、もちろん長講会も出てきます。長講会･法華会はもとよりそれ以外にもいろいろな興福寺での年中行事に、鹿田米が運用されています。鹿田庄からの地子米が興福寺にとっても大きな位置を占めていたということがわかります。ですから次第に興福寺領鹿田庄という史料も出てくるようになります。もう少し史料が残っていたらいいのですが、どれだけ収入があるかということを興福寺は問題にしておりますので、鹿田庄の現地の方がどうなっていたかについては、残念ながらよくわかりません。殿下渡領として摂関家に関わるだけではなく、興福寺の年中行事の中にも組み込まれていたことも知っていただきたいと思います。

さて、次に、これもよく知られた有名な事件ですが、寛和２年（986年）、10世紀の終わりごろの「鹿田庄焼き討ち事件」があります。これは具体的に説明するには事態が錯綜していて面倒ですので、とりあえずここで注意したいのは、鹿田庄が焼き払われたとき、「庄の倉を打ち開いて」つまり鹿田庄現地にある倉を打ち破って、地子米320石を奪い去ったという事実です。また荘園の管理人や荘園関係者である庄司寄人の居宅300余を損亡させた、ともあります。これらのことから、鹿田庄の現地には倉があって、そこには320石もの米が保管されていたということ、そして300余りもの住居があったということがわかります（『朝野群載』所収、摂政藤原兼家仰書）。これは被害届に記されている内容ですからいささかオーバーに言っている可能性もありますが、10世紀終わりの鹿田庄には、物資や人が多数集まっていたらしい様子を伝えるものです。

それからもう一つ、焼き討ち事件のすぐ後に作成された別の文書があります。鹿田庄居住の梶取が出した長徳４（998）年の「解」（上申文書）です（図42）。現在、京都国立博物館に「稿本北山抄巻十」の紙背文書として伝わっています。この文書は用済みになった後、「北山抄」という有職故実の書物を書くために作者藤原公任が、その文書の裏側を転用したものです。その結果、書物の裏側として残ったわけです。意図的に残そうとしたものではないので、普通だったら残らないような現地の事情が伝わることになったわけです。簡単に内容を紹介しますと、これは備前国梶取の佐伯吉永という人物が提出したものです。冒頭に「備前国鹿田の御庄に居住する梶取の佐伯吉永」とありまして、彼は自分で鹿田庄の居住者だといっているわけです。古代

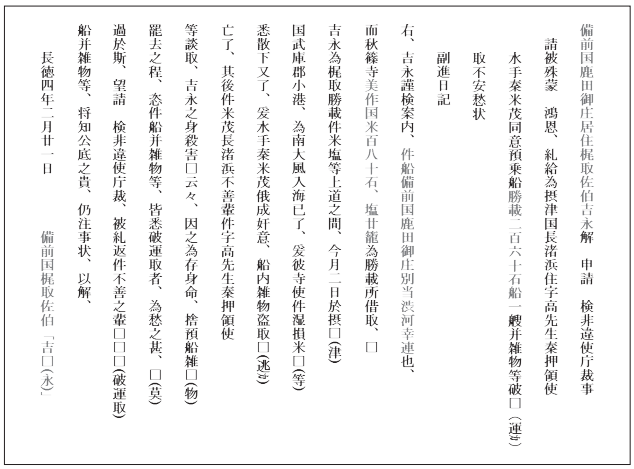

備前国鹿田御庄居住梶取佐伯吉永解　申請　検非違使庁裁事
請被殊蒙　鴻恩、糺給為摂津国長渚浜住宇高先生泰押領使
水手秦米茂同意預乗船勝載二百六十石船一艘并雑物等破口（逃ヵ）
取不安愁状
副進日記
右、吉永謹検案内、件船備前国鹿田御庄別当渋河幸連也、
而秋篠寺美作国米百八十石、塩廿籠為勝載所借取、口
吉永為梶取勝載件米塩等上道之間、今月二日於摂口（津）
国武庫郡小港、為南大風入海已了、爰彼寺使件湿損米口（等）
悉散下又了、爰水手秦米茂俄成奸意、船内雑物盗取口（逃ヵ）
亡了、其後件米茂長渚浜不善輩件宇高先生泰押領使
等談取、吉永之身殺害口云々、因之為存身命、捨預船雑口（物）
罷去之程、悉件船并雑物等、皆悉破運取者、為愁之甚、口（苦ヵ）
過於斯、望請　検非違使庁裁、被糺返件不善之輩口口口（破運取）
船并雑物等、将知公庭之責、仍注事状、以解、
長徳四年二月廿一日　　備前国梶取佐伯「吉口（永）」

図42　備前国鹿田庄梶取解（長徳４（998）年2月21日）
京都国立博物館「稿本北山抄巻十　紙背文書」

の戸籍ですと、○○国○○郡○○里戸主誰々の戸口誰々というのが普通です。荘園の「住人」だという言い方をしている早い例です。10世紀末には鹿田庄という荘園があって、そこに「荘園の住人」だと自称する輩が存在し、その職掌は梶取、船頭さんであったと自己認識しているわけです。彼は260石積の船に美作国からの米180石と塩20石を積み込んで、鹿田庄から船で都へ運搬したのですが、途中で海難事故がおこり、さらにその近在の者に乱暴されて積荷が取られたと訴えています。260石積の船というのは、この時代では最大級の船でして、おそらく川船ではなく、海船であろうと考えられます。積荷は美作国米といいますから、美作国から旭川をくだった川船は、鹿田庄で海舟に積み替えて、さらに都へと送ろうとしていたわけです。その途中で事件が起こったことからこの史料が作られました。しかも、この船は、鹿田庄の別当（荘園を管理している人）の渋川幸運の船であるとあります。鹿田庄別当の持ち舟を使って、鹿田庄の住人である梶取が、美作国の米や、塩などを集荷して都へと運送する、こうした動きがこの文書から確認できるわけです。今から1000年以上前の鹿田地区でこういうことがあったということです。先ほどの鹿田の焼き討ち事件と合わせて考えますと、鹿田庄あたりにおける10世紀頃の賑わいが想像できようというものです。

それから、鹿田庄の賑わいを示す貴重なものとして、時期は下りますが、「備前国上道郡荒野絵図」があります。これは鹿田庄が主題ではありませんが、絵図の端っこに「鹿田河」と書いてあります。これはもちろん旭川でしょう。川のなかに「上」「下」という文字があって上流･下流が示され、児島も描かれています。なんといっても川沿いにある「鹿田庄」、「市」という文字が注目されます。鹿田庄に市があって、川沿いにはたくさんの小屋が立ち並んだようすが描かれています。鎌倉時代の末、14世紀の初め頃に作られた絵図ですが、鹿田のにぎわいというものを伝えてくれています。

５．鹿田庄に生きた人びと（武人たち）

何度も申しましたように今に伝えられている文献史料はほとんどが中央のものでして、現地の人々の名前がわかる史料は例外的なものしかありませんでした。それでも鎌倉･室町期以降になると少し状況が変わってきます。

例えば寛喜２年(1230)「熊野参詣願文」がその一例です。この史料は残念なことに所在不明となっておりまして、冒頭で紹介しました藤井駿先生の論文によっております。寛喜２年という鎌倉時代の中頃のこの文書に「鹿田庄下司村主幸氏」という人物が檀那として登場します。鎌倉時代の鹿田庄に下司村主幸氏なる人物がいて、熊野参詣したことがわかります。そしてこの村主氏の一族は、さきほどの「備前国上道郡荒野絵図」にも深い関係を有しているのです。ここは春日社領となっていますが、村主幸重が春日社に寄進したのです。「大宮家文書」にはこの寄進状写が残っておりまして、春日社領として「荒野一所を寄進」している。その所在範囲を図示したのが、先ほど紹介した絵図なのです。寄進状によると、その範囲は、南側は海で、西を限るのが大河＝旭川です。すなわち旭川から東側の上道郡荒野を、村主幸重が寄進したのです。そしてこの幸重は先の鹿田庄下司村主幸氏の息子でありました。ですから村主氏は、鹿田庄の下司でありつつ、旭川対岸の上道郡にも勢力を伸ばし、そこを春日社に寄進してその権威付けをおこなって、現地をおさえようとしていた様子がうかがえます。

この上道郡をめぐって、村主氏に対抗して登場するのが平井氏です。平井という地名が旭川の東、操山山塊の南に今も残っていますが、そのあたりを拠点にしていたのでしょう。平井氏の横暴について、春日社や興福寺が非難している史料が残っています。鹿田庄の下司であった村主氏が旭川の東、上道郡の方にまで勢力を伸ばそうとして、こうした対立が引き起こされたような気配が感じらます。13世紀から14世紀にかけてのことです。

14世紀になりますと、村主氏に代わって鹿田の現地で明瞭に姿を見せて活躍するのが、松田氏です。14世紀の半ばころに「松田左近将監ら悪党」とあります。これは興福寺領備前国鹿田庄納所賢重の言い分でありまして、鹿田庄はものすごく大事な所領なのに最近は悪党が横行している、そのために「興福寺年中行事」に記載されていた法会の夏講や供講等も断絶していると文句を言っています。「彼庄押妨之輩松田左近将監、田所彦七以下悪

党人等」とあり、この者たちを処罰してほしいと訴えています。この松田左近将監は、松田一族ですが、松田氏略系図に出てくる人たちとはまた別系統だということが榎原雅治さんによって明らかにされています。こちらの松田氏というのは、同じころに備中吉備津神社の社務職を握る松田重明ではないかとされていまして、おそらく御野郡の北部から津高郡南部にかけて拠点を持つ松田氏が鹿田庄を押妨していると考えられています。この系統の松田氏が、後の金川松田につながっていくのだろうということです。

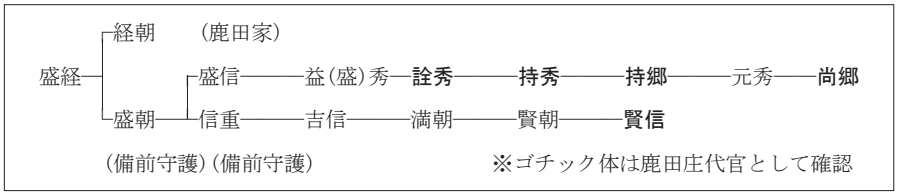


図43　松田氏略系図

そういう状況のもとで、鹿田庄関係の史料をみていますと、荘園領主である摂関家や興福寺では現地管理ができなくなってきたので、それを請負代官にまかせるようになります。その請負代官として登場する人たちを松田氏略系図（図43）に示しました。彼らが松田勝田氏と言われている流れです。請負額に注目してみますと、応永26（1419）年には毎年75貫文で領家方の年貢を請け負っている。それが、文明11（1479）年には3,000疋になっている。3,000疋を貫文に直しますと、30貫文です。75貫文から30貫文にまで大きく値切られています。さらに文明13（1481）年の史料を見ますと鹿田庄の請口、つまり請負料は20貫文と、また下落しています。着実に荘園領主の取り分は減っていく、そういうことがうかがえます。この鹿田庄代官松田氏は備前国の国人ですが、系図中に示した松田尚郷の場合、彼は公方（室町将軍）の近習者であり、かつ管領家細川の被官人でありました。こういう中央でも強力なコネをもつ連中が荘園現地の支配管理を請け負って、都と鹿田の現地をつなぐ役割を果たしていたのです。一方この頃には、村主氏の姿は確認できません。村主氏は、平井氏と上道郡で覇権を争ってうまくいかず、津高のほうでは松田氏に圧倒されたのではないでしょうか。

以上、ざっと駆け足で鹿田庄に関する文献史料からみえてくるものを断片的ながらご紹介しました。残念ながら、まだ発掘調査の成果と文献史料とがうまく合致するようなものはないというのが現状です。けれども、繰り返しになりますが、当時の文献史料というのは領主側の、上から目線のものです。それだけに、現地の史料である考古学的な遺構や遺物の発掘調査が非常に大事になってきます。その両方をみることによって、中央と地方とをつなぐ理解が可能になってくるわけです。しかもこの鹿田キャンパスの発掘調査というのは、もう25回以上にも及んでおりまして、同じ地域でジグソーパズルのピースを埋めていくような形で、面的な広がりをもった調査が進行しています。ですから発見当時、大きな注目を集めました出土遺物の絵馬や木製猿などもむろん貴重なのですが、面的な広がりの中で遺跡を押さえられる可能性が高まっているということ、歴史時代の考古遺構を面的広がりでおさえることが次第に可能になってきているという事も、それに劣らず注目すべき事柄です。たとえば、大変興味深いのが溝の方位です。鹿田地区特有の条里の方向が確認されていまして、北側にひろがる岡山平野の条里の方向とは違う、こういう問題をどう考えたらいいか。また鹿田庄域にたくさん検出される溝、その溝によってなされた区画の変化。一見したところ地味でありますが、すごく大事な話です。鹿田遺跡は、継続調査によって面的広がりをもって明らかにされつつある学術的にも非常に貴重な遺跡、遺構だと考えています。周辺では、岡山市調査の新道遺跡からは木簡が出土しているほか、岡山県が調査した鹿田遺跡など、各地点の情報を突き合わせることによって、この鹿田周辺の景観がかなり復元できるのではないか。今後はGISなどの新技術も活用できそうですから、ますます面白い発見があるのではないかと、私も非常に期待しております。

註

1）榎原雅治2000『日本中世地域社会の構造』校倉書房

３．平安・鎌倉時代の鹿田遺跡

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　山　本　悦　世

１．鹿田遺跡の地形環境

今回の展示テーマは「鹿田荘の人と時代」です。私たちは、岡山大学鹿田キャンパスにある鹿田遺跡を発掘調査していますが、鹿田遺跡と鹿田荘の関係については、かなりオーバーラップした意識をもってきています。でも、まだ確実とは言い切れません。直接的証拠となる「鹿田庄」という文字でも出てくれば「ここは荘園だ」といえるのですが、残念ながら出土していません。ただし、様々な状況証拠からは、この遺跡は鹿田荘の中に入っている可能性は高く、そういう視点でいろいろな問題点を考えています。

今日の発表では、「鹿田荘の時代」を考える上で、まず地形環境からご紹介していこうと思います。当時、鹿田遺跡が立地している平野がどのような状況にあったのか。次に、展示テーマにある「鹿田荘」の頃について、鹿田遺跡に残る集落の様子を、これまでの調査成果を踏まえて報告させていただきます。具体的には、奈良時代後半～平安時代前期と、平安時代後期～鎌倉時代ということになります。中でも、後者の12世紀から14世紀初めへの移り変わりが、話の中心になろうかと思います。そして、最後に、そこから描かれる集落変化とその背景に触れることができればと考えています。

⑴　遺跡の立地

鹿田遺跡は住所からすると、岡山市北区鹿田町周辺にあたります。遺跡地図上では、岡山大学・県立病院・NTTドコモの３箇所の地点に広がっています（図44：１～３）。発掘調査も、岡山大学以外に、岡山県古代吉備文化財センターと岡山市教育委員会が実施しています。近世以降の干拓や市街地の拡大によって、現在は海が南に遠のいていますが、「鹿田荘」当時を振り返ると、旭川河口付近に立地していたと考えられます。

岡大鹿田キャンパスは、本日の会場となっている岡山大学津島キャンパスのこの場所から南へまっすぐ約4.5kmに位置しています（図44）。鹿田キャンパス内の発掘調査は、当センターが実施していることに加えて、平面的なまとまりや遺構の継続性・密度の高さなど様々な点で、他の２地点とは分けてお話できる十分な内容をもっていますので、ここでは同キャンパスでの調査成果を紹介することとします。

改めて、鹿田遺跡が立地する旭川下流西岸部の遺跡分布を見てみましょう（図44）。岡山駅の南側あたりは、遺跡の分布が極めて希薄なことがわかりますね。遺跡分布は、その北側と南側にまとまります。北側の集中域は半田山丘陵の南裾から岡山駅北側、南側の集中域は岡山駅から約２km程度南側にそれぞれ広がっており、鹿田遺跡は南側の中心にあたります。

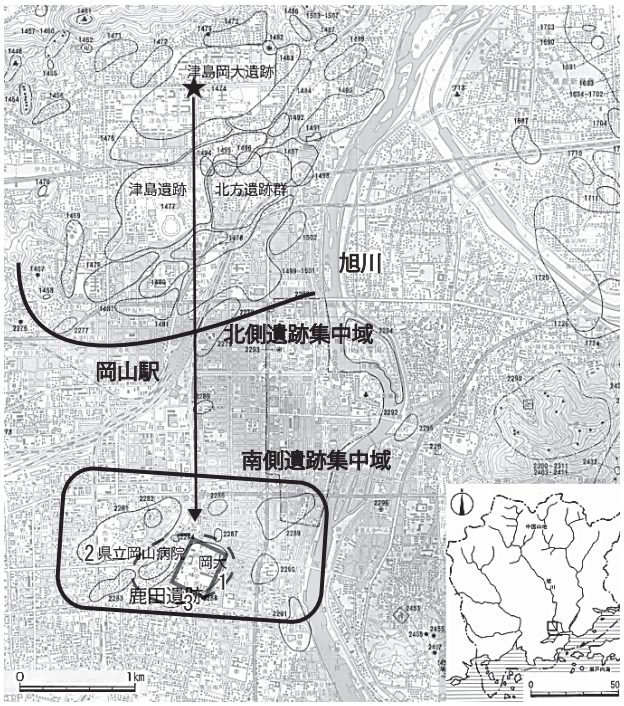


図44　旭川西岸平野部の遺跡分布と鹿田遺跡の位置

⑵　古地形復元

こうした遺跡分布から、現在は一見平坦にみえる地形も、かつてはかなり異なっていたことが予

想されます。弥生時代後期頃まで遡ってみましょう。図45は、昨年度開催した「弥生時代を語る」展示会で作成したものです。この図を手がかりにすると、岡山駅のあたりまで海の影響があることになります。海岸線をどこにとるかは難しい問題ですが、少なくとも遺跡分布が希薄な場所は利用に適さない土地であったことは確かでしょう。となると、弥生時代の鹿田遺跡は、北側に広がる生活域から、切り離されて海に突き出たような場所、そして旭川の河口近辺という場所になります。こうした場所は、水上・海上交通の要衝として良好な環境といえそうです。

南側の集中域で弥生時代の遺跡が確認できない地点にも、奈良時代後半～戦国時代の遺跡は確認されています。例えば、鹿田遺跡県立病院地点･大供本町遺跡･新道遺跡等です。こうした遺跡分布の状況から、古代には集落を営むことができる土地が一回り広がっていたことが予想されます。その中でも鹿田遺跡は、相変わらず海に突き出たような位置にあり、荘園の時代にも交通の要衝であり得た、そんな立地環境が注目されます。

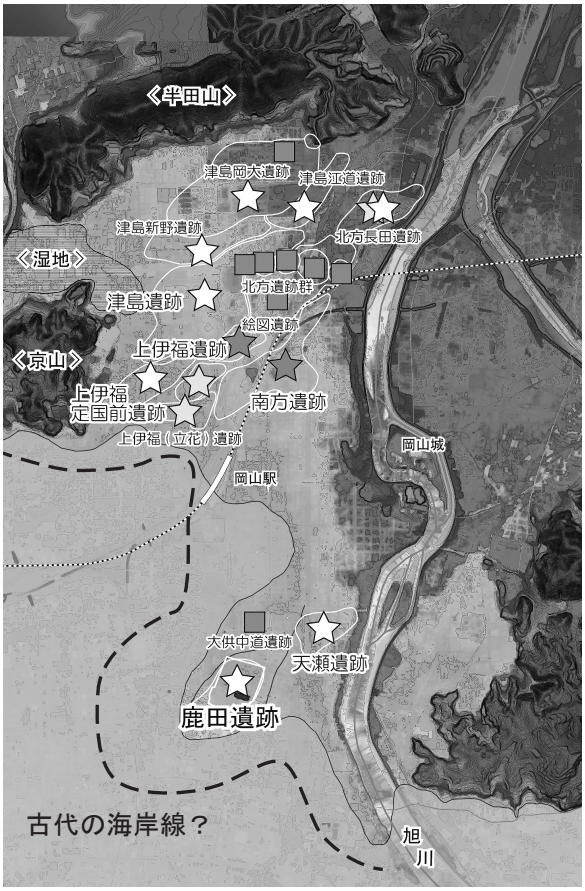


図45　旭川流域の古地形復元と遺跡分布
（国土地理院発行の基盤地図情報標高モデル（５ｍ）を使用）

２．旭川西岸平野の条里地割り

⑴　異なる地割りとその境界

旭川西岸平野では、正方位地割が比較的良好に残っているのですが、鹿田遺跡周辺では、北を東に15度前後傾斜した地割りが確認されます。北側とは異なるこの地割りを「鹿田条里」とも呼んでいますが、これまでも藤原摂関家の殿下渡り領である「鹿田荘」の故地研究の中で注目されてきました。その北端は、岡大鹿田キャンパス北側の道路付近であり、その南側に広がっています。この地割りの初現はいつかということが問題です。ここで発掘調査が力を発揮します。

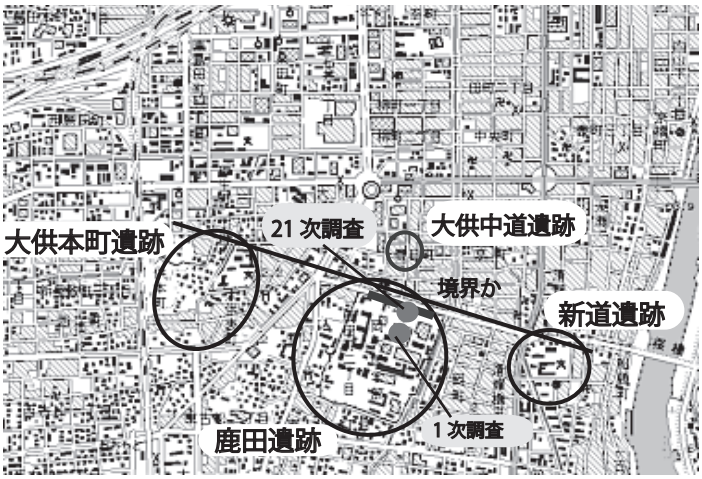


図46　鹿田遺跡周辺の発掘調査

図46で確認してみましょう。図中の直線より南側で地割り軸が傾いているのがわかります。この線より南側にある大供本町遺跡・鹿田遺跡・新道遺跡の発掘調査では、奈良時代後半の集落が見つかり、一方、北側の大供中道遺跡では鎌倉時代の水田が報告されています。つまり、古代～中世段階まで遡ると、現在の地割りが変化する境界ラインをはさんで、その地形は概ね南側が高く、北側が低いという違いがあったわけです。また、鹿田キャンパス北端の調査（第21次調査）では、こ

のライン付近において北からの正方位軸と、南の「鹿田条里」軸が接することを示す鎌倉時代の痕跡が報告されています。北側と南側の土地がつながり利用されていること、同地点が地割り軸の境になっていた可能性が考えられます。さらに時期を遡る資料として、陽物形木製品や丹塗り土師器といった祭祀遺物が出土する８世紀後半～９世紀初頭の川（あるいは湿地）の存在も注目されています。これは、現在の「鹿田条里」方向を示す道路（図46の直線）に沿っており、この時期に、少なくとも「鹿田条里」方向を示す地形が広がっていたことが予想できます。

図47　鹿田遺跡１次調査地点
－奈良時代後半～平安時代前期遺構配置－

⑵ 「鹿田条里」の出現

鹿田遺跡第１次調査地点の発掘調査成果からも、その手がかりを得ることができます。この調査地点は、現在の岡大病院外来診療棟の位置にあたります。微高地上に奈良時代後半～平安時代前半の掘立柱建物・大形の井戸・溝などが検出されていますが、注目されるのは、異なる主軸方向をもつ建物の存在です。両者は新旧の関係にあり、東に大きく傾く建物（平均N50°Ｅ）から図に対してまっすぐな方向の建物（平均N12°Ｅ）へと移行しています（図47）。南側の溝も同様です。まっすぐな方向が「鹿田条里」方向ですから、新段階のこうした変化は、その出現の初現を考える上で重要でしょう。新段階の建物時期は、８世紀末～９世紀初めと考えられています。

３．奈良時代後半～平安時代前期の鹿田遺跡

８世紀後半～９世紀の遺構は、鹿田キャンパスの北側に集中して居住域を形成しています。同キャンパスの南端には川の存在とそれに向かって橋の遺構が報告されています。橋は人だけでなく物資の流通を支えるものであり、河川を利用した物資の流通ルートの存在を示しています。居住域と橋との間は空白域となっており、どのように使われたのかはわかっていません。

居住域にある建物規模は４×６ｍの24㎡ほどですから、あまり大きくはありませんが、１棟の建物には片側に庇がついています。先ほどの宇野先生のお話にもあった庇付建物です。井戸は３×3.6mを測る大形のものであり、非常に立派な丸太を刳り抜いた井戸枠が据えられています。通常の集落にはないものです。遺物では、近年、絵馬の出土が注目されましたが、それ以外にも、井戸の祭祀に使われる斎串や曲げ物のほか、墨書土器、木簡、あるいは緑釉唾壷、蹄脚硯等が出土しており、文字関連資料の多さが特徴的です。唾壷、蹄脚硯は伊勢斎宮跡等、格の高い遺跡から出土したものと同様の資料です。物資の盛んな流通を示す橋の存在など合わせて考えると、この時期、この場所が、何らかの管理地として都との強い関わりをもつ集落であったことが窺われます。

４．平安時代後期～鎌倉時代における鹿田遺跡の変貌

その後、集落は鹿田キャンパスの西側にある県立病院の地点へ移動しているようです。11世紀に入るとまた返ってきますが、溝で区切られた複数の屋敷地が集住する集落へと変わっています。そして、集落の継続は11～16世紀におよぶのですが、平安時代後期～鎌倉時代において、屋敷地の区画溝が集中的に埋められて再編される時期が２回あることがわかってきました。１回目は平安時代後期から鎌倉時代前期へ、そして２回目は鎌倉時代の中で、概ねその前期（13世紀）から後期（13世紀末～14世紀初め）へ、となります。２回目の変化は、１回目ほど

の大きな断絶ではなく、変化の流れの到達点ともいえそうです。１回目の前後、つまり平安時代後期と鎌倉時代前半期とで、集落はいくつかの点で大きな変化を見せます。それは、屋敷地の配置や土地の地割り単位、そして区画溝の形状に現れています。

⑴　整然とした区画と敷地全体に配される屋敷地－平安時代後期－

鹿田遺跡では11世紀頃から集村形態が見て取れます。岡山平野の中でも、かなり早い段階での成立といえるでしょう。そして、遅くても12世紀中頃には、当時、鹿田キャンパスに広がっていた集落の敷地全体が計画性をもって区切られ、屋敷地が四方全体に配される状況ができあがっていたことが、図48の溝や井戸の位置からわかります。井戸は屋敷地の配置を示すものですが、鹿田キャンパスの敷地全体に広く分布しています。そして、地割りを示す溝の間隔からは、特に東西方向の地割りに１町が強く意識されていたことがわかります。例えば、集落の北限ラインにあたる21次調査地点から南端ラインまでが３町と１/３町です。その南北間には、敷地中央あたりを起点にすると、北には１町間隔で、そして南へは１町と１/３ 町という間隔で東西方向の溝が土地を区切っています。さらに、その中の細分も１/２町や１/３町となっており、非常に整然とした分割を感じられます。ただし、集落域の東西両端の距離は2.5町を測りますが、その中を区切る南北方向の溝の間隔は少しばらついており、現状では１町に合致する数値を抽出できていません。とはいえ全体としては、土地の分割に際して、１町（108～109m）の単位が意識されていることは十分に理解されると思います。

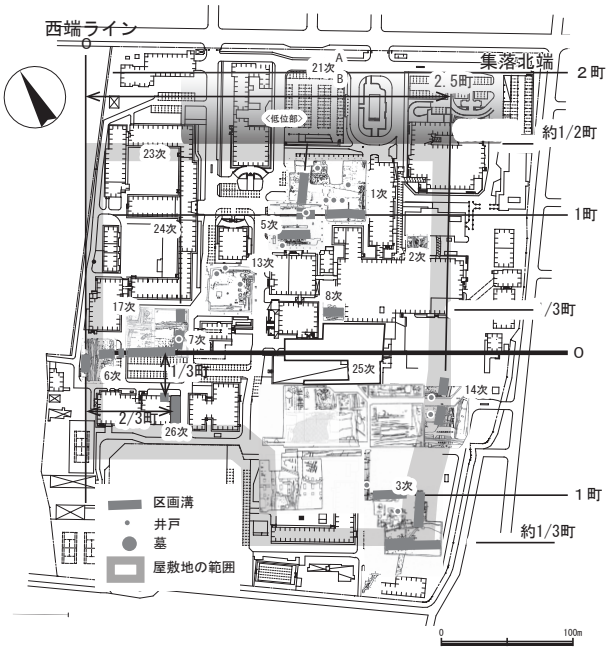


図48　平安時代の主要遺構配置

⑵　横長に配される屋敷地と地割り間隔の変化－鎌倉時代－

鎌倉時代に入ると、屋敷地の移動が確認されます（図49）。それは、まずは、井戸や溝の分布が南端地域から姿を消す、つまり、屋敷地の放棄に窺うことができます。さらに北側の屋敷地でも井戸の数が減少するなどの衰退があり、その結果、２回目の溝の再編時期後には、敷地中央部において東西に細長い屋敷地配置へと変わっています（図49太線トーンから破線トーンへ）。

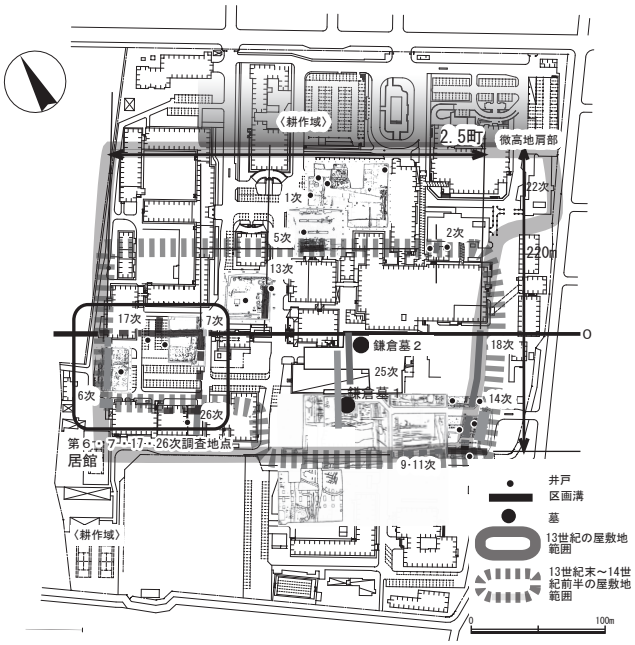


図49　鎌倉時代の主要遺構配置

一方、地割りの間隔は、東西方向の仮０ライン溝の位置が移動するなど、前段階ほど明確な

１町の地割りを見いだすことはできません。１/２町や２/３町のような数値を得ることはできますが、前段階よりは、屋敷地区画の規格性は弱くなったように見えます。また、溝数の減少によって、屋敷地区画が拡大傾向を示している点も特徴といえるでしょう。

⑶ 「区切る」から「巡る」溝へ

屋敷地を区画する溝の形態が、平安時代から鎌倉時代へ、大きく変化することが明瞭にわかる調査地点があります。鹿田キャンパスの南西部にあたる６・７・17・26次調査地点です（図49）。この地点では、東西方向の溝が前段階の位置から北へ移動していることもはっきりと確認できます。その結果、屋敷地の規模は、東西幅は２/３町で大きな変化はないのですが、南北幅は、平安時代の１/３町が鎌倉時代には１/２町に拡大しています（図50）。

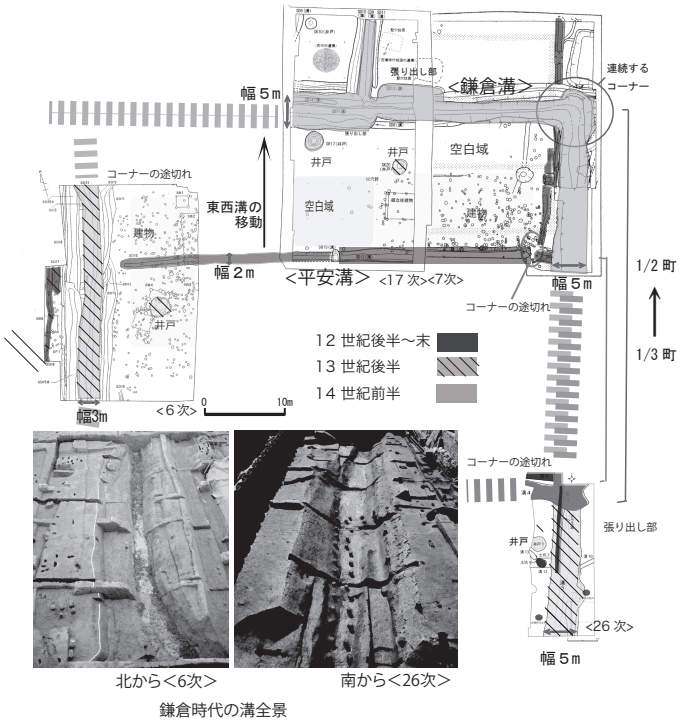


図50　居館に変貌する屋敷地

溝の形状に話を戻しましょう。

まず、注目されるのが区画溝のコーナー部分であり、そのつながり方です。平安時代では、溝の端部は途切れていて、コーナー部分はつながっていません（図50中央の細い溝）。一方、鎌倉時代の溝を見てください。コーナーはしっかりと屈曲し、１条の溝として途切れることなくつながっています（図50）。

さらに、規模を比較してみましょう。平安時代の溝の幅は２m弱、深さは１mくらいであるのに対して、鎌倉時代では、幅は３～５m・深さは1.2～1.5mへと拡大しています。他の地点では、平安溝の幅は１m前後・深さは0.8m程度が一般的であることを考えると、その差はより一層明瞭です。

鎌倉時代の溝にみられる底部形態や付属施設の存在も重要です。集落の西端を区切る溝の底は、Ｖ字形を成しています（図50写真左）。この独特の底部形態のおかげで、幅３m・深さ1.2m程度の溝は、数値以上に深く感じられ、防御的な機能を持つかのような印象を与えます。次の段階には幅５m・深さ1.5mへと、さらに規模を拡大し、底面形は船底形となり、テラス状の張り出し部が付設されています（図50写真右）。小舟なら入るくらいの広さがあります。この機能が問題となるのですが、皆さんも考えてみてください。例えば船着き場とすれば、水運に係わる機能も十分考えらますね。コーナーが途切れず連続する溝は、ただ単に屋敷地という空間と「区切る」という機能だけではなく、その他の重要な機能も合わせもっていた可能性があるのではないでしょうか。

平安時代後期には、集落内を溝で空間を「区切り」、屋敷地を配するという特徴ですね。その区画溝は比較的小形で連続性の乏しいという特徴から、区切られた屋敷地は、開放的な敷地となっていたでしょう。整然と区画された土地に碁盤の目のように配置された開放的な屋敷地景観が復元できます。それに対して、鎌倉時代では、屋敷地をぐるりと「巡る」大形の溝は、その敷地を外部から分離し閉鎖的空間を創出する。しかし一方で、溝を介してのスムースな流通ルートも確保する、そういった変化があったのではないでしょうか。

特に、ここで紹介した地点（図50）では、青磁・白磁など遠隔地からの高級な耐久性のある器が数多く出土しており、銅鋺や板碑等といった特殊な遺物は宗教施設の存在もうかがわせます。また、傀儡回しの到来を示す猿

形木製品の人形の出土からは、人の賑わいや盛んな物資の流通の中心的場所であることが現れています。こうした点からは、集落内での、居館としての優位性を見ることもできます。濠に囲まれた居館の成立、同時期における東西に細長い屋敷地配置、そして外部からの防御や水運機能が整備される景観へと、鎌倉時代を通じて、集落は、次の時代に向けて、その姿を変貌していったと考えられます。

５．平安時代から鎌倉時代へ－集落景観の変化と鎌倉時代の飛躍－

⑴　集落景観の変化

以上、平安時代後期から鎌倉時代への変化をまとめると、平安時代後期には一町単位の整然とした地割りのなかで、屋敷地は集落内で碁盤の目状に配され、開放的な屋敷地景観が生まれていた。それに対して鎌倉時代には、区画溝は大形化し、濠ともいえる溝が巡る居館が出現する。屋敷地の配置は、東西方向に横長配置傾向を強め、街道沿いのような景観に変わっていく。そのようなお話をしました。

鎌倉時代も終盤にはいると、集落の東端および西端ラインを構成していた溝の移動あるいは消失ということもおきています。従来の集落の枠を超えて東西に広がる動きを示すかのようです。屋敷地の配置が、まるで街道沿いに東西に細長く並ぶ配置へと変わるのと合わせ、ずいぶんと新しい村の景観に変わるのではないかと思います。溝形態の変化から予想される防御や水運機能の出現の背景には、こうした人や物の流れの活発化があるのではないでしょうか。

⑵　鹿田遺跡周辺の動向

鹿田遺跡の集落が、なぜ鎌倉時代にこのように飛躍するのかが問題ですね。周辺の状況、北側の正方位条里地帯の状況にも目をやってみましょう。北側の正方位軸をもつ地域でも、９～14世紀頃の遺構が、いくつかの遺跡で確認されています。津島岡大遺跡、津島遺跡、北方遺跡群等です。それらの発掘調査成果から、土地をめぐる再編が13世紀初め頃に起きているのではないかということがわかってきました。その時期には溝の方向や位置が変わっています。まさに、鹿田遺跡で生じている区画溝の再編期と一致しています。それに対して、平安時代（12世紀）での動きは確認できません。

また、南北両地域の関係を示す手がかりとして、鹿田遺跡内で調査された正方位の溝の存在があげられます。13世紀の初めの時期だけに確認されています。２条が並ぶ場所もあり、「道」があった可能性があります。13世紀代における北側と南側のつながりについては先述しましたが、その時期に、両者をつなぐような広域的な土地開発が行われたのではないか、その中でさまざまな物流ルートの整備等、鹿田の果たす役割も変わっていくのではないか。そんな考えが強くなります。ちなみに先ほどの鹿田の「道」は、北へ延長すると岡大津島キャンパスの南北道路につながります。平野を貫く道、全部が通っていたかどうかは別ですが、とても興味深い状況ですね。

まだまだ想像の域を超えていない部分が多いのですが、鹿田遺跡の状況から、平安時代から鎌倉時代へ、武士社会に変わっていく頃に新しい社会へ対応していく一つの村の様子を描くことができるのではないかと考えています。今後、報告書の作成を通じてさまざまな点を解決し、いつか「鹿田庄」の文字を、新納副センター長も待ち望んでおられますし、出したいと思います。その時にはまた改めてご報告することとし、お話を終わりにいたします。細かい話になりましたが、お付き合いいただきましてありがとうございました。

【参考文献】

山本悦世2015「鹿田遺跡の土地区画と岡山平野の条里関連遺構」『条里制・古代都市研究』第30号　条里制・古代都市研究会

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程・組織等

１．岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの規程

⑴　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

（平成16年４月１日
岡大規程第93号）

改正　平成20年３月31日規程第28号
平成23年３月31日規程第26号
平成23年９月27日規程第84号
平成26年１月28日規程第１号

（趣旨）

第１条　この規程は、国立大学法人岡山大学管理学則（平成16年岡大学則第１号）第26条の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

（目的）

第２条　センターは、岡山大学（以下「本学」という。）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

一　埋蔵文化財の発掘調査に関すること。

二　発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。

三　埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。

四　その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項。

（自己評価等）

第３条　センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

２　前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

（教育研究等の状況の公表）

第４条　センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

（センター長）

第５条　センターにセンター長を置く。

２　センター長は、財務・施設担当理事をもって充てる。

３　センター長は、センターを代表し、その業務を総括する。

（副センター長）

第６条　センターに副センター長を置く。

２　副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。

３　副センター長は、センター長の職務を助ける。

４　副センター長の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（調査研究室）

第７条　センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

２　調査研究室は、室長、センター専任の教員及びその他必要な職員で構成する。

３　室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長の推薦に基づき、学長が任命する。

４　室長の任期は、２年とし、再任を妨げない。

５　調査研究室の構成員は、センター長の命を受け、センターの業務に従事する。

（調査研究専門委員）

第８条　センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

２　専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が委嘱する。

３　専門委員の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（運営委員会）
第９条　センターに、センターの運営に関する重要な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。
２　運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。
（事務）
第10条　センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。
（雑則）
第11条　この規程に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。
附　則
この規程は、平成16年４月１日から施行する。
附　則
この規程は、平成20年４月１日から施行する。
附　則
この規程は、平成23年４月１日から施行する。
附　則
この規程は、平成23年11月１日から施行する。
附　則
この規程は、平成26年１月28日から施行する。

(2)　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程

（平成26年１月28日
岡大規程第２号）

改正　平成27年３月31日規程第65号

（趣旨）
第１条　この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（平成16年岡大規程第93号）第９条第２項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。
（審議事項）
第２条　運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する次の事項を審議する。
一　センターの業務に関する重要事項
二　教員の教育研究業績の審査に関する事項
三　その他センターの運営に関する重要事項
（組織）
第３条　運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
一　センター長
二　副センター長
三　本学の教授のうちからセンター長が必要と認めた者　若干人
四　センターの調査研究室長
五　センターの調査研究専門委員のうちからセンター長が必要と認めた者　１人
六　施設企画部長
２　前項第３号及び第５号の委員の任期は、２年とし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の在任期間とする。
３　教員の選考に関する事項を審議する場合には、第１項第４号及び第５号のうち教授でない者並びに第６号の委員は、審議に加わらないものとする。
（委員長）
第４条　運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

２　委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。
３　委員長に事故があるときには、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。
（委員会の成立等）
第５条　運営委員会は、委員の半数以上の出席がなければ、議事を開き、議決することができない。
２　運営委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
（委員以外の者の出席）
第６条　委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。
（事務）
第７条　運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。
附　則
１　この規程は、平成26年１月28日から施行する。
２　この規程の施行後に最初に任命される第３条第１項第３号及び第５号の委員は、この規程の施行に伴い廃止される岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規（平成16年４月１日学長裁定）第３条第１項第３号及び第４号の委員をそれぞれ充てることとし、その任期は、第３条第２項の規定にかかわらず、平成26年３月31日までとする。
附　則
この規程は、平成27年４月１日から施行する。

２．2014年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織

⑴　センター組織

〈埋蔵文化財調査研究センター長〉門岡裕一：併、財務・施設担当理事
〈副センター長〉新納　泉：併、大学院社会文化科学研究科教授
運営委員会
〈調査研究専門委員〉
今津勝紀：大学院社会文化科学研究科教授
鈴木茂之：大学院自然科学研究科教授
加藤鎌司：大学院環境生命科学研究科教授
〈調査研究室長〉山本悦世：専、本センター教授
〈調査研究員〉岩﨑志保・野崎貴博・南健太郎・山口雄治：専、本センター助教
〈特別契約職員〉大久保雅子
〈非常勤職員〉井上佐智・西本尚美・井口三智子・大橋紗恵子・小野素子・木下洋子

⑵　運営委員会

【委員】
門岡裕一　財務・施設担当理事（センター長）
新納　泉　大学院社会文化科学研究科教授（副センター長）
久野修義　大学院社会文化科学研究科教授
大塚愛二　大学院医歯薬学総合研究科教授
沖　陽子　大学院環境生命科学研究科教授・附属図書館長
鈴木茂之　大学院自然科学研究科教授（調査研究専門委員）
山本悦世　埋蔵文化財調査研究センター教授（調査研究室長）
須崎茂弘　施設企画部長

【2014年度協議・報告事項】
第82回　2014年７月31日　**協議事項**
・平成25年度決算について
・平成26年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画について
・平成26年度予算（案）について

	報告事項	・センターにおける機能強化等に向けた取り組み（大学改革構想）について
		・岡山大学埋蔵文化財調査研究センター第３回特別展示会『鹿田発掘30年　弥生時代を語る』について
		・鹿田遺跡第25次（中央診療棟Ⅱ期）調査について
第83回　2015年１月22日	協議事項	・平成27年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画について
		・平成27年度予算（案）について
		・岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程の一部改正について
	報告事項	・鹿田遺跡第26次調査（動物実験施設改修等）について
		・第16回キャンパス発掘成果展『鹿田荘の人と時代』について

３．岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

平成12年５月15日
埋蔵文化財調査研究センター長
施設部長

Ⅰ．請負業者が留意すべき事項

１．請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
２．発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。
３．工事用電力の保安責任者をおくこと。
４．非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
５．重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

Ⅱ．発掘現場で注意すべき事項

１．服装・装備・用具等
　１）安全で機能的な服装にする。
　２）平坦面から２ｍ 以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
　３）ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
　４）グラインダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
　５）スコップ・草削りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。
２．掘削
　１）のり面の角度
　　造成土：通常の土壌の場合は50～60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。
　　堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。
　　発掘区の壁際を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、60cm以上とする。
　２）のり面の保護
　　のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。
　３）深い遺構（深さ1.5m以上の遺構）
　　遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。
　　なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。

３．高所（高さ２ｍ 以上の場所）での作業
１）作業中には安全帯を使用する。
２）架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
３）２段以上の架台は、分解して移動させる。
４．発掘用機械類の操作
（ベルトコンベアー・ポンプ等）
１）調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
２）ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
３）ベルトコンベアーを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないような措置をする。
４）原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
５）ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。
（重機関係）
１）重機の免許所有者以外は運転しない。
２）運転者は、周囲の安全に注意する。
３）稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。
５．健康管理
１）作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

Ⅲ．その他

１）作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
２）調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の２の１）～３）どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

４．岡山大学埋蔵文化財調査研究センター教員選考に関する申し合わせの一部改正新旧対照表

2014年度に、「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター教員選考に関する申し合わせ」が岡山大学教授会会則の改正に伴って整備された。以下に、全文及び新旧対照表を掲載する。

(1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター教員審査に関する申し合わせ

平成20年10月29日
埋蔵文化財調査研究センター
運営委員会承認
改正　平成27年３月30日

（趣旨）

第１条　この申し合わせは、岡山大学教授会規則（平成16年岡大規則第20号）第10条の規定に基づき、埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）における教員の審査に関し、必要な事項を定める。

（教員審査委員会）

第２条　センター長は、教員審査の必要が生じたときは、埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に教員審査委員会（以下「審査委員会」という。）を設置する。

２　審査委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　センター長
二　副センター長
三　運営委員会委員からセンター長が必要と認めた者　　若干名

３　審査委員会に委員長を置き、審査委員会で選出される。

４　審査委員会は、委員の３分の２以上の出席をもって成立し、議事は、出席者の２分の１以上をもって決するものとし、可否同数の時は、委員長が決する。
５　審査委員会は、審査の方針について定め、候補者の資格及び適性について審査し、その結果を運営委員会に報告する。
（公募）
第３条　採用人事は、原則として公募により行うものとする。ただし、センターの教員（専従教員を含む。）で審査基準を満たす者があると認められる場合は、公募を行わないことがある。
（審査基準）
第４条　教授、准教授、講師及び助教となることのできる者は、規則に定める資格を有する者とする。
２　教授、准教授、講師及び助教の審査にあたっては、履歴書、業務目録（発掘調査の実績を含む）、論文（著書を含む）、主要研究業績についての適切な説明書の提出を求めるものとし、必要に応じてその他審査に必要な書類の提出を求めるものとする。
（雑則）
第５条　この申し合わせに定めるもののほか、教員の審査に関し、必要な事項は、センター長が別に定める。
附　則
この申し合わせは、平成20年10月30日から施行する。
附　則
この申し合わせは、平成27年４月１日から施行する。

⑵　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター教員選考に関する申し合わせ新旧対照表

現行	改正
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター教員選考に関する申し合わせ	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター教員審査に関する内規
（趣旨） 第１条　この申し合わせは、国立大学法人岡山大学教員の選考基準に関する規則（平成16年岡大規則第27号）第７条の規程に基づき、埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）における教員の選考に関し、必要な事項を定める。	（趣旨） 第１条　この申し合わせは、岡山大学教授会規則第10条　　の規程に基づき、埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）における教員の審査に関し、必要な事項を定める。
（教員選考委員会） 第２条　センター長は、教員選考の必要が生じたときは、埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に教員選考委員会（以下「選考委員会」という。）を設置する。	（教員審査委員会） 第２条　センター長は、教員審査の必要が生じたときは、埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に教員審査委員会（以下「審査委員会」という。）を設置する。
２　選考委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。 一　センター長 二　副センター長 三　運営委員会委員からセンター長が必要と認めた者　若干名	２　審査委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。 一　センター長 二　副センター長 三　運営委員会委員からセンター長が必要と認めた者　若干名
３　選考委員会に委員長を置き、選考委員会で選出される。	３　審査委員会に委員長を置き、審査委員会で選出される。
４　選考委員会は、委員の３分の２以上の出席をもって成立し、議事は、出席者の２分の１以上をもって決するものとし、可否同数の時は、委員長が決する。	４　審査委員会は、委員の３分の２以上の出席をもって成立し、議事は、出席者の２分の１以上をもって決するものとし、可否同数の時は、委員長が決する。
５　選考委員会は、選考の方針について定め、候補者の資格及び適性について審査し、その結果を運営委員会に諮る　　。	５　審査委員会は、選考の方針について定め、候補者の資格及び適性について審査し、その結果を運営委員会に報告する。
（公募） 第３条　採用人事は、原則として公募により行うものとする。ただし、センターの教員（専従教員を含む。）で審査基準を満たす者があると認められる場合は、公募を行わないことがある。	（公募） 第３条　採用人事は、原則として公募により行うものとする。ただし、センターの教員（専従教員を含む。）で選考基準を満たす者があると認められる場合は、公募を行わないことがある。

（審査基準） 第４条　教授、准教授、講師及び助教となることのできる者は、規則に定める資格を有する者とする。 ２　教授、准教授、講師及び助教の選考にあたっては、履歴書、業務目録（発掘調査の実績を含む）、論文（著書を含む）、主要研究業績についての適切な説明書の提出を求めるものとし、必要に応じてその他選考に必要な書類の提出を求めるものとする。	（審査基準） 第４条　教授、准教授、講師及び助教となることのできる者は、規則に定める資格を有する者とする。 ２　教授、准教授、講師及び助教の審査にあたっては、履歴書、業務目録（発掘調査の実績を含む）、論文（著書を含む）、主要研究業績についての適切な説明書の提出を求めるものとし、必要に応じてその他審査に必要な書類の提出を求めるものとする。
	（審査） 第５条　運営委員会は、審査委員会からの審査結果の報告に基づき、教員の審査を行う。
（雑則） 第５条　この申し合わせに定めるもののほか、教員の選考に関し、必要な事項は、センター長が別に定める。	（雑則） 第６条　この申し合わせに定めるもののほか、教員の審査に関し、必要な事項は、センター長が別に定める。
附　則 この申し合わせは、平成20年10月30日から施行する。	附　則 この申し合わせは、平成20年10月30日から施行する。 附　則 この申し合わせは、平成27年４月１日から施行する。

2013年度以前の調査・研究一覧

表９　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）

年度	地区名		種類	工事名称：調査名称	調査組織	調査面積（㎡）	文献	備考
1980	鹿田		立会	歯学部附属病院棟新営	岡山市教育委員会	8		
1981	津島	BD26	〃	農学部寄宿舎新営	〃			
	〃		〃	文法経　合併処理槽施設	〃			
	〃		〃	文法経　合併処理槽施設	〃			
	〃	BD09、BC09～11	〃	基幹整備（共同溝取付）	〃			
	〃	BD～BE04～07	〃	陸上競技場改修（配水管施設）	〃			
	鹿田		〃	（医病）高気圧治療室新営	〃			
	〃		〃	（医病）動物実験棟新営	〃 岡山県教育委員会			大学が市教委への確認調査依頼をせずに掘削。その後、岡山市･岡山県教委が残存壁面の調査を実施
	〃		〃	（医病）理解剖体臓器処理保管庫新営	岡山市教育委員会			
	〃		〃	医学部運動場改修	〃			
1982	津島	AV06･10、AW05･14、AX08、BD07、BE10	試掘	排水基幹整備	〃			津島AW14区で弥生時代包含層確認、協議→**津島岡大遺跡第１次調査**へ
	〃	AW14	発掘	文法経　排水集中槽（NP-１）埋設 ：**津島岡大第１次調査**	岡山大学	24.0	3	［**小橋法目黒遺跡**］と報告
	〃		試掘	武道館新営	岡山市教育委員会	2.3		
	〃	AY15･16	〃	法経　校舎新営	〃	7.0		
	鹿田		〃	医学部標本保存庫新営	岡山県教育委員会	8.0		
	〃		〃	（医病）外来診療棟新営	〃 岡山市教育委員会	4.0	2	
	〃		立会	医学部動物実験施設関連排水管・ガス管埋設	岡山県教育委員会		1	
	〃	AE～AN22、AE22～26	〃	歯学部電話ケーブル埋設	〃 岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室			

文献

１．光永真一　1983「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　岡山県教育委員会
２．河本　清　1983「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　岡山県教育委員会
３．吉留秀敏　1985『岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第１集　岡山大学埋蔵文化財調査室

表10　2013年度以前の構内主要調査（1983～2013年度）

凡例
・総合番号：調査地区別通し番号（立会調査は選択的に保存）
・津島岡大遺跡第１次調査は本機関設置以前の調査であることから、総合番号を※１として区別している。
・試掘確認調査のうち、その後の発掘調査範囲内に入った場合は、範囲内の番号記載を省き、全てが範囲内に含まれた場合には総合番号に（　）を付している。
・立会調査で、付表に保存する基準：①中世土層以下を確認した調査　②明確な遺構・遺物を確認した調査
・番号：年度別報告番号
・文献：表12・13の番号に対応する。正式報告が刊行された場合は、年報・紀要掲載の概報文献は削除している。

表10－(1)　発掘調査

＜津島地区：津島岡大遺跡＞

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(㎡)	概要（主要遺構他）	文献
※1	1982	－	**津島岡大遺跡第１次調査** ：排水集中槽（NP-１）埋設	AW14	10.28～11.24	24	弥生中期･古代：溝、「小橋法目黒遺跡」と報告	3
1	1983	－	**津島岡大遺跡第２次調査** ：排水管埋設	BE14･18、BF17･18 BG14 BH14･15	84.1.9～3.5	265	弥生早・前期：遺物	4
2	1983	－	**津島岡大遺跡第２次調査** ：合併処理槽埋設	BH13	11.14～11.22 84.1.9～3.5	276	弥生前期水田関連遺構（溝他）	4
15	1986 1987	2 1	**津島岡大遺跡第３次調査** ：男子学生寮新営	AV00、AW00･01	12.1～87.6.18 8.24～9.5	1550	縄文後期河道、弥生早期：貯蔵穴群･河道、弥生前期～近代：水田･溝、古代条里関連溝	19
16	1986	3	**津島岡大遺跡第４次調査** ：屋内運動場新営	BF･BG09	87.1.19～1.22	70	弥生前期溝、中世河道	6
26	1988	1	**津島岡大遺跡第５次調査** ：大学院自然科学研究科棟新営	AY06～08 AZ06･07	6.27～89.3.19	1537	縄文後期･弥生早期：貯蔵穴群･河道、弥生時代末～近世：水田関連遺構	27
27	1988 1989	2 1	**津島岡大遺跡第６次調査** ：生物応用工学科棟新営	AV･AW04･05	9.20～89.5.31	600	縄文後期：貯蔵穴群･河道、古代条里関連溝、弥生前期～近世：水田･溝	35
28	1988	3	**津島岡大遺跡第７次調査** ：情報工学科棟新営	AV･AW05･06	10.12～89.3.31	800	縄文後期：炉･ピット、弥生前期～近世：水田･溝	35

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(㎡)	概　要　(主要遺構他)	文献
39	1990	1	**津島岡大遺跡第５次調査** ：自然科学研究科棟共同溝･検水桝設置	AY･AZ08	4.3～4.21	90	古墳後期溝	27
44	1991	2	**津島岡大遺跡第８次調査（Ａ地点）** ：遺伝子実験施設新営	BD18･19	7.23～12.25	650	縄文時代土坑、弥生時代～近世：溝群	32
45	1991	3	**津島岡大遺跡第８次調査（Ｂ地点）** ：合併処理槽新営	BH13	7.23～12.2	140	弥生時代溝、古代～近世：水田	32
50	1992	1	**津島岡大遺跡第９次調査** ：生体機能応用工学科棟新営	AU～AW04	7.1～93.1.29	650	縄文後期：貯蔵穴群･土坑･溝･火処、弥生時代～近世：水田関連遺構	47
51	1992 1993	2 1	**津島岡大遺跡第10次調査** ：保健管理センター新営	BB～BC10～11	93.2.1～3.31 4.17～7.31	400	弥生後期土坑群、古墳時代：井戸･住居･炉、古代柱穴群、中世溝、近世耕作関連遺構	64
54	1993	2	**津島岡大遺跡第11次調査** ：総合情報処理センター新営	AV～AW11～12	9.14～94.1.11	640	縄文後期：ピット･炉、弥生前期水田畦畔	36
55	1993 1994	3 1	**津島岡大遺跡第12次調査** ：図書館新営	AV～AW13～14	94.2.9～3.31 4.1～11.30	1472	弥生前期水田、弥生中期～古墳時代：溝群、古代～近世：条里関連溝	64
64	1994 1995	2 1	**津島岡大遺跡第13次調査** ：福利厚生施設（北棟）新営	AW～AX11～12	10.6～11.30 95.7.10～10.4	816	縄文後期ピット、弥生水田、弥生～古墳時代：溝群	41
69	1995	2	**津島岡大遺跡第14次調査** ：福利厚生施設（南棟）新営	BB～BC12･13	10.25～96.2.14	856	弥生前期水田、弥生～古墳時代：溝群	46
70	1995 1996	3 1	**津島岡大遺跡第15次調査** ：サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営	AW00･01	96.1.16～4.25	1600	縄文後期･弥生早期：貯蔵穴群･河道、縄文後期：ピット群･石材デポ･火処、弥生前期水田、古墳～中世：水田･溝	72
74	1996	2	**津島岡大遺跡第16次調査** ：動物実験棟新営	BD19～20	5.7～15	30.3	Ａ地点：縄文時代･古墳時代：土坑 Ｂ地点：中世溝、古代柱穴列、弥生時代水田	44
75	1996	3	**津島岡大遺跡第17次調査** ：環境理工学部校舎（Ⅰ期）新営	AW02～04	5.21～97.1.9	1451	縄文後期：住居･土坑･溝、弥生前期：水田、弥生時代溝群、古墳後期柱穴列、古代水田、中近世耕作痕	77
85	1998	2	**津島岡大遺跡第18次調査** ：福利施設（南）ポンプ槽取設	BB11	4.7～4.10	16	古代溝状遺構	53
86	1998	3	**津島岡大遺跡第19次調査** ：コラボレーション･センター新営	AZ09･10	7.27～99.2.18	1019	縄文後期：ピット･炉、弥生前期：水田･土坑･河道、古墳時代･中世：溝、近世：道路状遺構･溝	65
87	1998	5	**津島岡大第20次調査** ：環境理工学部校舎ポンプ槽取設	AY07	10.19～28	16	黒色土上面に溝、中世溝	53
88	1998	6	**津島岡大遺跡第21次調査** ：工学部エレベーター設置	AX09	11.6～24	30.2	縄文時期土坑、弥生早期～前期：溝、古代：土坑･溝	65
89	1998 1999	8 2	**津島岡大遺跡第22次調査** ：環境理工学部校舎（Ⅱ期）新営	AW02･03	99.3.1～7.12	773.5	縄文後期～弥生前期：河道、弥生早期土坑、弥生前期水田、弥生中期溝、古墳～近世：条里関連溝･水田	77
104	1999 2000	5 1	**津島岡大遺跡第23次調査** ：総合研究棟新営	AZ15･BA14	00.2.3～7.28	1339	縄文後期～弥生前期河道、縄文後期杭列、弥生早期：貯蔵穴･溝、弥生前期：堰･溝、弥生中期～近世：溝	80
111	2000	3	**津島岡大遺跡第24次調査** ：総合研究棟渡り廊下建設	AZ14	12.5～14	34.2	縄文後期：河道･杭列	80
112	2000	4	**津島岡大遺跡第25次調査** ：散水施設設置	BA15	01.1.29～31	20	中世～近世：溝	61
113	2000 2001	5 1	**津島岡大遺跡第26次調査** ：事務局棟新営	BC～BD14～15	01.3.26～9.30	1550	縄文中･後期：土坑･炉、弥生早期貯蔵穴、弥生前期土坑、弥生後期溝、古墳後期～中世：柵列･道路状遺構、近世：溝･堰	76
121	2001 2002	2 1	**津島岡大遺跡第27次調査** ：創立五十周年記念会館新営	BB～BC14～15	02.2.1～6.24	1648	縄文後期炉、弥生･古墳時代：溝群、中世畦畔（条里関連）	68
127	2002	2	**津島岡大遺跡第28次調査** ：自然科学系総合研究棟新営	AW～AY06～08	4.30～9.20、 11.28～03.1.15	1798	弥生前期水田、弥生前期～中期：溝、古代：溝（内に柱穴列）、中世畠関連遺構	87
128	2002	4	**津島岡大遺跡第29次調査** ：共同溝設置	BF16	9.18～10.3	62.6	弥生～古墳時代：溝･ピット	71
163	2007	1	**津島岡大遺跡第30次調査** ：岡山大インキュベータ新営	BC19･20	8.1～12.17	1035.4	縄文後期～弥生早期：土坑群、弥生～古墳時代：溝群、古代道路状遺構、中近世：土坑群･畦畔･溝群	93
168	2008	1	**津島岡大遺跡第31次調査** ：大学生協東福利施設新営	AX04	6.17～8.22	212	弥生前期畦畔、古代道路状遺構	95
184	2009	1	**津島岡大遺跡第32次調査** ：教育学部武道場新営	AX02	7.16～10.13	383	縄文後期貯蔵穴群、弥生前期畦畔、弥生前･中期・中近世：溝	100
196	2010	1	**津島岡大遺跡第33次発掘調査** ：薬学部講義棟新営	BB17･18、BC17･18	7.16～11.11	972.2	縄文中･後期：ピット、弥生時代：土坑･溝、古墳時代後期～古代総柱建物、古代･中世：道路状遺構	117
197	2010	2	**津島岡大遺跡第34次発掘調査** ：国際交流会館新営	AU･AV13･14	7.30～9.28	1590	弥生前期：畦畔･溝、近世土坑群、平面調査は中世上面まで実施し下層部は保存	105
216	2013	1	**津島岡大遺跡第35次発掘調査** ：附属図書館増築	AW13	7.8～8.29	80	縄文時代：ピット、古墳時代後期：溝・ピット、古代：ピット列、近世：畦畔、土坑、溝	116

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(㎡)	概　要　(主要遺構他)	文献
1	1983 1984	－	**鹿田遺跡第1次調査** ：外来診療棟新営	AU～BD28～40	7.27～11.22 84.1.9～8.31	2188	弥生時代中期後半～中世の集落遺構群	7
2	1983	－	**鹿田遺跡第2次調査** ：NMR-CT室新営	BG～BI18～21	8.1～12.30	176	弥生時代後期～中世の集落遺構群	7

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(㎡)	概　要　(主要遺構他)	文献
10	1986	1	**鹿田遺跡第3次調査** ：医療技術短期大学校舎	CN～CU27･28、 CT～CY19～27、 CX～DD16～25、 DD～DG22･23	6.2～11.29	2390	中世の集落遺構群、古代の橋脚･河道	10
12	1987	3	**鹿田遺跡第4次調査** ：医短校舎周辺の配管敷設	DD～DF25 DG～DI27･28	11.2～11.21	30	古代の河道	10
13	1987	2	**鹿田遺跡第5次調査** ：管理棟新営	BB～BH35～42	10.6～88.3.2 88.3.23～3.31	1192	弥生時代中期後半～中世の集落遺構群	24
16	1990 1991	2 1	**鹿田遺跡第6次調査** ：アイソトープ総合センター新営	BW～CC67～71	11.20～91.6.30	690	古墳時代初頭土坑、中世集落遺構群	40
25	1997 1998	4 1	**鹿田遺跡第7次調査** ：基礎医学棟新営	BR55～BX61 BY56～57	98.2.27～8.6	829	古墳時代初頭･中世の集落遺構群、近世の水田･溝	85
27	1998	4	**鹿田遺跡第8次調査** ：RI治療室新営	BP～BS30～32	7.28～9.1	165	古墳時代と中世の溝群	85
28	1998 1999	7 1	**鹿田遺跡第9次調査** ：病棟新営	CD33～37、 CE･CF28～37、 CG～CJ20～37、 CK･CL25～37	11.27～99.5.11	2088	弥生時代水田･溝、中･近世集落遺構群	53
31	1999	3	**鹿田遺跡第10次調査** ：共同溝設置関連	CD･CE10～12 DD～DF16～22	5.7～10.14	244.1	古代の杭列、弥生時代ピット、近世溝	107
32	1999	4	**鹿田遺跡第11次調査** ：病棟新営	CD～CM19～42	8.19～12.22	2020	弥生時代水田畦畔、古代の池状遺構、中･近世集落遺構群	56
40	2000 2001	2 －	**鹿田遺跡第12次調査** ：エネルギーセンター新営	CO～CV35～44 CN･CM38～41 CN28～38	10.2～01.05.10	1897	弥生時代溝･河道、古墳時代溝・土器溜まり、中世集落遺構群、近世土坑･溝	56 61
46	2002	3	**鹿田遺跡第13次調査** ：総合教育研究棟新営	BL～BR46～51	4.30～10.25	934	弥生時代の溝、古墳時代の土器溜まり･溝、中世集落遺構群、近世土坑群	98
55	2003	1	**鹿田遺跡第14次調査** ：病棟（Ⅱ期）新営	CD～CM12～20	7.31～12.17	1331	弥生～古墳時代の畦畔･溝、中世の集落遺構群、近世のため池･土坑	113
56	2003	2	**鹿田遺跡第15次調査** ：総合教育研究棟外構	BQ～BS45･46	10.16～10.29	30.4	古墳時代初頭の井戸･溝	98
59	2004	1	**鹿田遺跡第16次調査** ：立体駐車場新営	AH～AI6･7 AF12･13、 AN～AO4	10.21～11.8	49.15	近世～近代の畦畔･溝･畝･土坑、中世の土坑、弥生～古墳時代の河道	81
60	2006	1	**鹿田遺跡第17次調査** ：総合研究棟（医学系）新営	BR～BY60～64	7.10～11.14	642	古墳時代～中世の集落遺構群、近世土坑･溝	88
64	2007	1a	**鹿田遺跡第18次調査** ：中央診療棟新営	BT13～BY20	10.10～08.3.14	872.2	弥生時代後期～近世の集落遺構群	92
65	2007	1b	**鹿田遺跡第18次調査** ：防火水槽設置	CG～CI9･10	10.16～11.1	43.2	古代後半の井戸、近世入江状遺構･護岸施設	107
66	2007	1c	**鹿田遺跡第18次調査** ：用水路改修	CM～CN9･10 CO10･11	12.27～08.1.16	56	弥生時代土坑･溝	107
76	2008	1	**鹿田遺跡第19次調査** ：歯学部渡り廊下設置	AW～AY22～23	6.26～9.12	80	弥生時代後期の「方形高まり」･貝塚･壺棺･土坑･溝、古墳時代土坑･溝、古代ピット、近世土坑	95
80	2009	1a	**鹿田遺跡第20次調査Ａ地点** ：中央診療棟共同溝設置	BZ～CC31～40	6.18～7.31 8.5～24	632	弥生時代～近世の遺構･遺物	102
81	2009	1b	**鹿田遺跡第20次調査Ｂ地点** ：中央診療棟新営（本体工事）	BS20～23 BT～BW20～24 BX～CD13～25	10.15～11.2.22 3.1～8	2482	弥生時代～近世の遺構･遺物	102
84	2010	1	**鹿田遺跡第20次調査Ｃ地点** ：中央診療棟新営	BR･BS12～21 BT～BX12～13	7.20～10.8	276	弥生時代～近世の遺構・遺物	105
85	2010	2	**鹿田遺跡第20次調査Ｄ地点** ：中央診療棟新営	BT･BU24	2011.2.18～3.2	15	中世～近世の遺構・遺物	105
86	2010	3-1	**鹿田遺跡第21次調査Ａ地点** ：外来棟周辺他環境整備	AD～AF30･31	11.18～12.9	21.2	平安時代河道、鎌倉時代溝状遺構	105
87	2010	3-2	**鹿田遺跡第21次調査Ｂ地点** ：外来棟周辺他環境整備	AG･AH30･31		22	平安時代河道、鎌倉時代溝状遺構	105
88	2010	3-4	**鹿田遺跡第21次調査Ｄ地点** 外来棟周辺他環境整備	AS･AT25～28		59.4	弥生時代包含層	105
94	2011	1	**鹿田遺跡第22次調査** 地域医療人育成センター新営	AV～BB 04～07	7.14～9.22 10.14～11.18	533	弥生時代井戸・溝、中世井戸・溝、近世井戸・溝、近代溝・池	106
96	2012	1	**鹿田遺跡第23次調査** Ｊホール新営	AN～AR 57～62	6.25～8.30	612	弥生時代～古墳時代初頭畦畔、古代溝、中世溝･炉 近世溝・土坑・畠、近代溝・トロッコ軌道	111
97	2012	2	**鹿田遺跡第24次調査** 医歯薬融合棟新営	BD～BL 57～69	11.27～ 2013.4.25	1867	弥生時代溝､古墳時代土器棺、古代井戸・土坑、中世溝・畦・井戸・土坑、近世溝・土坑、近代畝状遺構	111
100	2013	2	**鹿田遺跡第25次調査　Ⅰ工区** ：中央診療棟Ⅱ期	BY～CD24～38	2014.1.6～4.17	650	弥生時代：畦畔、中世：井戸・土坑・溝・柱穴、近世：土坑・溝	116

＜三朝地区：福呂遺跡＞

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(㎡)	概　要　(主要遺構他)	文献
1	1997	1･2	**福呂遺跡第1次調査** ：実験研究棟新営	－	97.5.10～20 7.28～31	269	縄文時代早期･弥生時代中期･中世･近世の集落	55
2	1997	3	**福呂遺跡第2次調査** ：実験研究棟新営に伴うスロープ設置	－	97.11.25～12.5	120	近世･中世･古代の集落	55

表10－(2)　試掘・確認調査

＜津島地区：津島岡大遺跡＞

総合番号	年度	番号	調査対象地名称　他	構内座標	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概　要		文献
							TP数	内容・その後の対応	
(3)	1983	－	農学部合併処理槽予定地	BH13	2.5	－	1	→**津島岡大第2次調査**：1983年度	1
4	1983	－	農学部排水管中間ポンプ槽予定地	BF17	3.5	－	1	→**工事立会**	
5	1983	－	農学部排水管埋設予定地	BE～BG14、BE･BH15、BE18、BF16～18、BC18	2.0	－	29	→**津島岡大第2次調査**：1983年度	
6	1983	－	農学部農場畜舎棟予定地	BF22･23	2.0～3.0	0.6	2	土器片→1987年度**工事立会**	
(7)	1983	－	大学事務局棟予定地	BC･BD15	2.0～3.0	0.9	3	→**津島岡大第26次調査**：2000年度	
(8)	1983	－	保健管理センター予定地	BB10	2.0～3.0	0.8	1	→**津島岡大第10次調査**：1999年度	
9	1983	－	津島宿舎予定地	BI16	0.9	0.9	2	土器片→1987年度**工事立会**	
10	1983	－	工学部校舎新営予定地	AW05	3.0	1	1	土器片	
12	1985	1	教養講義棟予定地	BE08	3.5	1.2	2	遺構など未確認→1986年度**工事立会**	5
13	1985	2	教育研究棟予定地	AX02	2.6～3.4	1.2	3	縄文～弥生･中世土器出土	
14	1985	3	男子学生寮予定地	AV･AW99～01	2.0～3.0	1	12	→**津島岡大第3調査**：1986年度	
(17)	1986	3	屋内運動場予定地	BF･BG09	2.4、1.2～1.7	1.1	3	→**津島岡大第4次調査**：1986年度	6
(18)	1986	4	大学院自然科学研究科棟予定地	AY･AZ07	1.6～3.2	0.6～0.8	3	→**津島岡大第5次調査**：1988年度	
22	1987	4	外国人宿舎予定地	AP02	2.2～2.8	－	2	縄文時代･弥生時代･近世の遺構面	8
(23)	1987	5	総合情報処理センター予定地	AV11	2.0～3.0	2	2	→**津島岡大第11次調査**：1993年度	
24	1987	6	理学部身体障害者用エレベーター予定地	AY09	3.0～3.5	約1.0	1	中世･近世の遺物、古代･中世の水田 ＜継続して調査＞	
25	1987	7	教養部身体障害者用エレベーター予定地	BD09	2.5	0.7	1	縄文時代遺構、縄文･中世･近世土器 ＜継続して調査＞	
29	1988	17	工学部校舎予定地	AX04･06、AW04	2.0～3.5	1～1.5	6	→**津島岡大第6･7次調査**：1988年度	11
30	1988	19	動物実験飼育棟･遺伝子実験棟予定地	BD18･19	2.3	1.1～1.2	3	→**津島岡大第8次調査**：1991年度	
31	1988	20	国際交流会館予定地	BC26	2.5	1.2	3	中･近世土器→1988年度**工事立会**	
33	1989	2	教育学部身体障害者用エレベーター予定地	AZ･BA05	2.5	0.8	1	縄文後期･弥生早期の落込み、縄文後期～中世土器＜継続して調査、面積38.5㎡＞	14
34	1989	3	大学院自然科学研究科合併処理槽予定地	AZ17	4.0	1.6～2.0	1	中世～明治の水田畦畔･溝→1989年度**工事立会**	
35	1989	4	学生合宿所予定地	BD02	2.0～3.2	1	1	弥生早･前期の畦畔→1989年度**工事立会**	
(36)	1989	5	図書館予定地	AV･AW13	3.0	1.4～1.6	2	→**津島岡大第12次調査**：1993年度	
40	1990	3	学生合宿所ポンプ槽予定地	BC02	2.5	1.1	1	弥生前期畦畔、中世土器	18
41	1990	6	福利厚生施設予定地	AW･AX11	3.9	1.4～1.6	2	→**津島岡大第13次調査**：1994年度	
56	1993	3	農学部汎用耕地実験実習施設予定地	BE～BF22～23	1.5	－	2	中～近世の耕作土	30
65	1994	3	農･薬学部動物実験施設予定地	BD20	2.0	0.9	1	GL-1.4mで黒色土、縄文土器1点→**盛り土保存**	33
71	1995	4	国際交流会館予定地	BE26	4.1･2.4	1.6	2	中世～明治層確認、以下は湿地、遺構･遺物無し（明治畝のみ）→**工事立会**	38
72	1995	5	環境理工学部校舎予定地	AW02･03	2.4	1.2	2	→**津島岡大第17次調査**：1996年度	
73	1995	6	ボクシング部ボックス移設予定地	BF07	3.0	1.2	1	標高2.5mで黒色土、弥生～古墳時代の溝2条、古代溝1条	38
(90)	1998	9	コラボレーション･センター予定地	AZ09	2.7～3.4	1.3	2	→**津島岡大第19次調査**：1998年度	53
(91)	1998	10	環境理工学部校舎予定地	AW02･03	4.5	1.2	2	→**津島岡大第22次調査**：1998年度	
92	1998	13	工学部システム工学科棟予定地	AW04	2.8	1	1	GL-1.8m黒色土、縄文後期の遺構	
93	1998	14	遺跡保護区整備関連範囲	AU02･03･06、AV03	2.4～3.8	0.8～1.6	5	TP1･3･5：微高地、TP2･4：低湿地、TP1：弥生溝、TP3：弥生溝･ピット、TP4：中世溝	
(105)	1999	6	文法経　総合研究棟予定地	AZ15、BA14	2.7、3.5	0.8 1.1	2	→**津島岡大第23次調査**：1999年度	56
106	1999	7	電波暗室設置予定地	AV08	1.2	0.2	1	現表土以下に基盤となる岩盤層	
114	2000	6	縄文～弥生時代における環境復元に伴う調査	AV00、AX00･02･03、AZ06、AW08	2.6～3.2	1.7～0.9	6	縄文･弥生時代の微高地、古代溝	61
115	2000	7	創立五十周年記念館予定地	BB14	2	0.8	1	→**津島岡大第27次調査**：2001年度	
129	2002	5	事務局旧本部棟移転予定地	BD15	2.1	1	1	黒色土の落ち	71
185	2009	2	学童保育室予定地	AV14	3.24	1.95	1	黒色土確認	102
186	2009	3	農学部構内植物工場予定地	BF20	3.4	2.3	2	近代溝･畦畔	
					2.3	1.1		弥生中期～古代におさまる溝	
198	2010	3	国際交流会館予定地	AU13・14	3.4	1.6～1.9	3	→**津島岡大第34次調査**：2010年度	105
199	2010	4	生協プレハブ予定地	BC12	2.2	0.9	1	黒色土は未堆積を確認	
208	2011	1	文法経フェンス工事	AW17、AX17、AY17、AZ16	1.1～2.0	1.0～1.6		近代の土塁、水路	106
				AZ17	0.8	－		門跡・陸軍建物基礎	
213	2012	1	正課外活動施設予定地	BD02	2.9	1.1	1	縄文時代～近代層確認	111
217	2013	2	Ｊテラス新営	BG13	1.8･2.3	1	2	縄文時代ピット、弥生時代前期土坑・遺構	116

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合番号	年度	番号	調査対象地名称　他	構内座標	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要		文献
							TP数	内容・その後の対応	
(4)	1984	−	西病棟北側受水槽予定地	BU30·31	1.4	0.5～0.7	2	中世土器·包含層確認→盛り土保存	2
(5)	1984	−	医療短期大学部校舎予定地	CT·CU25、CZ19·20·23·24	2.7	0.8～1.0	3	→鹿田第3次調査：1986年度	
6	1985	4	外来診療棟環境整備工事範囲	AJ33、AI40、AJ·AK26	2.2～3.0	0.9～1.4	3	弥生時代～中世の遺物	5
(17)	1990	5	アイソトープ総合センター予定地	BY·BZ68	2.3	1.2～1.3	1	→鹿田第6次調査：1990年度	18
(26)	1997	8	基礎医学棟予定地	BT57	2.2	0.9	1	→鹿田第7次調査：1997年度	50
29	1998	11	病棟予定地	CF·CG43·44、CH25·26、CK35·36、CK15	2.0～2.4	1	4	→鹿田第9次調査：1998年度	53
82	2009	2	学生サークル棟予定地	CR70-71、CW75	2.1～2.3	0.9～0.7	2	弥生時代低湿地後中世遺構耕作地、集落外縁	102
89	2010	4	岡山県地域医療総合支援センター予定地	AZ04·BA08	2.3～2.4	1.2～0.6	2	近世溝·弥生包含層確認→鹿田第22次調査：2011年度	105

＜倉敷地区＞

総合番号	年度	番号	調査対象地名称　他	構内座標	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要		文献
							TP数	内容・その後の対応	
1	1990	4	資源生物科学研究所遺跡確認	−	2.5	0.7	1	中世後半以降の土器	18
2	1998	12	バイオ実験棟予定地	−	1.5	0.2	1	近世干拓地内、遺構未確認	53
3	2013	1	植物ストレス科学研究等拠点施設建設工事	−	2.0	0.7	1	近世耕作土層確認	116

＜東山地区＞

総合番号	年度	番号	調査対象地名称　他	構内座標	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要		文献
							TP数	内容・その後の対応	
3	2006	1	附属小学校校舎予定地	−	3.0	0.3～0.5	4	近世·近代：溝3条、中世？畦畔	88
4	2008	1	附属中学校校舎予定地	−	2.3～2.4	1	2	近代畦畔	95
5	2013	1	附属小学校屋内運動場建て替え工事	−	2.1	0.9	1	中世～近世耕作土層確認	116

＜三朝地区：福呂遺跡＞

総合番号	年度	番号	調査対象地名称　他	構内座標	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要		文献
							TP数	内容・その後の対応	
3	1997	5·6	実験研究棟予定地	−	1.66～2.1	0.8	2	→福呂第2次調査：1997年度	50
5	2004	1	三朝宿泊所増築予定地	−	1.3	0.5～0.9	2	遺構·遺物·包含層未確認	81
6	2004	2	高圧線·電話線設置予定地	−	1.0	0.85	1	河床礫、段丘礫層確認	

表10−(3)　立会調査

＜津島地区：津島岡大遺跡＞

総合番号	年度	番号	工事名称／細目		構内座標	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　要	文献
11	1984	−	南宿舎合併処理槽関係配水管埋設		BI15～17	1.0～2.2	1	溝·土坑、弥生土器·須恵器	2
19	1986	12	教養部校舎新営		BE08·09	2.3	1.3	中·近世：溝·土器	6
20		21	ハンドボールコート新設		BG08	0.2～2.0	0.8	黒色土	
21		26	教養部校舎新営に伴う電気配管		BF07·08	1.8	0.9	中世包含層	
32	1988	17	テニスコート夜間照明施設		BG10·11	2.2	1.5	GL-約2mで黒色土、西に向かう落ち推定	11
37	1989	8	自然科学研究科棟新営：工事用道路		AZ08	1.4	−	弥生後期水田、近世溝、75㎡	14
38		10	生物応用工学科棟新営に伴う電柱架設		AV04·05	1.5～1.9	0.7～1.2	黒色土	
42	1990	16·19	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事	電柱移設	AV04～10	0.4～3.0	0.6～1.4	5ヶ所、黒色土、条里南北溝	18
43		20		学生合宿所給排水管設置	BC02～04 BD03·04	2.3	1.2	GL-2.3mで黒色土	
46	1991	9	防火用水撤去		BC18	2	0.8	基盤層まで掘削、石鏃	21
47		17	津島地区基幹整備（電気）	ハンドホール·アース板	BB16	1.7～1.8	0.5	2ヶ所、明治層～淡灰色粘土層	
48		19		アース板	BD15	1.7	1	GL-1.5mで黒色土	
49		40	南北道路外灯設置		BC·BE·BF12	1.5	−	3ヶ所、GL-1.4mで古代層	
52	1992	15	遺伝子実験施設ハンドホール設置		BD18	1.5	0.75～1.1	縄文後期層まで、溝2本	25
53		34	附属図書館北側駐車場整備		AV12	3	1.7	造成土以下は粘土層	
57	1993	17	保健管理センター新営	外構工事電気配線	BB～BC10～12	1.8	0.6～0.7	黒褐色土はGL-1.15～1.7m	30
58		19		旧棟改修電気配線	BB11	1.1	0.8	弥生土器、工法変更	
59		23	津島地区基幹整備RI共同利用施設排水処理施設		BA07	3.2	−	明治～中世層·暗褐色土層、古代溝？ 縄文晩期土器	
60		28	津島地区環境整備	ボックスカルバート	BD～BE13	1.5	1	近世～中世層	
61		33		水銀灯設置	BB～BG12～13	1.8	0.5～1.2	10ヶ所、中世層まで、一部で暗褐色土層	
62		34		信号機設置	BD～BE12·13	1.6	1	中世層まで、一部で暗褐色土層	
63		39-41	野球場バックネット·防球ネット改修		BB05～07 BC05·41	2.0～3.2	1	GL-1.2～2.0m付近で黒色土、以下黄色砂～青灰色粘土	
66	1994	9	陸上競技場照明灯設置		BD·BE·BF04～07	2	0.96	GL-1.92～2.0mで黒色土	33
67		13	総合情報処理センター新営電気工事		AV10、AW10、AU11	2.2	1.5	GL-1.7mで黒色土、近世溝	
68		20	焼却場設置		BD20	2.2	1.5	GL-1.9mで黒色土	

総合番号	年度	番号	工事名称／細目		構内座標	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　要	文献
76	1996	4	農･薬学部動物実験棟新営	造成土取り	BC18	2.2	1.9	黒色土層付近まで	44
77		5		ハンドホール設置	BD16～19	1.3	－	4ヶ所、造成土以下に5層	
78		12	サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営	外灯設置	AV02、AV03、AV04、AV99、AW02、AW04	1.0～1.5	0.76～1.1	6ヶ所、明治層～弥生層？	
79		13		配管設置	AV03～AW03	2	0.95	弥生時代層まで、古墳前期：遺構･遺物	
80		18	環境理工学部校舎新営予定地電柱移設		AW03	2	－	黒色土まで	
81		25	附属図書館新営雨水桝･外構工事		AV13	1.3	1	造成土以下に青灰色･黄褐色･灰褐色粘質土	
82	1997	16	南北道路ガス管埋設		BB13～BH13	1.5	－	中世層まで	50
83		19			AW11～BA13				
84		24	福利厚生施設新営に伴う共同溝新設		BC12	2	0.8	GL-1.65mで黒色土、古代～近世の溝	
94	1998	15	外灯設置		BA09	1.47	1	GL-1.42mで黒色土	53
95		22	コラボレーション･センター支障配管布設替		AZ09、BA09	1.4	1	GL-1.4mで黒色土	
96		24	南福利外灯設置		BB12、BC12	1.4	0.95	中世層まで	
97		31	環境理工学部校舎新営に伴うガス管埋設		AW03･AX～AY03～06	1.2～1.4	0.65～0.95	中世層まで（12ヶ所）	
98		34	学生会館改修に伴うトラップ桝撤去		BC10	2.2	1.45	GL-1.7mまで灰褐色粘土、GL-2.2mまで灰色粘土	
99		35	NTT電柱移設		BA00	1.5	0.9	造成土以下に褐色系粘質土	
100		41	環境理工学部実験排水管埋設		AX03～AY07	1～2.4	0.6～1.4	10ヶ所、5地点で中世層、2地点で古代層、1地点で古墳時代層まで	
101		42	馬場移設に伴う樹木移植		AU02	2.2	1.1～1.3	GL-2mで弥生後期層、GL-2.2mで縄文基盤層	
102		44	環境理工学部校舎新営	生活排水桝設置	AV03、AW03	1.97	1.4	古墳時代層まで、須恵器･土師器	
103		48		ガス管埋設	AW03	1.45	1	中世層まで	
107	1999	8	外灯設置		AY00、AZ01･03	1.15～1.35	0.5～1.2	3ヶ所で黒色土（GL-0.85～1m）	56
108		12	コラボレーション･センター新営：ハンドホール設置		AZ08･09	1.48～2.1	1.03～1.16	2ヶ所、その1ヶ所は古墳時代層まで	
109		13	環境理工学部校舎新営に伴うスロープ設置		AW02	3.5	1.2	調査面積25㎡、黒色土下面まで、近代土坑、古代溝、縄文後期ピット	
110		42	コラボレーション･センター新営に伴う排水桝設置		AZ09	1.0～1.2	0.8～1.0	6ヶ所、1ヶ所で黒色土対応層まで	
116	2000	17	津島地区電柱設置		BA12	1.6	1	造成土下に灰色粘質土･暗茶褐色粘質土層	61
117		23	理学部校舎改修	本館基礎補強	AY09	1.3	0.9	造成土下に暗青灰色粘質土･褐色粘質土･灰色粘質土	
118		28		機械設備電気	AX10、AY10	0.85～1.60	0.8～1.6	南側ハンドホール：GL-1.6mまで・GL-1.52mで中世溝（方向は南東－北西）	
119		42	精密応用化学科棟都市ガス改修		AW08、AX08	1.6～2.05	1.45	GL-1.82mで明灰褐色粘土（中世?）	
120		44	文法経 総合研究棟仮設電柱設置		BA16	1.5～1.7	1	GL-1.4mで中世層？軍庭園の築山･土塁一部掘削	
122	2001	4	理学部校舎改修：電気設備	ハンドホール	AZ10	1.6	1.0～1.2	中世溝	66
123		11	本部棟新営	電柱	BB～BC16	1.5～2.1	1.2～1.4	2ヶ所、GL-1.4mで灰色粘土、GL-2.1mまで谷か？	
124		27		車庫移設	BB･BC13	0.5～1.6	1	2ヶ所、中世層まで	
125		30		樹木移植	BB14	1.6	0.65～0.8	GL-1.4mに灰色粘質土層（古代）	
126		31	旧変電室基礎解体		BB14	1.05	0.45～0.75	12ヶ所掘削、中世層まで	
130	2002	29	農学部校舎改修：電気設備		BE15	1.8	1.5	3ヶ所、古代･古墳層まで	71
131		34	本部棟新設	排水桝･管路	BC13～15	1.2～2.5	0.7～1.2	突帯文土器･石器多数、近世溝、弥生溝	
132		51		雨水排水桝･管路	BB13	1.57	0.8	中世･古代･古墳層	
133		54		外灯	BB13･BD14	0.95～1.9	0.8	2ヶ所で中世層と古代層まで、GL-1.3mで黒色土	
134		55	一般教育棟Ｂ棟外灯設置工事		BC07･09	1.0～1.26	0.95	4ヶ所、中世層まで	
135		57	創立五十周年記念館新営	汚水排水	BB～BC14～15	1.0～2.3	0.85～1.0	一部黒色土上面まで	
136	2003	1	創立五十周年記念館新営	雨水排水桝･管埋設	BB13～15	1.3	0.7～0.8	中世層まで	74
137		4	総合研究棟新営機械設備ガス配管埋設		AX06	1.4	0.9	古代層？まで	
138		6	旧事務局庁舎改修電気設備工事		BC15	2.43	0.85	GL-1.9mで黒色土、GL-2.1mで縄文基盤層	
139		7	農学部総合研究棟改修電気設備工事		BB、BC18	1.7	0.7	GL-1.2m前後で黒色土層、GL-1.5～1.6m前後で縄文後期基盤層	
140		8	総合研究棟新営その他工事	雨水排水	AX06～BA06	1.7	0.7～0.8	標高3.3～3.4mで黒色土、弥生～古代：東西溝多数、近世･近代：東西溝･畦畔	
141		14		電気設備工事（外灯）	AW、AX06、07	1.4	－	中世層まで	
142		15	総合研究棟新営その他工事：排水		AW～AX06～07	0.5～2.5	1.6	桝で一部縄文基盤層まで掘削、弥生溝	
143		17	旧事務局庁舎改修：外部給水･消火配管		BC～BD15	2.75	1.1	桝で縄文基盤層	
144		21-1	公共下水桝接続工事	No.1区間農学部合併処理槽	BG～BH13	1.8	0.9	縄文基盤層まで	
145		21-2		No.2区間体育館東～武道場西	BE～BG10	1.95～2.25	0.8～0.9	桝で縄文基盤層、管路で弥生早･前期まで、弥生溝、縄文土坑	
146		21-4		No.4区間文･法･経2号館西	AZ16	2.45	1.5	縄文基盤層まで、弥生溝	
147		21-5		No.5区間理学部	BA10	1.9	0.7	中世頃の座主川を確認	
148		21-6		No.6区間農学部4号館東	BG22	1.5～1.9	0.9～1.4	縄文基盤層まで、弥生～古墳初頭：ピット、近代畦畔状遺構	
149		21-7		No.7区間津島宿泊所	BI16	1.15～1.3	0.8	中世層まで	
150		21-8		No.8区間南宿舎	BI15	2.0～2.45	1.1	縄文基盤層まで	
151	2004	1	公共下水桝接続工事	留学生等宿泊施設	BB～BD26	1.22～1.68	1.0	中世層まで	81
152		6	津島キャンパス環境整備：留学生センター西		BB9･10	0.5～1.15	0.4～0.6	弥生後期：包含層･遺構、礫層	

総合番号	年度	番号	工事名称／細目		構内座標	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　要	文献
153	2005	3	総合研究棟改修	仮設電柱	AV08	1.5	0.9	青灰～白灰色の粘質土、黒色土は確認されず	83
154		5		アース板	AW09	1.8	－	縄文基盤層まで、黒色土	
155		9	キャンパス環境整備（門扉改修等）		BE02、BG07	1.0～1.3	0.7	-1mで中世層、近世畦畔	
156		13	プール改修（排水管改修）工事		BC～BE03、BB･BC02	0.75～2.4	0.8～1.3	縄文基盤層まで、黒色土、弥生～古墳：溝多数、近世土坑、近代：大畦畔･溝	
157		14	サッカー場防球ネット設置工事		BB･BC04	2.0～2.2	－	オーガーによる掘削、一部で黒色土	
158	2006	2	総合研究棟改修工事：耐震工事に伴う支障物撤去･PC耐震柱基礎掘削		AX10	1.4～1.6	1.0	中世層まで、近世：南北方向の溝	88
159		3	教育学部公共下水桝接続工事		AZ～BA02～04	1.3～2.3	0.7～1.0	桝：深さ2.3m、配管：深さ1.05～1.92m、黒色土or基盤層まで、東西方向の溝	
160		5	プール改修配管接続工事		BA･BB02、BC02	1.7	0.7～0.8	黒色土層or基盤層まで、古墳時代頃の溝状遺構	88
161		11	総合研究棟：耐震工事に伴うPC耐震柱基礎掘削		AX08～09	1.8	－	古墳～弥生時代層	
162		13	農学部2号館南電柱移設		BF16	2.0	－	中世層まで	
164	2007	4	公共下水道接続工事（理学部他）		BA12	2.0	0.8～0.9	GL-1.6mで黒色土、弥生時代溝	92
165		8	総合研究棟改修	外灯基礎及び管路	AV･AX07･08	1.4～1.7	1.2	近世～中世層	
166		10		外構桝･配管（東半部）	AW07･08	1.1～1.4	0.9	近世層、土坑1基	
167		13	インキュベーション施設外構配管		BA～BC20	1.2～1.4	0.6～0.8	縄文時代～近代層、中世･近代の溝	
169	2008	7	理学部ヘリウム液化装置基礎工事：基礎杭設置		AZ09	4	－	黒色土なし、GL-4m以下で礫層	95
170		21	総合研究棟（教育系）改修	電気工事：建柱	AY03･AZ03･BA03	2	－	3地点掘削、北地点で黒色土無し	
171		22		電気工事：接地極埋設	AY04	1.7～1.78	－	古代層下に溝or河道の砂層	
172		26		機械工事：都市ガス	AZ03	1.2	－	GL-0.95mで黒色土	
173		28	KDDI無線基地局新設工事：建柱		BB12	1.8	0.8～1.05	灰褐色砂質土層まで、黒色土未確認	
174		32	プール系統水道メーターボックス取設工事		BB04	0.9～1.5	－	中世層（？）まで	
175		33	南宿舎電柱設置工事		BJ17	2	－	GL-1.2～1.5mで黒色土	
176		39	大学生協東福利施設新築	ガス管	AX04	0.85～1.21	1	中世層まで	
177		40		外灯移設	AX05	1.1～1.2	0.68～0.95	2地点掘削、古代層まで	
178		42	新技術センター公共下水道接続工事		AW00～01	0.85～1.75	0.7	中世～近代溝4条（南北里境か）、黒色土上面まで	
179		43	教育学部体育館他改修	動物室	AY01	0.85	0.85	黒色土上面で弥生～古墳時代の水田畦畔	
180		44		仮電柱設置	AY03、BA03	1.2～1.7	－	2地点掘削、北：中世層まで、南：東西溝	
181		49		接地極埋設	AY02	0.3～1.7	－	古代層まで	
182		52	大学会館他改修工事：一般教育講義棟ガス設備		BB10～11	0.7～1.2	0.55	GL-1.0m以下で礫層、土坑1基、溝？1条	
183		53	工学部屋外ガス配管改修工事		AV04～06、AW04	0.8～1.48	0.8～1.1	一部で中世層まで	
187	2009	6	総合教育棟（共通教育）改修工事：高圧ケーブル		BE～BF04～08	1.3	－	2ヶ所、中世層・近世層まで	102
188		14	環境整備（施設誘導案内板）新設工事		BB10	0.8～0.95	0.6	保健管理センター北東で弥生？遺構埋土	
189		16	工学部21号館（動物飼育室）改修	ガス管	AU06	0.8～0.9	－	一部弥生？包含層	
		17		排水管	AU06･07	0.65～0.9 2.2	1.25	北東部で河道	
190		21①	南北道路信号機付け替え	西門南東	BB12	1.8	0.58～1.25	中世～弥生層まで、底面で黒色土	
		22		西門北東	BA12	2.0		縄文層まで、黒色土確認	
		23		西門北西	BA13	2.05		縄文層まで、黒色土確認	
		24		事務局前北東	BD12	1.95		縄文層まで	
191		25	総合研究棟Ⅱ期（教育系）改修	ガス管	AY-AZ02-03	0.8	－	弥生層確認	
		27		電気設備：アース埋設	AY01･AZ03	1.65	0.4	縄文層まで、黒色土･中世以前の遺構	
				電気設備：配管		0.8		弥生包含層･遺構	
				電気設備：外灯		0.8～1.3		黒色土まで	
		29		屋外排水	AY02-03	1.15	1	黒色土･弥生遺構	
		30		屋外排水：管路	AZ00-02	管路 0.8～0.9	0.7	包含層･畦畔･小溝	
				屋外排水：桝		桝1.2･1.7		縄文層まで、北：黒色土、南：黒色土無し	
		32		電気設備：アース埋設	AZ00･AY-AZ01	1.7	0.6	縄文層まで、黒色土	
				電気設備：配管		0.8～0.9		包含層･土師器小片	
				電気設備：外灯		1.3		既設土内	
192		42	文法経ボイラー用煙突撤去工事		AX16	2.5	1.5	縄文層まで、弥生中･後期溝1条	
193		48	総合研究棟（薬学系）改修	電気設備：配管	BB16･BC17	1.45	1.05	近世層、近代溝	
				電気設備：アース板		1.50～1.54		包含層（中世？）	
194		54	環境理工学部公共下水道接続工事		AU03	2.3 2.4	0.9	弥生～古墳層まで、近代東西畦畔1条 黒色土上面まで	
195		55	薬学部西水道管位置確認工事		BC18	2.7	0.55	<岡山市教育委員会対応> 縄文層まで、黒色土	
200	2010	8	外灯整備工事	教育学部	AZ06	1.1	0.7	黒色土	105
201		17		創立五十周年記念館	BB14･15	1.1～1.6	1.15	近世層、近代石組用水路	
202		23	総合研究棟（薬学系）に伴う支障管移設	生活排水･実験排水	BB･BC17	0.87～1.4	0.8	古代層	
203		26	テニスコート陥没復旧工事		BG11	1.9	－	既設内、砲弾他<岡山西署回収>	
204		34	薬学部本館改修工事	電気設備：管路	BC･BD18	0.7～1.28	1.1	中世層	
				電気設備：ハンドホール		2		縄文時代層、近世･近代：里境溝	
205		35		外灯設置：管路	BB17	0.63～0.74	0.85	近世･近代層	
				外灯設置：基礎		1.08～1.34		中世層	
206		36	農学部水道管復旧工事（緊急対応）		BF15	1.1	－	既設内	
207		37	国際交流会館	排水桝掘削工事	AU･AV13･14	2.2～2.5	－	4ヶ所、中世上面から0.55m掘削、弥生後期層	

総合番号	年度	番号	工事名称／細目		構内座標	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　要	文献
209	2011	1	文法経フェンス工事		AW17、AX17、AY17、AZ16	1.1～2.0	1.0～1.6	近代の土塁、水路	106
					AZ17	0.8	－	門跡・陸軍建物基礎	
210		8	津島線配水管布設工事		BA10	1.3	0.6	中世層まで、近世・近代溝確認	
211		9			BA08	1.5	0.6	中世層まで、近代畦畔・溝	
212		12	教育学部講義棟トイレ改修工事<屋外排水>		AZ04	0.9～1.5	0.55	古代・近世・近代遺構	
214	2012	9	美しい学都整備	防球ネットポール	BB06～07	3.0	1.0	基盤層まで	111
215		11	農学部周辺排水管整備	桝・管路	BE～BF13	1.6	1.0～1.3	基盤層まで	
218	2013	5c	総合研究棟改修（工学系）	設置路線③	AV05	0.9	－	近代の雨落ち溝	116
219		5d		設置路線④		0.75	－	近代の東西方向石組溝	
220		6a		接地銅板①		1.65	0.85	縄文層確認	
221		6b		接地銅板②					
222		8		電気設備：管路	AW05	0.8	－	近代の東西方向石組溝	
223		16	NTT電柱引き込み	電柱	BB15	1.6	－	旧陸軍東西放方向水路	
224		19b	大学会館周辺他環境整備	暖房ピット②	BC10	1.05～1.10	0.5	中世層、近世南北方向溝	
225		21a		東西道路南側外灯①	BB08	1.0	0.55	弥生層確認	
226		21b		東西道路南側外灯②	BB09	1.1	－	旧陸軍東西放水路	
227		21c		東西道路南側外灯③		1.3	－		
228		21d		東西道路南側外灯④	BB11	1.4	0.3	礫層確認	
229		21e		東西道路南側外灯⑤		1.5	0.95	中世層、近世東西方向溝	
230		21f		東西道路南側外灯⑥	BB12	1.4	0.85	中世層、近世東西方向水路	
231		21g		東西道路南側外灯⑦		1.1	0.7	近世層、近世東西方向溝	
232		22a		集水桝①	BB10	1.4	0.6	礫層確認	
233		22b		集水桝②	BB11	1.4	0.9	中世層、近世東西方向溝	
234		23b		東西道路南側樹木植穴②～④	BB10･11	0.6～0.7	－	旧陸軍東西方向水路	
235		24		自由勾配側溝①	BB09～12	0.8	0.6	近世層、近世南北方向の段・溝、近代南北方向溝	
236		25		重圧管管路	BB10･11	1.0～1.1	－	旧陸軍東西方向水路	
237		26a		ガス管管路1-①	BB10	1.0	－	旧陸軍東西方向水路2条	
238		26b		ガス管管路1-②		1.2	0.55	礫層、近世土壙、近代南北方向溝	
239		28a		さくら広場外灯①	BB10	1.4	0.5	弥生前期層確認	
240		28b		さくら広場外灯②	BC10	1.1	0.45～0.55	古墳時代前期層、古墳時代後期土坑（焼土◎）、近世土坑	
241		30		ガス管②	BB10･BC10	0.75～1.4	0.85	近世層、近世土坑、近世～近代東西方向溝	
242		31		パーゴラ電気設備	BC11	1.5	0.75	礫層、弥生時代ピット、戦国時代南北方向溝	
243		35a	ガス漏れ修理		AZ03	1.1	0.5	弥生時代前期黒色土確認	

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合番号	年度	番号	工事名称／細目		構内座標	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　要	文献
3	1983	－	外来診療棟蒸気配管埋設		AO～AW22	1.3	－	弥生後期：土器･分銅形土製品、貝集積	1
7	1985	6	外来診療棟関係屋外排水管埋設		AW～BH23、BH･BI24	1.3～1.7	0.7～1.3	中世･弥生：遺構･遺物	5
8		12	基幹環境整備緑化工事：電気配線ハンドホール掘削		AG31、AG24、AF23	1.2～1.7	0.9～1.3	3ヶ所、中世包含層･ピット	
9	1986	9	記念館東側汚水管改修工事		BI～BN4	0.8～1.3	0.8	中世包含層、土器	6
11		24	護岸及び囲障工事		CL～CR12、CR～CX13、CX～DA14	2	0.8～1.0	中世包含層	
14	1987	8	管理棟新営に伴う基礎杭確認		BC37	2.5		弥生時代：包含層･遺構	8
15	1989	46	旧管理棟跡地環境整備：外灯基礎		CE30･37･44、CJ･CK45、CL28･29	1.2～1.5	0.7～1.0	2ヶ所、中世層	14
18	1992	29	アイソトープセンターL形側溝･集水枡		BW71	1.4～1.5	0.9	中世溝1条	25
19		41	テニスコート脇電柱埋設		CI73	1.2	1	古代土器1点	
20	1994	5	護岸改修工事		DH60～62	1.5	0.8	近世層以下は遺構埋土か、溝3条･ピット9基	33
21	1995	11	鹿田地区基幹整備	附属病院連絡通路新設	BG･BI18	1.5	1	造成土以下に茶褐色土･青灰色粘質土層、遺物なし	38
22		14		液酸タンク設置	CD07･08	2.3	1	中世2面、溝3条、溝内から中世･古代土師器	
23		17		液酸タンクU字溝埋設	CD08～CC11	1.23	0.85	包含層、中世土器、攪乱で区間全長の1/2程度破壊	
24		23	防球ネット取設工事		DF56～67	3	0.8	径60cmを12ヶ所、内4ヶ所で土器片･石器、調査区西寄り：GL-2m以下は旧河道か	
30	1998	36	校舎新営に伴う仮設電柱工事		BV73、CN78	1.2	1	中世層まで	53
33	1999	15	研究棟新営	給排水桝･管路	BV65～71	1.2～1.4	0.9	中世層まで	56
34		18		検水槽	BU65	2.2	1.1	面積8.2㎡、近世溝、中世：溝･ピット	
35		27	基幹整備（電気設備）：地中配管		BY42･43、BI43･44	1.25～1.45	0.45～0.5	2ヶ所、中世層まで、時期不明遺構	
36		41	病棟新営	共同溝解体	CF21～28、CF～CL28、CD～CF28～33	1.7	－	面積18㎡、鹿田11次調査南側で中世ピット	
37		46		汚水桝･管路	CN46～DE49	2.3	1.2	古墳時代：井戸1基･土坑1基、中世溝等	

総合番号	年度	番号	工事名称／細目		構内座標	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　要	文献
38	1999	47	グラウンド防球ネットポール		CM·CN·CP·CR·CT58、CV·DA·DC·DD·DF59	2.0～2.3	－	11ヶ所、南側6ヶ所：河道、7～10ヶ所：微高地、最北端：河道	56
39		48	病棟新営	汚水検水桝	BT51	2	1	古墳時代層まで	
41	2000	25	病棟新営	管路·雨水桝	CD41～CN45	1.6～1.8	－	溝か？	61
42		26	電柱及び外灯の埋設工事		CN15·21·27、CO31·42、CS45、DV45	1.6	－	7ヶ所、灰白色土層·淡褐色砂質土層·暗褐色砂質土層、微高地部か	
43		29	医学部ガス配管切り離し用バルブ取付工事		DI27	0.8～1.15	0.7	GL-0.85mで黄灰色粘質土	
44		47	鹿田団地南側用水路境界擁壁改修		DG～DJ28～67	2.1～2.3	1.3～1.5	幅120mの壁面調査、古代の遺構·河道	
45	2001	37	総合教育研究棟新営に伴う機械設置工事		BR～CA43、CA43～55、CA44～CL45、BR～CA55	1.65	0.7～0.9	中世層まで、中世土器多数出土地点あり	66
47	2002	10	鹿田団地ガス配管埋設工事		CH11～CN22	1.0～1.3	0.87	中世層まで	71
48		19			BT·BU11	0.5～1.8	－	2ヶ所、GL-1.22mで中世or古代層	
49		22	エネルギーセンター棟新営	共同溝排水管	CQ41～42	1.5	－	1ヶ所、包含層まで	
50		25		外灯	CG41、CO34、CF43、CO38	1.47～1.66	－	4ヶ所、中世層まで	
51		27		外溝	CV36～45	0.9～1.9	0.9	中世：井戸·柱穴·溝	
52		36	総合教育研究棟新営その他工事		BI～BS45～53	1.85～2.0	0.8～1.0	5ヶ所、中世層まで	
53		52	本部棟新営その他工事：植栽移植		DC67	1.25	－	中世層	
54		56	旧混合病棟グリーストラップ改修		BG18	1.68	－	底面で弥生～古墳層、土器	
55	2003	5	総合教育研究棟	屋外排水	BS～BZ45、CA～CO46、CO45	1.7	0.7～1.0	弥生中期?包含層まで、近世土坑、中世ピット多数、低地部確認	74
56		9		外構工事　（雨水·汚水·実験排水	BL～BS45～53	0.8～1.75	0.7～0.9	一部弥生中期包含層まで、古墳時代溝、中世井戸、近世土坑等	
57		10		給水配管埋設	BR～BS50～54	1.33	0.8	一部で中世層まで	
58		13		外構工事（外灯）	BR53、BL54	1.4	0.8	中世層まで	
60	2004	3	医病構内支障ガス管配管替工事		AF16、AF～AJ17、AJ9～16	1.0～1.9	0.7～0.8	接続部：近世·近代水田層、中世畦畔、弥生～古墳河道（砂層）	81
61		5	医病構内支障給水管配管替工事		AE4～16、AF～AI16　AI9～15、AJ～AO9	0.9～1.9	0.85	桝：中世?～近代畦畔、弥生～古墳河道（砂層）	
62	2005	3	医学部変電所ピット周辺高圧ケーブル設置工事		DH～DJ18、DJ19	1.1～2.5	0.7～1.1	一部で弥生～近代層	83
63	2006	6	エネルギーセンター棟新営に伴う工事		CT～CU45	2.5	0.9	鹿田第12次調査地点と重複	88
67	2007	4	基幹環境整備（道路等）工事		CC13～20、CD13～20	1.2～2.2	0.9～1.2	基盤層まで、中世：東西·南北溝	92
68		5	中診棟屋上防水改修その他工事		AS03～07、AV～AX07、AY·BB09	0.6～0.9 1.4、1.8	0.7	中世東西溝、古墳時代南北溝	
69		7	中央診療棟新営：ガス管切断工事		BT11	1.28	0.5	中世溝	
70		10	基幹整備（電気設備）工事		CO42、CV36	1.3～1.65	1.3	中世層まで、遺構	
71		11	環境整備（道路等）工事	ガス配管1	CG08、CF09·10、CG·CH1、CI11	0.85～1.3	0.9	中世：井戸（or墓）·ピット·溝	
72		17		ガス配管2	CL12、CM13、CN14·15	1.0～1.2	0.4	中世層、中世遺構	
73		27	総合研究棟（医学系）新営その他工事		BT·BU65	1.35	1	中世層	
74		28	用水路改修工事		CJ7～CP12	1.7～2.0	0.6～0.8	包含層及び枝川東側に微高地	
75		30	高エネルギー治療室改修工事		BE33	1.4	0.6～0.7	中世～近代：畦畔·溝、弥生後期土器	
77	2008	5	基幹整備（西病棟とりこわし他）工事	現場打ち排水桝	BT24～25	0.98～1.4	0.7	弥生基盤層まで	95
78		6		ライトコート工事	BQ24、BR24	0.75	0.5	湿地性堆積層	
79		7	基礎医学棟一部とりこわしに伴う支障ガス配管移設工事		AO53～54、AL54～AO54、AL54～61、AL62～AP65	0.76～1.0	0.5	近世層まで、土坑2基	
83	2009	3	鹿田遺跡第20Ａ次調査矢板打ち		CB30、CB40	0.8～0.9	0.7	中世層まで	102
90	2010	6	高精度放射線治療棟屋外排水管工事		BH32～35、BI～BL35	0.75～0.9	0.6	中～近世の遺構？	105
91		7	中央診療棟新営：アース極設置工事		BR14～16·19·22	0.9～1.8	1.1	包含層	
92		17	外灯整備工事：研究棟南駐車場		BY46～50	1.2	1.2	遺構埋土？	
93		22	保育所改修工事		CV～CY28·29	1.6	1.15	弥生基盤層まで	
95	2011	4	立体駐車場新営<配管>		CN45～49、CO～DF49、CW～DD44、DD45、DD～DF46、DF～DG47～49	0.7～2.38	0.55～1.0	弥生時代土坑、古代土坑、中世溝、近世土坑・溝・畦畔	106
98	2012	9	医歯薬融合棟支障配管	ポンプ槽（南）	BL～BM58	2.0	1.2	中世溝・土坑？、弥生基盤層まで	111
99		13	講義実習棟改修	検水槽	BU～BV66	1.6	1.1	中世以前（灰茶褐色砂質土）まで	
101	2013	3	医歯薬融合型教育研究拠点施設新営	浄化槽撤去	BM57·58	3.6	1.1	弥生基盤層以下まで	116
102		4		共同溝撤去	BE65	2.3	1.1	弥生基盤層まで	
103		5		ボイラー撤去	BH·BI66～68	3.9	1.1	弥生基盤層以下まで	
104		6		重油タンク撤去	BC67·68	3.5	1.1	弥生基盤層以下まで	
105		7		煙突撤去	BJ·BK69	4.9	1.1	弥生基盤層以下まで	
106		8		工事用電気引き込み	AV68	2.0	1.0	中世層（?）確認	
107		9a		排水配管（Ａ工区）	AD～AH66·67	2.45～2.68	1.2～1.65	古代河道、中世～近代層、近世溝	
108		9b		排水配管（Ｂ工区）	AI～AK67	2.2～2.45	1.6～1.65	古代河道、中世～近代層	
109		9c		排水配管（Ｃ工区）	AJ66·AK67·68·AL～AP67·68	1.8～2.66	1.35～1.7	古代河道、中世～近代層	

総合番号	年度	番号	工事名称／細目		構内座標	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　要	文献
110	2013	9d	医歯薬融合型教育研究拠点施設新営	排水配管（D工区）	AO～AT68	1.7～2.05	1.2～1.35	弥生時代後期包含層、弥生～古代砂層、古代河道、中世～近代層	116
111		9e		排水配管（E工区）	AS～AW68	1.45～1.9	0.7～0.75	弥生層、弥生ピット、弥生土器片出土、弥生～古代砂層、近代層	
112		9f		排水配管（F工区）	AU･AX～AZ68、AX･AZ～BB69	1.33～1.84	0.7～0.75	弥生層、弥生～古代砂層、中世～近代層	
113		9g		排水配管（G工区）	BC66～70、BD61･63･64、BE60～63	0.88～1.5	0.89～1.15	中世～近代層、近世土坑	
114		11	Ｊホール新営	給水管	AL53	1.5	0.8	中世？～近代層確認	
115		12		給排水管路	AL53～62、AK･AI62～67	0.65～1.85	1.3	中世～近代層確認	
116		19	臨床研究棟改修	電気配管（アース）3ヶ所	BJ･BK43	1.64～1.73	0.6～0.71	古墳？・中世・近世層確認	
117		26a	図書館・学生支援センター改修	排水配管（A工区）	AD40	2.0	1.3	中世層､近世土坑	
118		26b		排水配管（B工区）	AD･AE39･40	1.75	1.5	中世～近代層、河道？	
119		26c		排水配管（C工区）	AF40～42	1.52～1.63	1.06～1.2	中世～近代層確認	
120		30		給水・消火管	AU～AW40～42	1.4	0.8	中世？～近代層確認	
121		32a	中診Ⅱ期発掘調査に伴う支障物撤去	排水配管（A工区）	BZ～CC42、BX･BY43	1.1～1.45	0.85～1.0	中世～近代層、近世土坑・畦畔	
122		32c		排水配管（C工区）	BT35	2.3	1.1	中世～近代層、中世溝	

＜東山地区＞

総合番号	年度	番号	工事名称／細目	構内座標	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　要	文献
1	1983	－	附属中学校新営	－	4.0～5.0	－	シルト層中	1
2	1997	29	附属小･中学校他囲障改修工事	－	1.2	0.79	GL-1.1mで近世水田層、溝1条	50

＜三朝地区：福呂遺跡＞

総合番号	年度	番号	工事名称／細目	構内座標	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　要	文献
4	1997	18	実験研究棟新営に伴う電気埋設管路工事	－	1	－	GL-1.0mで中世包含層は東に向かい上昇	50

表11　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要（2015年３月現在）

種類	遺跡名（地区名）	調査名・地区名	箱　数（１箱：約30リットル）							特殊遺物ほか	文献
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	ｻﾝﾌﾟﾙ*		
発掘	鹿田	第１次調査：外来診療棟	546.5	503	6	20	0.5	1	16	丹塗り土師器・白磁・瓦器・木製短甲・人面線刻土器・ガラス滓・馬骨・等	7
		第２次調査：NMR-CT室	106.4	96	0.4	4.5	0.5	1	4	黒色土器・田舟・木簡・墨書土器・転用硯・円面硯等	
		第３次調査：医短校舎	58.6	36	0.3	18	0.3		4	石帯	10
		第４次調査：医短配管	4	2	0.3	0.5	0.2		1	古代土器・鹿角製品	
		第５次調査：管理棟	101.2	88	2.5	6	1.5	0.2	3	木器・炭化種子・牛頭骨・焼き印付き井戸枠	24
		第６次調査：RI総合センター	62	59	0.5	1	1.5			青銅製椀	40
		第７次調査：基礎医学棟	77.5	73	1	1.3	0.2	1	1	猿形木製品	85
		第８次調査：RI治療棟	10	10						備前焼椀・瓦器椀・播磨産椀	
		第９次調査：病棟	120.1	96	0.1	13		9	2	木簡3点	56
		第10次調査：共同溝	2	2						古代土器・杭	107
		第11次調査：病棟	74	66		4		2	2	木簡1点	56
		第12次調査：エネルギーセンター	147	77	1	54			15	近世漆塗り櫛、籠、須恵器壺	61
		第13次調査：総合教育研究棟	269	229	24	10			6	曲物	98
		第14次調査：病棟	66.2	55	1	2	0.2	1	7	木簡・瓦器椀	113
		第15次調査：総合教育研究棟	4	3					1	－	98
		第16次調査：立体駐車場	1	1						－	81
		第17次調査：総合研究棟	111.2	68	4	8	0.2	1	30	－	87
		第18次調査：中央診療棟（本体）	155.5	116	19	18	0.5		2	－	92
		第18次調査：中央診療棟（その他）	4	2					2	猫形木製品、近世護岸木材	107
		第19次調査：歯学部渡り廊下	225	145	1	4			75	壺棺、蹄脚硯、貝	95
		第20次調査（A･B地点）：中央診療棟	296	148	68	62		6	12	－	102
		第20次調査（C･D地点）：中央診療棟	86.1	55	16	7	1	0.1	7	－	105
		第21次調査：環境整備	10.1	4	1	3		0.1	2	陽物形木製品	105
		第22次調査：地域医療支援センター	175	146	3	25		1		－	106
		第23次調査：Jホール	33	30		1			2	－	111
		第24次調査：医歯薬融合棟	105	52	4	21			27	絵馬（猿駒曳・牛）	111
		第25次調査：中央診療棟Ⅱ期	85	52	3	4		5	21	烏帽子	116･本書
		第26次調査：動物実験施設	75	34	4	7		2	28	－	本書
	津島岡大	第１次調査：NP-1	5	0.5	0.5	4				－	3
		第２次調査：農学部合併処理槽他	15.5	12	1.5				2	突帯文土器・弥生前期土器	4
		第３次調査：男子学生寮	59	48	1.5	2	4.5		3	縄文後期土器・突帯文土器・石製指輪、蛇頭状土器片・鎌状石器・堅果類・種子	19

種類	遺跡名（地区名）	調査名・地区名	箱数（1箱：約30リットル）							特殊遺物ほか	文献
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	ｻﾝﾌﾟﾙ*		
発掘	津島岡大	第４次調査：屋内運動場	1	1						−	6
		第５次調査：大学院自然科学研究科棟	85	71	3	1	8		2	縄文後期：土器・耳栓・櫛・堅果類･種子	27
		第６次調査：生物応用工学科棟	53	36	1	9	6		1	古代土器・人形木器、編み物、弥生前期人形土製品・堅果類	35
		第７次調査：情報工学科棟	13.5	10	0.5	1			2	−	
		第８次調査：遺伝子実験施設	11.5	11	0.5					−	32
		第９次調査：生体機能応用工学科	42.5	35	2.5	3	2			堅果類・種子・縄文後期土器	47
		第10次調査：保健管理センター	86	78	1	7				分銅形土製品、鍛冶関連、器台	64
		第11次調査：総合情報処理センター	4.5	3	0.5				1	−	36
		第12次調査：図書館	60.2	38	1	20	0.2		1	弥生木製農耕具・鎧	64
		第13次調査：福利厚生施設北	12.5	12	0.5					−	41
		第14次調査：福利厚生施設南	12.2	11	0.2				1	−	46
		第15次調査：サテライトベンチャービジネスラボラトリー	38	15	2	20			1	縄文後期耳栓・編み物、堅果類	72
		第16次調査：動物実験棟	2.3	0.3					2	−	44
		第17次調査：環境理工学部校舎	74	63	11					縄文後期土器	77
		第18次調査：南福利ポンプ槽	0.2	0.2						−	53
		第19次調査：コラボレーションセンター	28	21	1	4		1	1	炉壁・鞴羽口	65
		第20次調査：環境理工学部ポンプ槽	0.2	0.2						−	53
		第21次調査：工学部エレベーター	7	5	2					縄文中期土器・横長削器	65
		第22次調査：環境理工学部校舎	33.9	26	4	3	0.2	0.2	0.5	古代堰部材	77
		第23次調査：総合研究棟	81	20	0.5	60	0.5			縄文後期杭、石棒	80
		第24次調査：総合研究棟渡り廊下	2.1	1	0.1	1				−	80
		第25次調査：農学部散水施設	0.3	0.1		0.2				−	61
		第26次調査：事務局本部棟	25	17	2	5			1		76
		第27次調査：創立五十周年記念館	18.2	14	1			0.2	3	縄文後期土器（中津）	68
		第28次調査：自然科学系総合研究棟	15.2	13	2			0.2		−	87
		第29次調査：農学部共同溝	1.1	1	0.1					−	71
		第30次調査：インキュベータ	23.3	5	0.1	18			0.2	−	93
		第31次調査：大学生協東エリア店舗	5.7	5	0.5			0.2		−	95
		第32次調査：教育学部剣道場	17	12	3				2	編み物	100
		第33次調査：薬学部講義棟	12.6	11	1.5			0.1		−	117
		第34次調査：国際交流会館	1	1						−	105
		第35次調査：図書館（増築）	1	1						−	116
	福呂	第１次調査：実験研究棟	7	6	1					縄文早期土器	55
		第２次調査：実験研究棟スロープ	3.1	3				0.1			55
試堀確認	鹿田	鹿田駐車場（1985）	1	1						−	5
		鹿田アイソトープ総合センター（1990）	1	1						−	18
		地域医療総合支援センター（2010）	1	1						−	105
	津島岡大	男子学生寮（1985）	1	0.7	0.3					−	5
		大学院自然科学研究科棟（1986）	1	1						−	6
		理学部身障者用エレベーター（1987）	0.3	0.3						−	8
		教養部身障者用エレベーター（1987）	0.7	0.7						−	8
		工学部校舎（1988）	1	1						−	11
		動物実験飼育棟・遺伝子実験棟（1988）	0.7	0.7						−	11
		国際交流会館（1988）	0.3	0.3						−	11
		大学院自然科学科合併処理槽（1989）	0.2	0.2						−	14
		学生合宿所（1989）	0.4	0.2					0.2	−	14
		教育学部身障者用エレベーター（1989）	0.3	0.3						−	14
		図書館（1989）	1	1						−	14
		学生合宿所ポンプ槽（1990）	0.4	0.4						−	18
		福利厚生施設（1990）	0.5	0.5						−	18
		農･薬学部動物実験施設（1993）	0.1	0.1						−	33
		環境理工学部校舎（1995）	0.1	0.1						−	53
		システム工学科棟（1998）	0.1	0.1						−	53
		正課外活動施設（2012）	2	0					2		111
	（土生）	外国人宿舎（1987）	1	1						−	8
	（倉敷）	資源生物科学研究所（1990）	0.1	0.1						−	18
	（東山）	附属小学校校舎（2006）	1.1	0.1					1	−	87
		附属中学校体育館（2013）	1	0					1		116
立会		1983年度	2	2						分銅形土製品	1
		1984年度	1	1						−	2
		1985年度	1	1						−	3
		1986年度	0.5	0.5						−	6
		1987年度	0.5	0.5						−	8
		1991年度・1992年度	0.3	0.3						−	21.25
		1993年度～1999年度	0.8	0.8						−	30.33.38.44.50.53.56
		2000年度	3	3						−	61
		2002年度	8.5	2.5	6					弥生早期土器、中世、礎石	71

種類	遺跡名（地区名）	調査名・地区名	箱　数（1箱：約30リットル）							特殊遺物ほか	文献
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	ｻﾝﾌﾟﾙ*		
立　会		2003年度	2	2						－	74
		2004年度	1	1						－	81
		2005年度	1.1	0.1					1	－	83
		2006年度	1.1	0.1					1	－	87
		2007年度	0.5	0.5						－	92
		2008年度	1	1						－	95
		2009年度	0.2	0.2						－	102
		2010年度	4.2	0.2				4		近現代、陸軍関連金属器、電線	105
		2011年度	3	3						弥生後期土器	106
		2012年度	0.5	0.5							111
		2013年度	1.5	1.5							116
		2014年度	0.6	0.1					0.5	貝サンプル	本書
分布調査		1989年度 三朝･本島	0.3	0.3						－	14
合　計			3,920	2,889	212	453	28	36	300		

表12　埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名　称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報１　1983年度	1985年２月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報２　1984年度	1985年３月
3	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第１集	1985年５月
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅱ（農学部構内BH13区他）岡山大学構内遺跡発掘調査報告第２冊	1986年３月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報３　1985年度	1987年３月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報４　1986年度	1987年10月

表13　埋蔵文化財調査研究センター刊行物（2015年３月まで）

番号	名　称	発行年月日
7	鹿田遺跡Ⅰ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第３冊　（鹿田遺跡第１次・２次調査）	1988年３月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報５　1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第１号	1988年10月
10	鹿田遺跡Ⅱ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第４冊　（鹿田遺跡第３次・４次調査）	1990年３月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報６　1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第２号	1989年８月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第３号	1990年２月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報７　1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第４号	1990年７月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第５号	1991年３月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第６号	1991年８月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報８　1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡３　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第５冊　（津島岡大遺跡第３次調査）	1992年３月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第７号	1992年３月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報９　1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第８号	1992年８月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第９号	1993年３月
24	鹿田遺跡３　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第６冊　（鹿田遺跡第５次調査）	1993年３月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報 10　1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第10号	1993年11月
27	津島岡大遺跡４　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第７冊　（津島岡大遺跡第５次調査）	1994年３月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第11号	1994年３月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第12号	1994年10月
30	岡山大学構内遺跡調査研究年報 11　1993年度	1995年２月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第13号	1995年３月
32	津島岡大遺跡５　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第８冊　（津島岡大遺跡第８次調査）	1995年３月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報 12　1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡６　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第９冊　（津島岡大遺跡第６次・７次調査）	1995年12月
36	津島岡大遺跡７　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第10冊　（津島岡大遺跡第11次調査）	1996年２月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第15号	1996年３月

番号	名　　称	発行年月日
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報 13　1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第16号	1996年10月
40	鹿田遺跡４　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊　（鹿田遺跡第６次調査）	1997年３月
41	津島岡大遺跡８　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第12冊　（津島岡大遺跡第13次調査）	1997年３月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第17号	1997年３月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第18号	1997年９月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報 14　1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代　岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡９　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第13冊　（津島岡大遺跡第14次調査）	1997年12月
47	津島岡大遺跡10　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊　（津島岡大遺跡第９次調査）	1998年３月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第19号	1998年３月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報 15　1997年度	1999年１月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第21号	1999年３月
52	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第22号	1999年９月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報　16　1998年度	2000年１月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第23号	2000年３月
55	福呂遺跡Ⅰ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第15冊　（福呂遺跡第１次・２次調査）	2000年３月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報　17　1999年度	2000年８月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第24号	2000年９月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第25号	2001年３月
60	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第26号	2001年８月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報　18　2000年度	2001年10月
62	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第27号	2002年３月
63	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第28号	2002年９月
64	津島岡大遺跡11　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊　（津島岡大遺跡第10次・12次調査）	2003年３月
65	津島岡大遺跡12　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊　（津島岡大遺跡第19次・21次調査）	2003年３月
66	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2001	2003年３月
67	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第29号	2003年３月
68	津島岡大遺跡13　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18冊　（津島岡大遺跡第27次調査）	2003年５月
69	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第30号	2003年８月
70	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第31号	2004年２月
71	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2002	2004年３月
72	津島岡大遺跡14　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊　（津島岡大遺跡第15次調査）	2004年３月
73	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第32号	2004年９月
74	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2003	2004年12月
75	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第33号	2005年３月
76	津島岡大遺跡15　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第20冊　（津島岡大遺跡第26次調査）	2005年３月
77	津島岡大遺跡16　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊　（津島岡大遺跡第17次・22次調査）	2005年３月
78	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第34号	2005年10月
79	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第35号	2006年３月
80	津島岡大遺跡17　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊　（津島岡大遺跡第23次・24次調査）	2006年３月
81	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2004	2006年３月
82	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第36号	2006年10月
83	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2005	2007年３月
84	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第37号	2007年３月
85	鹿田遺跡５　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊　（鹿田遺跡第７次・８次調査）	2007年３月
86	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第38号	2007年10月
87	津島岡大遺跡18　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第24冊　（津島岡大遺跡第28次調査）	2008年３月
88	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2006	2008年３月
89	岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年　－自然と人間、地中に埋もれた命の対話－	2008年３月
90	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第39号	2008年３月
91	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第40号	2008年９月
92	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2007	2008年12月

番号	名　　称	発行年月日
93	津島岡大遺跡19　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第25冊　（津島岡大遺跡第30次調査）	2009年３月
94	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第41号	2009年３月
95	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2008	2010年２月
96	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第42号	2010年２月
97	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第43号	2010年３月
98	鹿田遺跡６　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊　（鹿田遺跡第13次・15次調査）	2010年８月
99	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第44号	2010年12月
100	津島岡大遺跡20　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第27冊　（津島岡大遺跡第32次調査）	2011年３月
101	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第45号	2011年３月
102	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2009	2011年３月
103	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第46号	2012年11月
104	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第47号	2012年３月
105	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2010	2012年３月
106	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2011	2013年１月
107	鹿田遺跡７　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第28冊　（鹿田遺跡第10次、18次調査B・C地点）	2013年３月
108	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第48号	2012年９月
109	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第49号	2013年３月
110	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第50号	2013年10月
111	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2012	2013年12月
112	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第51号	2013年12月
113	鹿田遺跡８　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊　（鹿田遺跡第14次調査）	2014年３月
114	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第52号	2014年12月
115	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第53号	2015年３月
116	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2013	2015年３月
117	津島岡大遺跡21　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第30冊　（津島岡大遺跡第33次調査）	2015年３月

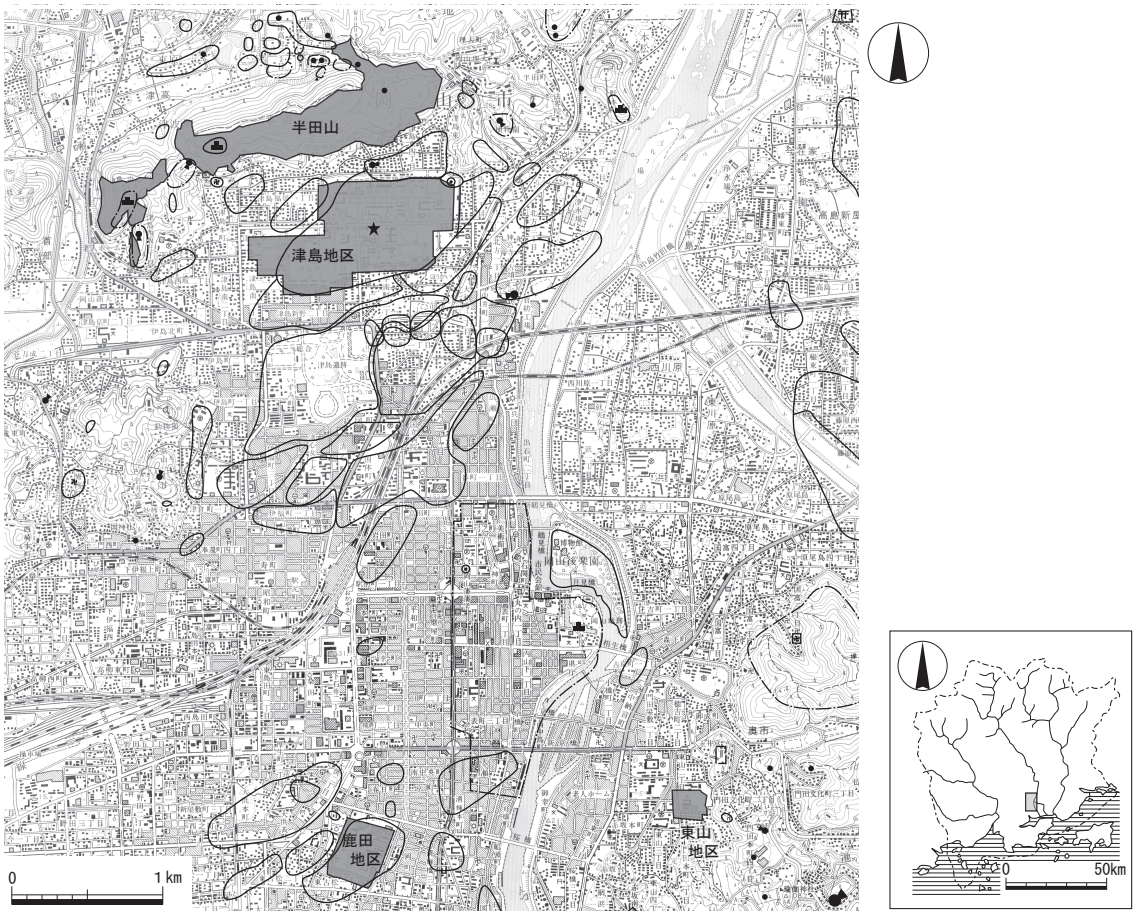


図51　岡山大学の位置と周辺の遺跡分布（縮尺1/50,000・1/3,750,000）

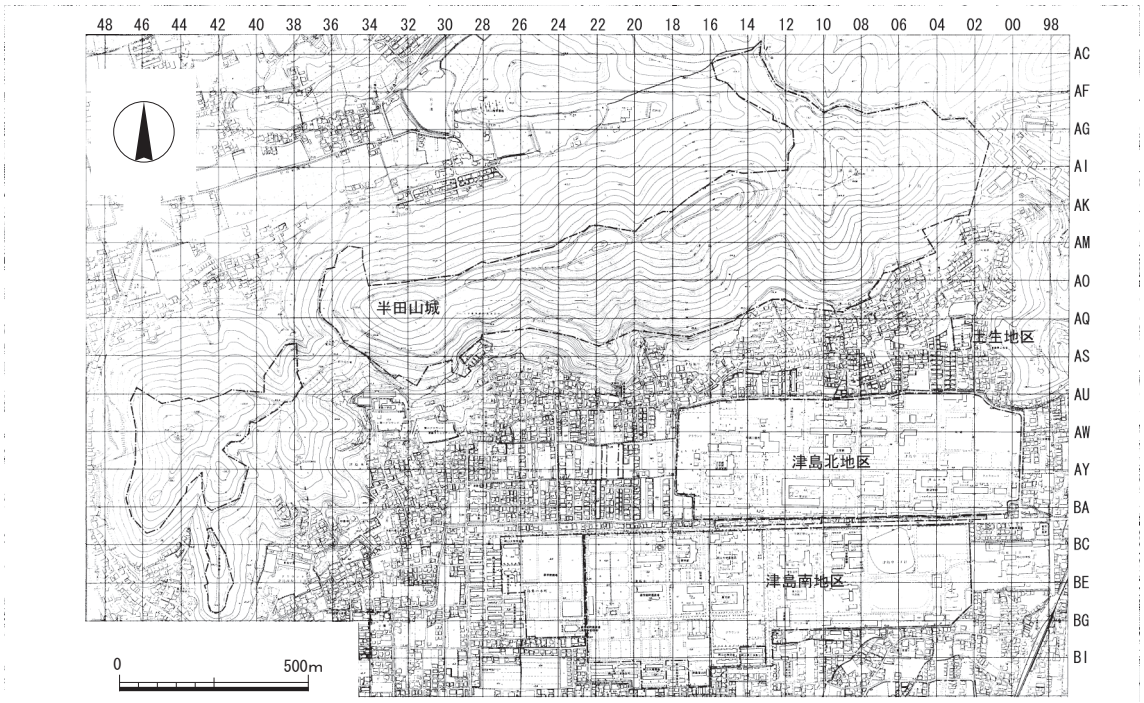


図52　津島地区全体図（縮尺1/20,000）

※番号は表 10 の総合番号に対応する。

図54　2013年度以前の調査地点【2】－鹿田地区－（縮尺1/2,500）

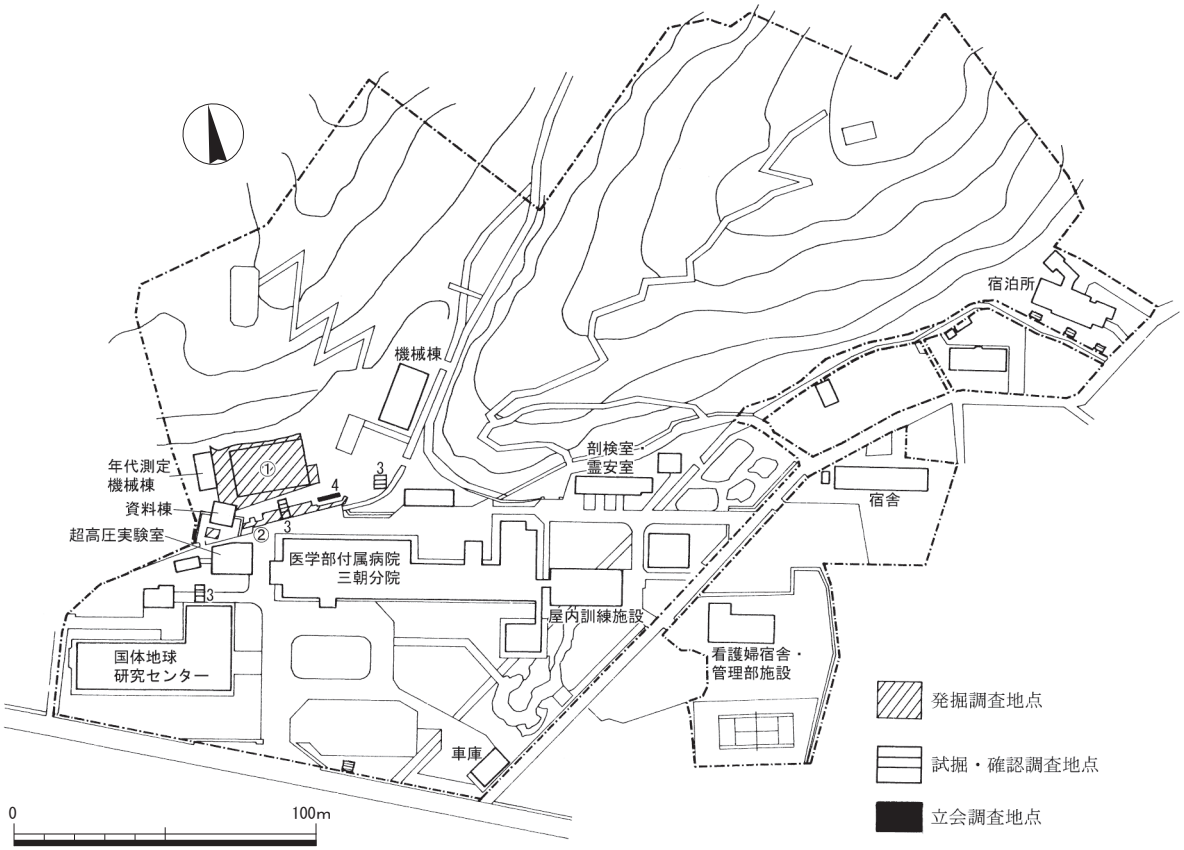


図55　2013年度以前の調査地点【3】
－三朝地区－（縮尺1/2,500）

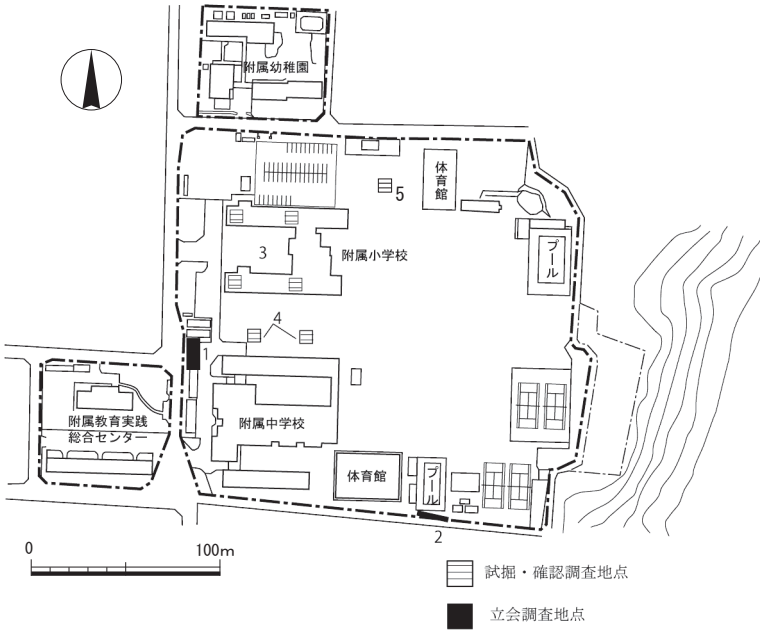


図56　2013年度以前の調査地点【4】
－東山地区－（縮尺1/4,000）

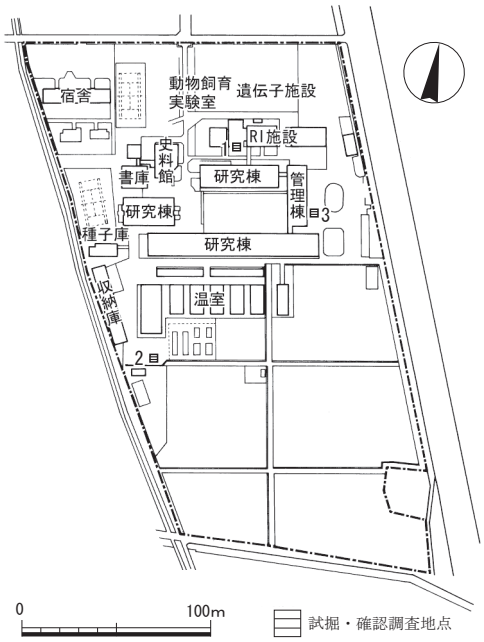


図57　2013年度以前の調査地点【5】
－倉敷地区－（縮尺1/4,000）

Copyright©Archaeological Research Center, Okayama University
Printed in Okayama, Japan

2016年３月３日　印刷
2016年３月３日　発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要
2014

編集・発行　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市北区津島中三丁目１番１号
（086）251－7290
印刷　友野印刷株式会社